れたのである、然しより問答し來ること尋常なりと始終問答參究に怠たることは無かつた。

有時青原拂子を擧して曰く。曹溪に還て這箇ありや。師曰く但曹溪のみに非ず西天にも亦無しと。古今擧拂して其端由を示し、或は機關を開き、或は人をして岐路を截斷せしめ、或は人をして速に直指せしむ。青原又示す即ち是れ試驗なり。然るを師未だ這箇の事を會得せず。尙ほ擧拂の處に眼を著て、乃曰く但曹溪のみに非ず、西天にも亦無しと。恁麼擧拂の處更に如何なる曹溪西天か立すべき。恁麼の所見尙ほ是れ境の話會をなす。故に青原抑へて曰く子曾て西天に到ること莫しや否や。然れども尙ほ此話を會せず。速に己を忘ずることなふして、又曰く若し到らば即有らん。設ひ既に道著すと雖も、若し有ることを知らずんば卒に是れ其人に非ず。故に又示して曰く未在更に道へと。實に大慈大悲にし來り拕泥帶水し來て、恁麼委悉に示す。

ある時青原拂子を拈擧して石頭に示し曹溪にも這箇ありやと試驗の箭を放たれた、石頭之に答へて但曹溪のみに非ず西天にも亦無しと云ふ、前の消息ありと云ふに反對して消息なしと云ふたと同一轍で、一往は釣竿を外したやうであるけれども、其實は曹溪にも拂子があるかと云ふ言句に捕はれて、曹溪ばかりではなく西天にもないと云ふたのは未だしであつた。一體に古今擧拂して其端由即ち宗乘の端緒を示すといふものは或は禪門の機關を開きて堂奧に誘引し或は從前の學解に拘泥せる岐路を截斷せしめ或は速に法の端的を直指せしむる爲めの方便である。今青原も亦石頭に轉身の一路を得せしめたいと思ふて拂子を擧せられたので即ち是れ試驗のためである。然るに師未だ這箇の事を會せず尙ほ擧拂の處に眼を着て其の擧措と言句に捕はれ但だ曹溪のみに非ず西天にも亦無しと云ふ、今青原祖が恁麼に擧拂せられたる處に更に何の西天か立すべき。畢竟この際に西天だの東土だのといふは尙ほ是れ境の話會をなすといふもので、つまり曹溪に這箇ありやと云はれた語路に捕はれたのである、故に青原之を抑へて曰く子曾て西天に到ることなしや否と、恰かも西天といふことに心を奪はれて居りはせぬかと云はれたやうなものである。然れども石頭は尙ほ此話を會せず速に己を忘ずることが出來ぬから、更に岐路を截斷するに由なく、若し到らば即ち有らんとやはり西天に附きまとふて居る、これが設ひ一應は既に無一物の的意を道著し得たるものとしても若し有ることを知らずんは卒に是れ其人に

非ず、有ることを知るといふは、今は大悟徹底の事有ることを知るといふべきを略した言葉と見れば領解し易い、現に石頭は未だ其境界に到り得て居らぬに依て、青原祖は未在更に道へと叱せられた。實に青原祖の大慈大悲拕泥帶水し來て恁麼に委悉に示す有様、慈母が子を愍みて己れの醜態を忘れて居るやうな姿である、拕泥帶水とは水に溺れる者を救ふが爲めに自分も水中に飛び込で泥を拕き水を帶びるをいふ。

此に自己安排の處なく、乃ち曰く和尚も也た須らく一半を道取すべし。全く學人に靠ること莫れ。殊に是の如く相見し、是の如く言說せば、共に一半を傳へて何ぞ全きを道取することあらん。設ひ乾坤既に崩壞して、擧體獨り露はるゝとも是れ尚ほ半路に到る。此處尚ほ他の手段を借るに非ず自ら着到す。何に況や半路に重て、一歩を進め、竊に密語を通ぜん時、敢て緣を借るに非ず。豈に他人に知らしめんや。唯自ら却て本得することあらん。故に示して日く汝に向て道ふことを辭せず。恐くは已後人の承當する無らんと。設ひ痛きことを語り辛きことを示すとも、若し他骨に徹する分なく、舌を破る分なくんば、卒に通路なし。故に言に因て承當する分なからん。是の如くなる故に知識は言妄りに施さず　行徒らに行ぜず、恁麼に護持し來る。然るを尚ほ物と共たらざる所なりと會して、密々に通處あることを知らず、細々に見取すること無ふして、乃ち曰く承當は無きにしも非ず人の道得する無しと。恐くは希遷是の如く言ふ。此田地に到て人爭でか道得なからん。若し此田地に到らん、何にか承當せん、尚ほ方外に求め來る徒らに內證を離却せり。故に早く恁麼の事あることを知らしめ、速に本來頭あることを知らしめん爲に、拂子を以て一打す。草を打て蛇を驚す。故に師即ち大悟す。

青原祖が是の如く委悉に慈誨せられても、石頭は尚ほ來だ自己安排の處なく、自己に反省して其脚下を照顧することが出來ぬ。元來最初青原祖が拂子を提起して曹溪にも這箇ありやと問はれた時に、其の這箇といふものは人々具足個々圓成底の大光明のことであると、眞實に自己に反省してあつたな

らば、斯くまでに青原祖の慈慮を勞さないのであつたらうに、其這箇よりも提起せられた拂子の方に心を奪はれ、曹溪といふ土地の名に思ひが傾いたから、西天にも亦無しと云へる言句に頗る力あるにも拘はらず、結局言句の上の問答になつてしまふた。乃で青原祖に未在更に道へと云はれたに對して、和尙も也た須らく一半を道取すべし全く學人すなはち私にばかり言はせて置かぬが好いと突込だ、試みに思へ師資是の如く相見し是の如く言說する場合に於て、相互ひに一半を傳へて居て何としてか其全體を道取することが出來やうぞ、設ひ乾坤既に崩壞したるが如く師資の差別を泯滅して宇宙の擧體全く獨り露はるゝが如きに至つたとしても是れ尙ほ半路といふものである、畢竟此處かゝる場合に於ては決して他の手段を借るべきに非ず自ら着到するの外はない。然るを何ぞや和尙もまた一半を道取せよとは何事ぞ、既に自ら着到すべきのところ何に況や其半路に重ねて一歩を進めて窃に密語を通じ徹底して證契即通しやうといふ時に到つては、敢て他の緣を借るべきではない況や他人に知らしむべきことで無いは無論のことである。是の如く他緣を絕對に離れたる時に、唯自ら却て本得することあらん、其れ故に青原祖は汝に向て道ふことを辭せず言て聞かせても好いけれども人から聞たのでは自分の物にはならぬ、恐くは已後人の承當する無らん大抵は人の言葉につき廻つて自己本來の面目を徹見することが出來ぬ。譬へば痛いといふことを幾ら語りても辛いといふことをどれほど話しても其れが其人の骨に徹する分なく舌を破る分なくんば卒に通路なし何の效もないやうなものである、故に知識は言妄りに施さず行徒らに行ぜず恁麼に護持し來て只々爲人度生に心を盡されるのである。然るに尙ほ石頭は物と共たらず、即ち他人の手を假らずして密々に通處あるべきものとも知らず、細々に見取するといふこともなく承當はなきにしも非ず人の道得する無しと何處までも言句は達者であるが、尙ほ來だ自己の脚下を顧みるに到らない。眞に此田地に到りさへすれば人いかでか道得なからん若し此田地に到らんに何にか承當せん、其實はもはや道得も承當も沙汰の限りではないけれども、恐くは希遷すなはち石頭是の如く言ふ尙ほ方外に求め來るので徒らに自己の內證を離却せり、青原祖は深く之を愍みて早く恁麼の事あるを知らしめ速かに本來の頭腦即ち本性あることを知らしめん爲に今度はもはや言句を棄てゝ突然に拂子を以て一打すと、非常の手段を用ゐられた、譬へば草を打て蛇を驚すやうなものである、此一刹那に石頭は心機始て一轉して豁然として大悟徹底せられたとある。

此因緣を以て始終の學知眞箇の徹證、子細に驗點し將ち來て、見ること細やかに到ること親しかるべし。既に唯曹溪のみに非ず西天にも亦無しと云ふ。乾坤破裂して全身獨露することを得ると雖も、尙ほ己を知る禍あり。之に依

て恁麼に言大なることを得たり。然れども終に擧拂の處に全身獨露することを知り、擊打の處に又有ることを知る。近來參禪の漢、徒らに聲色中に馳走し見聞の中に求覓して　設ひ佛語祖語を諳誦し聊か解路葛藤をなし、西天にも亦無く、曹溪にも亦無しと云とも、尙ほ得ることなし。若し是の如くならん、設ひ髮を剃り衣を染て自形を佛に似せたりとも、三界の獄縛卒に出ることなし。爭でか六道往來やむことを得ん。是の如きの類惜哉衲衣徒らに木頭に掛ることを。佛言く既に是れ佛子に非ず名くる所なし。木頭と異なることなしと云ふ此意なり。一生空く信施を費し、果して鐵丸を呑む憂をなさん時に、後悔定て多からん。

此の石頭が青原に參學し、青原が石頭を提撕せられたる因緣を標準として、始終の學知と眞箇の徹證との樣子を子細に驗點し將ち來らば、參學提撕の樣子を見ること細かに自ら其田地に到ることも亦親しかるべしと示された。若し唯學知の上だけのことならば、最初石頭が唯曹溪のみに非ず西天にも亦無しと云ふ此一言、既に能く乾坤破裂して全身獨露することを得て、謂ゆる這箇を粉碎し了たのであるけれども尙ほ己れを知る禍あり之に依て恁麼に言大なるに及んだので謂ゆる虛喝の弊に陷つたのである。然れども石頭は最初此の擧拂の處に既に全身獨露することを知り又最後擊打の處に於て有ることを知り大悟徹底するに至つた。然るに近來參禪の漢は徒らに聲色中に馳走し見聞の中に求覓して常に眼耳の爲めに勞し前境の爲めに囚はれて、豪も自由を得ることが出來ぬ、其やうな輩は設ひ佛語祖語を諳誦し聊か解路葛藤をなし得たからと云ふても、結局彼の西天にも亦無く曹溪にも亦無しと云ふほどのことも出來るものではない。若し其樣なものであつたならば、設ひ髮を剃り衣を染て自形を佛に似せたりとも、其實は三界の牢獄に墮在して其繫縛を受けて卒に出ることなし爭でか六道往來やむことを得んや、是の如きの類は惜いかな衲衣を徒らに木頭に掛けたやうなものであるから、佛は既に是れ佛子に非ず名る所なし木頭と異なることなしと經中に誡められてあるは即ち此意である。普通流布の本には此下に割註して「梵網經遺敎經の趣意」と書てあるけれども、古本には此割註がない、恐くは後人の書入が混入したのであらう。是の如き有樣の者では一生空く信施を費やし果して鐵丸を呑む憂をなさん其時になつてから後悔するもの定で多からんと實に痛切なるお誡めである。承陽高祖は常に遺敎經梵網經瓔珞經等を讀むべしと仰せられてあり、尙ほ 志 あるものは法滅盡經や蓮華

面經などを時々拜讀して慚愧の德を養ふべきである。

然れば委悉に參徹して、石頭最初に到りし獨露全身の處にも到り得ば、既に曹溪西天も無ことを得ん。何處にか往來せん。恁麼の見地卒に衲衣妄りに掛けず。況や擊打の處に有ることを知つて、速に己れを忘れ亦己れを知る。死中に能く活し暗裏に正眼明かなり。即ち是れ衲衣下密々の事なり。既に恁麼に知見せし故に、師唐の天寶の初に荐りに衡山の南寺に之く。寺の東に石牀の臺の如くなるあり。乃ち庵を其上に結ぶ。時に石頭和尚と號す。有時肇論を看て萬物を會して己れと爲す者は其れ唯聖人かと云に至て、師乃机を拊て曰く、聖人に己れなく己れならざる所なし。法身無象誰か自他を云はん。圓鑑靈照にして其間萬象體玄自ら現ず。境智一に非ず孰れか去來を云はん。至れる哉斯語やと、遂に卷を掩ふて覺えず寢ぬ。夢に自身と六祖と同く一龜に乘じ深池の内に游泳す。覺て之を詳にす。靈龜は智なり池は性海なり。吾と祖師と同く靈智に乘じて性海に游べるなりと、遂に參同契を著はす、天下昌に傳ふ。

されば誰人も委悉に參徹して石頭最初青原に到りし時の獨露全身の處にも到り得ることが出來たならば、既に曹溪も西天も無き處に到り得るのであるから何處にか往來せん決して三界六道に浮き沈みするやうなことは無い。乃ち恁麼の見地だけにても卒に衲衣を妄りに木頭に掛くるの罪は免かるゝことは出來る、況や更に擊打の處に於て有ることを知て速に己れを忘れ亦己れを知るの田地に到り得れば死中に能く活し暗裏に正眼明かなるを得るのであるから即是れ衲衣下密々の事と謂ふべきもので出家兒の能事畢るとも稱すべきである。石頭和尚は既に恁麼に知見するに到られたのであるから、唐の玄宗皇帝の天寶の初に荐りに衡山の南寺に之き寺の東に石牀の臺の如くなる處のあるのを見出して、其石の上に庵を結びて住居せられた、そこで世人が石頭和尚と號して其名を言はぬやうになつた。有時肇論を看た此れは姚秦の羅什法師の四哲の隨一に僧肇法師といふ高僧があつて、其人の書き貽された論である、石頭和尚それを看て其中に萬物を會して己と爲す者は是れ唯聖人かと云ふ處に至て机を拊

て喜で言はれたには、聖人は己れを忘れて萬物と一致する故に萬物皆己れならざる所なし、實に法身は無象である、既に形象がないに依て自他の差別がない、只々圓鑑靈照と明かなる鏡が能く物を照すやうなもので、鏡の面に現はれたる萬象その儘が有にして非有なるを以て本體の玄妙なる實相が自ら現ずと月も花も山も川も皆明かに道の全體大用を現じないものはない。されば云ふて其の萬物の境と我が心の作用の智とは一に非ず孰れか去來を云はん、境が智へ來たのでもなければ智が境へ往つたのでもない、然れども境智冥合して謂ゆる二にして不二である。斯く讀み來りて歎じて曰く至れる哉斯語やと云ひつゝ遂に卷を掩て覺えず寢てしまはれて、忽ち夢に自身と六祖と同く一つ龜に乘て深き池の内に游泳したと見た。既に其夢は覺ても之を詳にすと能く覺えて居て、偖考て見るに靈龜は智なり池の如く見えしは性海なり、吾と祖師と同く靈智に乘じて性海に游ぶと見た、誠に面白いと感ぜられて遂に參同契一篇を著述し、初祖以來具さに宗乘を文字に著はされたのは三祖の信心銘を第一として次には此の參同契を第二とするのである。故に天下昌に傳ふと、現に今我が宗内に於て寶鏡三昧と共に祖門第一の寶典と尊重せられてゐる。

實に靈智既に六祖と齊く青原と別なし因て是の如し。然のみならず有時上堂して曰く吾が法門は先佛の傳受、禪定精進を論ぜず、佛の知見に達す。即身即佛心佛衆生菩提煩惱名異にして體一なり。汝等當に知るべし自己の心靈、體斷常を離れ、性垢淨に非ず。湛然圓滿にして凡聖齊同なり。應用無方、心意識を離る、三界六道唯心自ら現ず、水月鏡像豈に生滅あらんや。汝能く之を知らば備はらざる所なしと。殊に是れ乾坤を崩壞せし獨立の所見に非ずんば恁麼なるべからず。擊打に承當し分明に見得せしに依て三十五祖に列す。

實に靈智は既に六祖と齊く青原と別なきのみならず三世諸佛も十方衆生も其實は皆異別がない、石頭和尚は斯の義を明かすが爲めに有時上堂して曰く吾法門は先佛の傳受として禪定精進の形式に涉ることを論ぜず其他すべての方法手段に拘はらず只其目的とする所は佛の知見に達するの外はない。其要は即身即佛に在る之を或は父母所生身即證大覺位とも云へば父母所生眼悉見三千界とも云ふのである、時に或は心といひ佛といひ衆生といひ又は菩提と名け煩惱と名ける其名は異なれども其體は一である、汝等當に知るべし自己の心靈は其體もとより斷常を離れ其性決して垢淨に涉るものではない、斷常といふは心體が斷滅するものと思ふのが斷見、心體が常住なるものと思ふのが常見、此の二見を都べて

の邪見の根元とするのである。承陽高祖は學道用心集に斷常の二見は我を以て本と爲すと示されてある、心體は本より無我である、故に斷常を離れたものである、斷常を離れて無我なるものであるから垢淨はない、垢といふは即ち煩惱の姿、淨といふは即ち菩提の姿、心體は都べて其の樣なる二邊對待の姿を離れて湛然圓滿にして凡夫も聖者も齊く同じである、而も應用無方にして如何なる邊にも其の光明を發揮しつゝ心意識の思量分別をば離れて居る。然るに三界といひ六道といひ煩惱業苦の相用の露はれるは唯心自ら現ずるので、其實體なきことは譬へば水に月の映ずるが如く鏡に像の現ずるが如きまでのもの、元來生滅に渉るべきものではない、汝能く之を知らば一切事理備はらざる所なしと垂示せられた。是の如きの垂示は殊に是れ乾坤を崩壞せし獨立の所見に非ずんは恁麼なるべからず、全たく青原祖に初相見の時から曹溪にも無く西天にも亦無しと喝破せられた見識に本づいたことである、更に又最後青原祖の拂子を以て一打といふ擊打に承當し分明に見得せしに依てこそ、遂に第三十五祖の祖位にも列せられたることになつたのである。

汝等諸人の靈性豈に他を隔ることあらんや。心地何ぞ通ぜざることあらんや。唯志を發すと發せざると、明師に遇ふと遇はざるとに依て、昇沈の形異に苦樂の品同じからず。 適來の因緣如何か見得する。**大衆聞かんと要すや。**

一提提起百千端。毫髮未曾分外擧。

さて石頭の靈智靈性が六祖に齊く青原と別なきのみならず、元來應用無方なるものであるに、汝等諸人の靈性のみ何とて他を隔ることがあらうぞ、佛祖の心地と吾等の心地何ぞ通ぜざることあらんや、唯その志を發すと發せざるとの間に天地懸隔するまでのことである。さて又設ひ其志は發したとしても、宿福つたなくして明眼の正師に遇ふと遇はざるとに依て佛地に上昇して眞樂に安住するか、又は其れと反對に惡趣に沈淪して苦報を感受するかの二途に形異に品同じからぬまでのことである。さて適來の因緣如何が見得する大衆聞かんと要すやと例の如く七言二句を着語せられた。一提に提起す百千端とは初め青原祖が拂子を提起して曹溪にも這箇ありやと撒問せられたる當體に、盡十方法界に充滿瀰淪せる三世常住の百千萬億一切の事理皆悉く一時に提起せられたのである、然るに石頭和尚さすがに間に髮を容れず、謂ゆる乾坤を崩壞して西天にも亦無しと全身獨露せられたところは一往道着し得たやうではあつたけれども、青原祖は容易に之を許さず、數番問答の末に遂に未在更に道へと叱斥せられ、結局拂子を以て一打に擊打せらるゝに及びて石頭明らかに轉身の一路を得て豁然大悟す

るに至つた様子を、毫髪も未だ曾て分外に攀ぢず一歩も岐路に入るを許さず、一指も他に攀縁せることを許さずと頌出せられたのである、文相大略是の如し、餘意は各自の參究に一任す。

第三十六章

第三十六祖弘道大師。參石頭問曰三乘十二分教某甲粗知。嘗聞南方直指人心見性成佛。實未明了。伏望和尚慈悲指示。頭曰恁麼也不得。不恁麼也不得。恁麼不恁麼總不得。子作麼生。師罔措。頭曰子因緣不在此。且往馬大師處去。師稟命恭禮馬祖。仍伸前問。祖曰我有時教伊揚眉瞬目。有時不教伊揚眉瞬目。有時揚眉瞬目者是。有時揚眉瞬目者不是。子作麼生。師於言下大悟。便禮拜。祖曰儞見甚麼道理便禮拜。師曰某甲在石頭處。如蚊子上鐵牛。祖曰汝既如是。善自護持。雖然汝師石頭。

以上本章の本則、以下太祖の御提唱例の如し。

師諱は惟儼。絳州韓氏の子なり。年十七潮陽の西山慧照禪師に依て出家し、衡嶽の希操律師に納戒す。博く經論に通じ戒律を嚴持す。一日自ら歎じて曰く大丈夫當に法を離て自淨なるべし。誰か能く屑々として細行を布巾に事とせんや。首め石頭の室に造る、便問ふ三乘十二分教は某甲粗知る。乃至善く自ら護持せよと。

三十六祖は諱を惟儼といひ後に藥山に住せられたに依て、常に藥山禪師とばかり謂はれて居る、絳州といふ處の韓氏の子であつた。十七の時に潮陽の西山慧照禪師に依て出家し衡嶽の希操律師から受戒せられた、初めは博く經論に通じ戒律を嚴持すとあつて、頗る學業堅固なる教家の高僧となるべき人であつた。一日自ら歎じて曰く苟くも大丈夫たらん者は、他人に强制せられるやうな法の束縛を離れて自淨と自分の身心は自分で淨めるやうに修行すべきである、誰か能く屑々として細行を布巾に事とせんや、屑々と云ふは不安の貌とも云ふて、謂ゆる薄氷を履むが如くに細かい行狀に氣をつける姿である、布巾とある巾は謹なりといふ註もあつて禮儀を謹むことである、乃ち律僧として教相を學ぶことを止めて首め石頭の室に造る無際大師の坐下に至り、便問ふ三乘十二分教といふが如き經論の學問は粗知る大抵心得て居りまするが、近來嶺南の方に於ては直指人心見性成佛といふことを傳へられると承はる、其事は實に未だ明了ならず伏て望らくは和尚慈悲指示したまへと願ふた。三乘といふは聲聞乘と緣覺乘と菩薩乘、この三乘を經て始て佛乘に入るのが教家普通の教相である、十二分教といふは契經と應頌と授記と諷誦と因緣と自說と本事と本生と方廣と未曾有と譬喩と論議との十二を以て經教の說相を該攝したのである。藥山が是の如くに問ふに對して石頭祖は恁麼も也た得ず恁麼ならざるも也た得ず恁麼なるも恁麼ならざるも總に得ず子は作麼生と問ひ返された、斯うしてもいけん、斯うしないでもいけん、斯うしても斯うしないでも皆いけぬ、其方は何うするぞと云ふのである。今までは理窟づくめの教相ばかり研究して居た藥山には、結局何のこととも合點がゆかぬ、乃ち師措く罔し手の著けやうがなく茫然とした樣子である。そこで石頭は之を諭して子が緣は此に在らず且らく馬大師すなはち馬祖山の道一大師の處へ往けと云はれた。藥山は命を禀て馬祖を恭禮し仍て前問を伸ぶと前に石頭に問ふた通りに問ふた、然るに馬祖は之に對して有る時は伊をして揚眉瞬目せしめ、有る時は伊をして揚眉瞬目せしめず、有る時は揚眉瞬目する者是にして、有る時は揚眉瞬目する者是ならず、子は作麼生と問返された。揚眉瞬目といふは眼をばちくりさせるといふことであるけれども其れには限らぬ、手を擧るとでも足を運ばせるとでも、又は坐すとでも臥すとでも語を換へて見るも好

い、一體に伊といふは何のことであらうぞ、これも亦假りに他の字に換て見れば或時は他をして坐せしめ或時は他をして坐せしめず、或時は坐せしむるが好くて或時は坐せしめざるが好いのであるが、其方は何うするぞと云ふのである、此の馬祖の反問と前の恁麼不恁麼の石頭の垂示と同じであらうか別であらうか。之を聞た藥山は前には措くこと罔しとあつたのが今度は言下に於て大悟し便ち禮拜すとある、因縁といふものは如何にも不思議なものである、馬祖は藥山の禮拜するのを見て儞甚麼の道理を見てか便ち禮拜するやと問はれた、藥山は某甲石頭の處に在て蚊子の鐵牛に上るが如し一向に其法味を嚙み締ることが出來なんだが今日始て其味はひを知ると云ふ、馬祖は之を許して汝既に是の如し善く自ら護持せよと證明せられ、尙ほ然りと雖も汝が師は石頭なりと師資の契約を記莂せられた。

侍奉すること三年、一日祖問て曰く子近日見處作麼生。師曰皮膚脱落し盡して唯一眞實のみ有り。祖曰く子が所得、謂つべし心體に協て四肢に布けりと。既に然り、是の如く、將に三條の篾もて肚皮を束取して隨處に住山し去れ。師曰く某甲又是れ何人なれば敢て住山せよと言ふや。祖曰く然らずんば未だ常に行て住せざること有らず。未だ常に住して行かざること有らず。益せんと欲すれども益する所なく、爲さんと欲すれども爲す所なけん。宜く舟航と作て久く此に住すること無かるべし。師乃ち祖を辭して石頭に返る。

かくて藥山は馬祖の印可を受たる後尙ほ馬祖の左右に侍奉すること三年ゆたかに聖胎を長養し、請益怠たるところがなかつた。一日馬祖問て曰く子近日見處作麼生近ごろ何ぞ異つた考へでもないかと云はれた、藥山これに答へて皮膚脱落し盡して唯一眞實のみ有り迷ひも悟りも修も證も全く忌れてしまふて唯々是の如くに喫茶喫飯して居るのみでありますと云ふ。馬祖また之を許して子が所得は心體に協て四肢に布けりと謂ふべしと證明せられた、能く心體には協ふても能く四肢に布て行住坐臥に其心體の光明が發揮せぬければ殆ど枯木死灰と同樣である、然るに今藥山は體用ともに穩健に活動して居る。そこで馬祖は既に然り、是の如く誠に安心なる境界に成たからには、將に三條の蔑もて肚皮を束取して隨處に住山し去れ、自利の修證は已に了畢したに依て、是れから利他度生の仕事に取りかゝるが好いぞと云はれたのである。篾もて肚皮を束取するといふは日本の俗語に犢鼻褌をしめてかゝれといふほどのことである、篾の字は竹の皮といふ字で古人の詩に肚束三條篾腰纏十萬錢などと云ふたの

もある、藥山は某甲又是れ何人なれば敢て住山せよと言やと謙遜辭退した。馬祖は更に之を諭して然らずと之を抑へ、凡そ誰にもせよ未だ常に行て住せざること有らず未だ常に住して行かざること有らず、要するところ住のみのものもなければ行のみのものもない、然るに只此に滯つて居ては、人に利益を施そうにも利益すべきなく、何事をか爲さんとしても爲しやうがない、宜く舟航と作て衆生濟度に力を盡すが好い決して久く此に住すること無かるべしと懇囑せられた、師乃ち祖を辭して石頭に返ると久しぶりで本師たるべき無際大師の坐下に歸省せられた大師の喜びも如何ばかりで有つたらう。

一日在坐の次で、石頭問て曰く汝這裏に在て什麼をか作す。師曰く一切爲さず、頭曰く恁麼ならば即ち閑坐せり。師曰く若し閑坐せば即ち爲せり。頭曰く汝道ふ爲さずと、箇の甚麼をか爲さざる。師曰く千聖も亦識らず。頭偈を以て讃して曰く、從來共住不レ知レ名。任運相將只麼行、自レ古上賢猶不レ識、造次凡流豈可レ明、後に石頭垂語して曰く、言語動用沒交渉、師曰く言語動用に非ざるも亦沒交渉、頭曰く我が這裏針劄不入。師曰く我が這裏石上に華を栽るが如し。頭之を然りとす。後に澧州の藥山に居す。海衆雲會す。

或時藥山が坐禪して居る處で石頭問て曰く汝這裏に在て什麼をか爲す、師曰く一切爲さず、何にも致しません、其れでは閑坐して居るのか、いや若し閑坐して居たならば、其れは閑坐してゐるのであつて、何にもせぬとは言はれません、そこで石頭は更に汝は一切爲さずと道ふ其れは何を爲さぬといふのであるぞ、師曰く千聖も亦識らず是れは三世の諸佛も御存知の無いことで御座ると云ふ。石頭大師大に之を讃歎せられて一偈を附授せられた。從來共に住して名を知らず、任運相將ゐて只麼に行く、佛祖の命脈一切凡聖の體性たる涅槃妙心は佛祖も衆生も無始劫來同牀に共に住し同牀に起臥して居りながら、此れは如何なるものとも其名すら知らぬのである、元來名けやうもなければ形容しやうもないからである。其名も知らぬ其儘に任運に相ひ將ゐて、寢ても起きて諸共に只麼に行く、只麼といふは只是の如くといふも同じことである。此物はたして如何なるべきといふことは古より上賢も猶ほ識らず、況や造次の凡流豈に明むべけんやと、今藥山が千聖も猶ほ識らずと云ふたのを印可證明せられたのである、古來最高上の賢者も亦之を識得することが出來ぬ只だ超關の大聖のみありて之を證得す況や造次の凡夫者流の明らむる處では無い、造次とは尋常といふに同じ。偖又其後のことであつたが

石頭祖が垂語せられて言語動用沒交涉沒交涉は今時の無關係といふに同じ、一切の言語も動作運用も這箇一大事因緣とは關係のないものぞ、故に如何なる言語動用に在ても決して言語動用を以て一大事因緣を決了し、便ち大悟徹底することの出來るものでは無いぞよとの御示しである。然るに藥山は之に對して言語動用に非るも亦沒交涉、然らば一切動用を離れたならば、其れで大悟徹底することが出來るかといふに、其れも亦た沒交涉であると云ふのである、そこで更に石頭祖は我が這裏針劄を入れず劄の字は鉤と同じ意味の字で、今は針の尖で衝く隙間もないぞといふことで、間に髮を容れずと云ふも同樣のことである、言語動用も世間出世間も迷執悟得も一切放下底の消息である。然るに藥山は之に對して我が這裏は石上に華を栽るが如しと云ふた、不可得の中只麼に得たりといふ無我の大我底の消息である、謂ゆる沒蹤跡の姿すなはち囘互と不囘互と囘して而して相渉る樣子、頭之を然りとす亦其證明を博し得られた、後に澧州の藥山に住す海衆雲のごとく會まると曹溪青原の宗風こゝに至りて益々盛んになつた。

適來の因緣を以て、青原南嶽兩家各別なきこと分明に知りぬべし。實に是れ曹溪の兩角。元是れ露地の白牛。迥々なる者なり。彼に參じ此に明らめ、彼に通じ此に繼ぐ、絲毫も差はず、故に最初に問ふ十二分敎は粗ぼ知れり。直指人心見性成佛の旨如何と。正に此田地を云ふに、恁麼也不得、不恁麼也不得、恁麼不恁麼總不得と、此に到て自も安排の處なし。他も疑ふ所に非ず。故に是の如く指說す。然れども此田地正に不可得の處を執し來る。故に言下に未だ趣を知らず。良や佇思す。時に馬師をして代て說かしめんとして指て江西に至らしむ。江西果して此心を會せしかば、乃ち代て曰く伊をして揚眉瞬目せしめ、揚眉瞬目せしめず。或は是或は不是、時に隨て區々なることを示す。時に此處を覺悟し、實に揚眉瞬目より見聞覺知動用去來に至るまで、悉く有ることを知りぬ。便ち禮拜す。祖曰く儞甚麼の道理を見て便ち禮拜するや、師曰く某甲石頭の處に在て蚊子の鐵牛に上るが如しと、觜を挿むことなし。見知盡き情解失す、自ら不知と雖も是れ實人なり。

適來の因緣とは藥山初め石頭に參じ其指示に依て馬祖の言下に悟り又石頭に返りて嗣法したるの因緣

をいふ、此一段の因縁を以て青原と南嶽との兩家決して各別のもので無いといふことを分明に知りぬべしとある。青原行思和尚は六祖の法嗣であつて其の嫡嗣が石頭であると同時に、南嶽懷讓和尚も亦六祖の法嗣であつて其嫡嗣が馬祖である、即ち石頭と馬祖とは法の上の從兄弟であつて互ひに其參學の徒を交換して提撕せられたことは、此因縁を以て其例證とすべく、其の宗乘擧揚の狀況にも決して差別なきことも亦此因縁を以て分明に了知すべきである。然るに後に至て青原の法孫に洞山大師を出だし、南嶽の法孫に臨濟大師が出られたけれども尚ほ共に曹溪の宗風を單純に擧揚せらるゝに於ては決して別異がなかつたのが、宋朝の後に至りて南嶽下に徑山の大慧禪師あり青原下に天童の宏智禪師あり、此二師の家風聊か粗密を以て其樣子を異にし恰かも修竹と幽蘭との如き姿ありしを、其門下の者も又他の世人も只其形容だけを見て其精神を詳かにせず、遂に兩家の間に根本から各別の異あるが如く速了し去て以て今日に至り互ひに相誹謗するに及びたるを、太祖痛く慨歎せられて夙に此警告を發せられたので兩家實に是れ曹溪の兩角元是れ露地の白牛迥々なる者なり、彼に參じ此に明らめ彼に通じ此に繼ぐ絲毫も差はずと證言せられたのである。露地の白牛といふこと露地は屋外のこと白牛は法華經には大乘の法に喩へてある、迥々は獨立の貌、今こゝでは誠に明瞭であつて、誰も見誤る者はないといふ意味である。故に藥山は最初に問ふ十二分敎は粗ぼ知れり直指人心見性成佛の旨如何と、石頭は正に此田地をいふに恁麼也不得不恁麼也不得恁麼不恁麼總不得と擧示せられた、實に此に到てとは直指人心見生成佛の意旨に於ては自も安排の處なし他も疑ふ處に非ず其他一切沒交涉であるに依て是の如く恁麼不恁麼總不得と指說せられたのである。然るに藥山は此田地に於て只不可得の處のみを執し來つたに依て言下に未だ玄趣を知るに到り得ず良や佇思すと即ち措くこと無かつたのである。石頭は已むを得ず馬師をして己れに代て說かしめんとして指して江西に至らしむ江西は即馬祖山の所在地である、江西の馬祖果して此心を會せしかば乃ち代て曰く伊をして揚眉瞬目せしめ又伊をして揚眉瞬目せしめず、或は是或は不是、時に隨て區々にして圓通無礙なることを示す、藥山は此馬祖の一言下に忽ち大悟徹底して揚眉瞬目より見聞覺知動用去來一切時一切處一切事を通じて一大佛光明なるを以て自己の正法眼藏ならざるは無し。かく悉く有ることを知りぬ有ることを知るとは例の如く何事も皆涅槃妙心實相無相の顯現であるといふことが眞實に會得せられたのである、便ち禮拜して恩を謝した、祖曰く儞何の道理を見て便ち禮拜するやと更に點檢せられる、藥山は某甲かつて石頭に在て蚊子の鐵牛に上るが如くでありましたと云ふ、實に是れ觜を挿むことなし見知盡き情解失したる樣子である。此時藥山未だ自ら不知と雖も其の見地盡き情解失し了りて觜を挿む所なかつたのが即ち是れ眞實人なり眞實參究の力が充實して居たので全く大死一番底の消息であつて、眞實の道人ならで

は能はぬことであるが、併し今ひときはといふところを馬祖の言下に裂破せしめられたのである。

祖後に問て曰く子近日見處作麼生。此に一點の塵なく、纖毫の疵なきことを識得して乃ち曰く皮膚脫落し盡して唯一眞實のみありと。實に參學此田地に到り得ること大に難し。之に依て委悉に褒めて曰く、子が所得謂つべし心體に協ひ四肢に布くと。處として到らざる所なく物として通ぜざる所なし、卒に一切不爲の道得に到るまで、千變萬化の受用區々なりと雖も、石上に華を栽るに似て、蹤跡なきことを知る。實に最初に直指人心を疑ひ求むるに揚眉瞬目する者を示さるゝに大悟し、爲衆說法せしに、我今汝が爲に這箇の語を說て無語底を顯はす。他の那箇本來耳目等の貌なし。實に初中善其實處ある故に、後善實處を示して他の爲めにす。

其後に馬祖が藥山に子近日見處作麼生と問はれた、藥山は既に自ら一點の塵なく纖毫の疵なきことを識得して居られるから、何の思慮も分別も加へない、直に答へて皮膚脫落し盡して唯一眞實のみありと云ふ、誠に淨裸々赤灑々、毫も粉飾なき丸はだかの眞面目である、實に參學此田地に到り得ること大に難しと、太祖は吾人に警告せられた。馬祖は之に依て委悉に藥山を褒めて子が所得謂つべし心體に協ひ四肢に布くと稱讃せられた。承陽高祖の身心脫落とあるは、此の心體に協ふたところ、更に脫落身心とあるは、此の四肢に布くところである、四肢といふは兩手兩足であるから、其の心體に協ふた悟りが、日用光中の起居動作に活現することを云ふのである。參學徹底して此に到れば處として到らざる所なく物として通ぜざる所なしであるから、此後石頭の處へ返つてから一切爲さずと道得するに到るまで千變萬化の受用もとより區々であるけれども、結局遂に石上に華を栽るに似て蹤跡なきことを知るに及ばれたのである。さて又後に澧州の藥山に出世住山して、爲衆說法するに及びては我今儞が爲に這箇の語を說て無語底を顯はすと云はれた。此の無語底の語といふこと、審細に味はふべきである、非思量底の思量といふも、無所得中の所得といふも、皆同一意味である、更に藥山は他の那箇本來耳目等の貌なしと云はれた、那箇とは謂ゆる本來の面目、此の本來の面目には耳目底の耳目は無い、但し無耳目底の耳目は、謂ゆる四肢に布かれて一切聲色に應用無邊である。實にから以下は太祖の御提唱、初中善其實處あると云ふは、初め直指人心に疑問を發し、中ごろ馬祖の言下に大悟した此の初も中も皆其實處を得てゐるから、後善實處を示すとは即此の爲衆說法に無語底の語を以て

他の爲めにするに及ばれたのである。

然れば諸の參學の人藥山の如く參ずべし。祖師何れも其德勝劣なしと雖も、特に藥山は其機を接すること高く、己を守ること簡約なるに依て、藥山は二十衆に滿たずと云ふ。衆多からざることは其の簡約なるに依て是の如し。人の飢寒に堪えざるに依て然るなり。然れども雲巖、道吾、船子、高沙彌、甘行者、李翺公に至るまで、有道の緇素多し。然れば學者としては委悉に參得せんを先として、世緣の厚薄を顧みず。之に依て雲巖、道吾、船子等三人志を同し、四十年脇席に着けず。有道の會に非ざれば恁麽の衲子なし。諸禪德彼の雲巖道吾と兄弟たらんことを願ひ、馬祖石頭に參到せんことを思ふべし。

諸の參學の人藥山の如く參ずべし、從上三十餘代の祖師何れも其德勝劣なしと雖も特に藥山は其機を接すること高く己を守ること簡約であつた。機を接すること高しといふは、參學の徒をして嶮峻にして容易に攀ぢ登ることを許されなかつたのである、己を守ること簡約とは其生活の狀態甚だ枯淡貧窮であつたのである。其れ故に藥山は二十衆に滿たずと云はれ、二十人以上の衆徒は隨學し得なかつたのは、其簡約なるに依て人の飢寒に堪えざるに依て然るなり、然れども雲巖、道吾、船子、高沙彌甘行者、李翺公に至るまで有道の緇素多し、雲巖といふは此次の第三十七祖であるから次章で明かに分る、道吾といふは諱を圓智といひ豫章の張氏の子、法を藥山に嗣で、潭州の道吾山に出世し、唐の文宗皇帝の太和九年に寂し、後に勅して修一大師と諡號を賜はつた。船子は名を德誠といふ嘗て華亭の吳江に舟を浮べて居た、故に世人これを船子和尚と呼ぶ、後に舟を棄て去り終る所を知らずといふ。高沙彌は傳燈錄の第十四卷に傳ありて藥山に參じた因緣は明かであるけれども其俗緣等は分明でない。甘行者は傳燈錄の第十卷に池州の甘贄行者とあつて、南泉禪師の法嗣に列せられてある。李翺公は朗州の刺史で姓は李、名は翺といふ、藥山に參じ初めに問て曰く如何なるか是れ道と、藥山手を以て上下を指して會すやといはれた、翺曰く不會、藥山曰く雲は青天に存り水は瓶に在り、翺欣然として禮を作し一詩を呈す、曰く、練レ得身形一似二鶴形一、千松松下兩函經、我來問レ道無二餘說一、雲在二青天一水在レ瓶、委いことは傳燈錄の第十四卷に在る。然れば是等の人々は學者としては委悉に參得せんことを先として世緣の厚薄をば顧みず、雲巖道吾船子等三人は志を同し四十年長坐不臥脇席に着けずといふの行持があつた、尤も有道の會に非ざれば恁麽の衲子なし往昔已に然り今時は絕無である、然れば

諸禪德彼の雲巖や道吾と兄弟たらんことを願ひ馬祖や石頭の境界に參到せんことを思ふべきであるぞとのお勸めである。

見ずや揚眉瞬目せしむる者是なり不是なりと。彼の田地疑ふに非ず。人々既に具足し來る。那處を知らんとするに既に耳目の貌なし。故に見聞に辨ずべきに非ず。一切都べて不爲なり。然も從來共に住し來て卒に名を知らざる者なりと雖も任運とし將て來る。然のみならず汝をして生ぜしめ、汝をして死せしめ、汝をして去來動用せしめ、汝をして見聞覺知せしむ。是れ正に這箇なり。分外に正法を求むべからず。豈に他時に見性を期するあらんや。設ひ三乘十二分教も、恁麼の道理を示す、大凡一切衆生も恁麼に受用不斷なり。豈に證據を他に求むべけんや。知るべし汝正に揚眉瞬目なからんや、只彼の見聞覺知する者を見得せば、天下老和尚の舌頭を疑はじ、且らく如何が此道理を注脚し去らん。

平生活潑潑那漢。喚作揚眉瞬目人。

能く考へて見るが好い彼の馬祖が揚眉瞬目せしむる者是なりとか不是なりとか云はれたが、其れは何も別段に疑ふべきものでもなければ、怪むべきものでもない、人々誰でも皆既に具足し來つてゐるものである、只那處すなはち其物を知らんとするに其物には耳もなければ目もないから見聞を以て之を辨ずべきに非ず且又一切不爲で如何なる手段も方便も及ばない、其れならば遠く離れてゐるのかといふに從來共に住し來て居る、共に住してゐるけれども卒に名も知らざる者である、名も知らざる其儘に、任運とし將て來る暫時も離るゝ時はない。然のみならず吾人をして生ぜしめ又死せしめ去來動用せしめ見聞覺知せしむ皆是れ此の這箇の仕事である、這箇何物ぞ、人々具足箇々圓成して、共に住し共に行てゐるのである。然らば分外に他に向て正法を求むべきではない、朝な夕な這箇と同起同臥してゐる豈に他時に見性を期するあらんや決して未來に成佛を期するに及ばぬ、藥山は最初三乘十二分教は粗ぼ知れりと云ふたが、其の三乘十二分教も亦恁麼の道理を示したまでのものである。大凡一切衆生の千緒萬般も亦皆恁麼の受用不斷の外はない、敢て證據を他に求むべきではない、試みに思へ誰か復た日々夜々に揚眉瞬目なからんや又誰か事々物々に見聞覺知なからんや、其の見聞覺知する者、

果して是れ何物なるかを確かに見得せば天下の老和尚が何と云はうとも、決して疑ふ所がなくなるのである、且らく如何が此道理を註脚し去らんと、例の七言二句、平生活潑々の那漢、喚て揚眉瞬目の人と作す、平生活潑潑の那漢といふは飯に逢ふては飯を喫し、茶に逢ふては茶を喫し、手に在ては執捉自由に脚に在ては運奔無礙なる大丈夫兒の男といふこと、即ち吾も人も亦た斯くあるべきはずのもの、其れが即ち揚眉瞬目の人といふものだとの意趣、唯凡情を盡くせば別に聖解なしといふ古語の通り、今も只凡情を盡し得たる者を名けて活潑々の那漢とも揚眉瞬目の人とも云ふのである、本章には藥山惟儼禪師の入寂を記してないが、師は唐の文宗皇帝の太和八年二月八十四歳にて入寂せられ、勅して弘道大師と諡號を賜はり又其塔を化城塔と稱せしめられたと傳燈錄に見えてある。

第三十七章

第三十七祖雲巖無住大師。初參侍百丈二十年。後參藥山。山問百丈更說甚麼法。師曰百丈有時上堂。大衆立定。以柱杖一時趁散。復召大衆。衆回首。丈曰是甚麼。山曰何不早恁麼道。今日因子得見海兄。師於言下大悟。

以上本章の本則、以下御提唱例の如し。

師は、鍾陵建昌の王氏の子なり。少して石門に出家す。百丈海禪師に參ずること二十年。因緣契はず。後に藥山に謁す。山問ふ甚麼の處よりか來る。師曰く百丈より來る。山曰く百丈何の言句有てか衆に示す。師曰く尋常曰く我に一句子あり百味具足すと。山曰く鹹は則ち鹹味。淡は則ち淡味。鹹ならず

淡ならず是れ常味。作麼生か是れ百味具足底の句。師無對。山曰く目前の生死を奈何せん。師曰く目前に生死なし。山曰く百丈に在ること多少の時ぞ。師曰く二十年。山曰く二十年百丈に在て俗氣だも也た除かず。他日侍立する次で山又問ふ百丈更に甚麼の法をか説く。師曰く有時道ふ三句の外に省し去れ。六句の外に會取せよと。山曰く三千里外且喜すらくは沒交涉。又問ふ甚麼の法をか説く、師曰く有時上堂。乃至師言下に於て大悟す。

第三十七祖雲巖無住大師は名を曇晟といひ鐘陵の建昌といふ處の王氏の子であつた、少して石門に出家す。百丈の海禪師に參ずること二十年、百丈禪師は名を懷海といひ前章の馬祖の法を嗣ぎ百丈山に住して始めて禪林の規則を定められた人である。雲巖は其會下に二十年參學したけれども因縁契はず遂に去て藥山に謁した。初め藥山に何れより來ると問はれて百丈より來ると答へた、山曰く百丈何の言句か有て衆に示す、師曰く尋常曰く我に一句子あり百味具足すと、所謂萬德圓滿の功德藏である。藥山之を聞て直に拶問し鹹は則ち鹹味であり淡は則ち淡味である、又鹹ならず淡ならざるは常味といふもの、其外に如何なる味のものを以て百味具足の句といふのであるぞ、雲巖は此間を受けて何とも答ふることが出來なかつた。藥山は其樣なことで目前の生死を奈何せん、三界の苦縛恐くは免かれ難し、生死の流轉を如何にするぞと詰られた、雲巖纔かに口を開て目前に生死なしと答へたが可惜乎言行一致を缺て居る。藥山は機を一轉して百丈に何年居たぞと問ひ二十年と答ふるを聞て、二十年百丈に在て俗氣も也た除かず小理窟を並べて俗臭紛々であるぞと叱斥せられた。雲巖は是から益々勉勵して參究したことであつたらうが、他日侍立する次で藥山又問ふ百丈更に甚麼の法をか説く、師曰く有時道ふ三句の外に省し去り六句の外に會取せよと、三句といひ六句といふも別に其三句とか六句とかいふ言句のあるわけではない、只何事でも數目に涉り對待に落る言句伎倆の外に會取し去れといふのである、藥山これを聞て、其樣なことを云ふて居ては三千里外甚だ遠い、恐らくは一大事因縁と沒交涉何の關係もあるまいぞと斥ぞけられた。又或時突然に更に甚麼の法をか説くと問はれ、雲巖は百丈有時の上堂に大衆すでに各自の班位に立定したのを見て、直に柱杖を以て一時に趁ひ散らされた大衆が已に班位を離れて堂外に遁げ出すのを見て復々大衆と召して喚び返す、大衆が聲に應じて首を廻らす途端に是れ甚麼ぞと言はれたことがありますと云ふ。藥山これを聞て何ぞ早く恁麼に道はざる今日子に因て百丈の懷海兄を見ると得たりと。百丈の大精神に相見したその一語、君子は千里同風である、雲巖は其の言下に於て豁然として大悟せられたといふのは即ち本章の本則である、其の道理は次

下太祖の御提唱に於て分明である。

夫れ參禪學道本より心を明らめ旨を悟るを以て其指要とす。故に雲巖和尚も百丈に在て參じ來ること二十年、然れども因緣契はず、後に藥山に參ず。然れば必ずしも久習修學も善みすべからず、只心を明らむるを以て本とす。又因緣契當すること、初心に依らず後心に依らず、宿緣然らしめて是の如し。百丈是れ其人ならざるに非ず。自ら因緣契はざるのみなり。

先づ初め雲巖和尚が百丈の處に於て因緣の契はざりし所以を示される、夫れ參禪學道は本より心を明らめ旨を悟るを以て其指要とす若しも心性を明らめ玄旨を悟ることが出來ぬとしては、設ひ如何なる大善知識の座下に幾十年の長き間參究しても何の詮もない、故に雲巖和尚も百丈に在て參じ來ること二十年の久きに渉つたけれども、遂に因緣契はず已むを得ずして後に藥山に參ずることになつた。其うして見れば必ずしも久習修學も善みすべからず教家などでは久修業といふことを尊ぶ邊もあるが、如何に久く習學修行しても契はぬものは契はぬので、設ひ暫時の間にでも只心を明らむるを以て本とするのである、さて又其因緣契當といふことは、初心に依らず後心に依らず宿緣然らしむる者は、初發心時便成正覺と忽ち證契するもあれば、又十劫坐道場不得成佛道といふも畢竟宿緣の然らしむる所である。故に雲巖が百丈の處に二十年參じて旨を得られなかつたといふに、決して百丈是れ其人ならざるに非ず畢竟只是れ宿緣契はざるのみのことであつた、要するに是れは雲巖の修證未だ成熟の時に至らなんだのである、若しその機熟すれば桃花の下にも擊竹の邊にも大事を了畢すべきものである。

夫れ善知識として徒らに衆を集め人をはごくむに非ず。只人をして直に根源に透り、速かに本分に承當せしめんとす。故に古人必ず何れの處よりか來ると云ふ。夫れ徧參は知識を試みんとし、來處を辨へんとす。又來りて何事の爲にかせんと問ふ。其志の淺深を明らめ、其緣の遠近を知らんとす。故に今も何れの處よりか來ると問ふ。彼に參じ此に參じて、徒らに山水に經歷せざることを露はさん爲に、乃ち曰く百丈より來れりと。藥山百丈同く出世して

青原南嶽角立せり、因に百丈何の言句ありてか衆に示すと問ふ。此に於て雲巖若し其人ならば自ら聞き得る底の事を擧説すべきに、只聞く底の事を説て曰く尋常道く、我に一句子あり百味具足すと。那一句子具足せずといふことなく圓滿せずといふことなし。然りと雖も人の那一着を聞得すや否や。子細に知見せん爲めには、鹹は則ち鹹味、淡は則ち淡味、不鹹不淡是れ常味、作麼生か是れ百味具足底の句と問ふ。果して聞得底の事に非ず。父母所生の耳を以て、徒らに蝦蟇の口説を聞くに依て、茫然として答處を知ることなし。

夫れ善知識として法幢を建て衆僧を接化することは只從らに衆を集め人をはごくむ無料宿泊所の如きものではない只人をして直に心性の根源に透り速かに衲僧たるの本分に承當せしめんとするのである、故に古人必ず新到の人を接するに當りては何れの處より來ると其履歴を問ふのである。一體に衲僧の徧參といふものは天下の知識を試みんとするのであるから又其の來處を辨へるのが肝要である、又こゝへ來りて何事の爲にかせんと問ふのである、此れは其志の淺深を明らめ其緣の遠近を知らんとする爲めである、故に今藥山が初めて雲巖を接するにも、先づ何れの處よりか來ると問ふ、雲巖も亦彼に參じ此に參じて處々を行脚するのは、決して徒らに山水に經歷する遊山玩水の爲めではないのであるから、正直に百丈より來れりと答へた。藥山も百丈も同時に出世して祖道を擧揚せられ、藥山は青原の嫡孫であり、百丈は南嶽の嫡孫であるから、法の上の從兄弟が各々一方に角立して居られたのである。乃ち藥山は雲巖に向て百丈に何の言句ありてか衆に示すと問はれた、此れは百丈の言句を問ふのではない、雲巖が如何やうに百丈の提示を聞き得て居るかを試驗するのである、故に雲巖若し其人ならば自ら心に聞き得る底の事を擧説すべきであるに、殘念なことには只其耳に聞く底の事のみを説て曰く百丈は尋常衆に示して我に一句子あり百味具足すと曰ふと擧するに過ぎず、實に此の那一句子に一切具足せずといふことなく萬德圓滿せずといふことなけれども、雲巖が果して能く其の那一着を聞得て居るや否や、其れを子細に知見せんが爲めに藥山は鹹は則ち鹹味なり淡は則ち淡味なり若し又鹹ならず淡ならずとせば是れ常味なり作麼生か是れ百味具足底の句と問ふ、雲巖果して心に聞き得たる底の事に非ず、只父母所生の耳を以て從らに蝦蟆の口説を聞くが如きものであつたから茫然として答處を知らざる有樣であつた。此本文の次に「是れ藥山行脚より以來修道すること幾年ぞと問ふに、答て曰く二十年と、實に是れ古人道の爲に修練せし十二時中徒らなる時節なしと雖も、今の如きは二

十年徒らに差過するに似たり」といふ七十八文字がある、されど後に同一の文があり又前に擧げたる藥山と雲巖との問答往復に對照すれば前後して居ることが明らかであるから、重複に出でたること疑ふべからず、依て今や以上五十八文字は本文より削除することゝ致したのである。

之に依て藥山曰く目前の生死を奈何せんと。實に是れ初心晩學一大事とすべき所なり。無常迅速生死事大なり。設ひ發心行脚して方袍圓頂の形を具すと雖も、若し生死の事を明めず解脱の道に達せずんば、衲衣下密々の事あることを知らず。故に三界の攀籠、出ることなく、生死の窠臼、免れ難し。實に是れ衲衣徒らに掛たるが如し、應器徒らに持せるに似たり。故に古人人をして閑工夫の時節なからしめ、手脚穩かならしめんとして恁麼に問ふに、口に任せて乃ち曰く目前に生死なしと、唯是れ自己安樂の處を參得し、子細に行脚の本志に達せば恁麼の見處あるべからず。

佛祖の大道は思量分別の能く及ぶ所に非ず、設ひ道ひ得て恰當なるも、若し只だ學得底ならば決して永久の安心を占取することは出來ぬ。雲巖に一點の眼光ありと雖も、未だ大道を體驗するに至らざるを以て、藥山に問着せられて忽ち茫然自失することを免れぬ。乃で藥山は更に第二の鐵槌を下して目前の生死を奈何せん死期の忽ちに到るあらば如何にするぞと誡められた。實に是れ初心の人も晩學の身にも一大事とすべき所である、無常迅速なり生死は事大なり設ひ發心行脚して方袍圓頂の形を具すと雖も若し生死の事を明めず解脱の道に達せずんば未だ衲衣下密々の事あることを知らぬのである。佛袈裟の下に言詮不及の秘訣あることを識得せねばならぬ。如何にして三界の攀籠を出で生死の窠臼を免るゝことが得られやうぞ、攀は引なり三界の迷途に引き入れて籠窟の中に沒頭するを攀籠といふのである、窠臼は巣穴といふに同じ其れでは全く衲衣を徒らに身に掛け應量器を徒らに手に持つといふもの、發心出家して、行脚徧參する所詮がどこに在る。故に古人は人をして閑工夫の時節なからしめ手脚穩かならしめんとして、今や藥山は目前の生死を奈何せんと恁麼に問はれたのである、然るに雲巖は徒らに口に任せて目前に生死なしと放言した、若し雲巖が眞實に自己安樂の處を參得し子細に行脚の本志に達して居たならば、決して恁麼の見處あるべからず、どうして此の樣なことが匆卒に言はれやうぞ。

山曰く百丈に在ること多少の時ぞ、行脚より以來修道すること幾年ぞと問ふ、乃ち曰く二十年、實に是れ古人道の爲に修練せし十二時中徒らなる時節なしと雖も、今此の如きは二十年徒らに蹉過せるに似たり、故に示て曰く二十年百丈に在て俗氣だも也た除かずと、設ひ無生死なりと會し自他なしと見來るとも、恁麽の見處自己本來の頭を識得せず。正に手脚を斷崖に撒する分なし。速かに身を空劫に囘さずんば尙ほ是れ俗氣未だ除かず。識情未だ破せず、牢獄未だ破せず、豈に悲まざるべけんや、故に子細に打着せしめん爲に、問ふこと再三す、然れども猶は覺知する分なし、設ひ六句の外に承當すとも、尙ほ無孔の鐵鎚軌則をなさず。設ひ千差の岐路を截斷する分ありとも、尙ほ自己の本明に暗し、三千里外且喜すらくは沒交涉、來て相見する是れ恰か用なきに似たりと重ねて指說す。

雲巖の見處未だ圓かならざるに依りて、藥山は、汝百丈に在ること多少の時ぞ、乃ち行脚してより以來大道を修行すること幾年ぞと問はれた、隨分痛い尋問である。雲巖は乃ち正直に答へて曰く二十年と、實に是れ古人が道の爲に修養練磨せし志氣と精進力とは最も壯烈を極め、十二時中暫時も徒らなる時節なしと雖も、今雲巖の此の如きは殆ど徒勞の狀態であるから如何程難行苦行しても二十年間徒らに蹉過せるに似たり、誤まれる方向に修行の步を運んだやうにも見受けられる、併し雲巖の辨道心の熱烈なる敢て必ずしも徒勞では無い、今日の悟道も二十年來の磨勵の功與つて力あるものである。然れども官には針を容れず故に藥山の慈悲深重なる二十年百丈に在て俗氣だも也た除かずと誡められた、實に雲巖が設ひ眞個に無生死なりと會し自他なしと見來つたからといふても恁麽の見處は未だ自己本來の頭を識得せぬのであるから、正に手脚を斷崖に撒する分なし中々未だ生死岸頭に自由を得ることが出來ぬ、更に速かに身を空劫に囘し天地未た剖判せざる以前に立返るのでなくては、尙ほ是れ俗氣未だ除かず識情未だ破せずであるから、思量分別の牢獄に囚はれて、決して自由を得ることは出來ぬ。故に藥山は雲巖をして子細に打着せしめんが爲めに再三百丈更に何の法をか說くと問はれたのである。然るに雲巖は猶ほ覺知するの分なく一言半句も藥山の旨に契ふ所がない、其れでは設ひ藥山の謂ゆる六句の外に承當したからといふても、尙ほ無孔の鐵鎚で穴のない鎚は柄の附けやうがないから、乃ち軌則をなさず宗乘の法則に相應せぬから何の役にも立たぬ。又設ひ千差の岐路を截斷し

て驀直に進前することが出來たとしても、尚ほ自己の本明本來明白なる眞面目に暗し、乃ち三千里外且喜すらくは沒交涉この一大事因緣には遠くして遠い。其れでは切角百丈を辭して此の藥山に來り、惟儼禪師に相見するも恰か用なきに似たり無用に屬するでは無いかと重ねて指說せられたのである。

此に到て百丈下堂の句を擧似すと雖も、尚ほ是れ他の舌頭に渉る、自の證處に達せず　然れども恁麼に擧着して早く一段の宗風異路底の事なく擧說し來る、故に曰く何ぞ早く恁麼に道はざる。今日子に因て海兄を見るを得たりと、是れ大衆立定柱杖を以て一時に趁散せし意、實に獨脫無依にして來れり。重ねて調打に煩らふべきに非ず、然れども唯是の如く擧せば、設ひ塵劫を經るとも、卒に所得の分なきに似たり。因て渠をして驚かさしめん爲めに、乃ち高聲に大衆と召す。南邊打着すれば北邊動じ來る。故に覺えず首を回して悟處終に思量に渉らず、點頭し來ること是の如し。之に依て曰く是れ甚麼ぞと、恨むらくは百丈の會下一個も會せざりけるか、此處に道取なしと雖も、藥山遙に曰く子に因て海兄を見ることを得たりと。

雲巖は此に到て百丈下堂の句を擧似したけれども、尚ほ是れ他の舌頭に涉り百丈が斯く言ふたと傳說したまでのことで、未だ全く自の證處に達しては居らぬ。然れども恁麼に擧着したる機緣は早く一段の宗風に異路なき事を擧說して居る佛祖の大道は唯有一乘法である。そこで藥山は何ぞ早く恁麼に道はざる今日子に因て海兄を見るを得たり、其れでこそ百丈の百丈たるところも明らかに能く分つた。其わけは大衆立定するところ柱杖を以て一時に趁ひ散せし意、實に獨脫無依にして、眼中一物の出頭をも見ず唯我獨尊である、這裏に到ては更に重て調打に煩ふべきところがない、調打といふは手段を施すの意味である。然れども唯是の如く擧して柱杖の下に逐ひ出されたまでの事では、設ひ塵劫を經るとも卒に自家所得の分なきに似たり、因て渠すなはち逐出されたる輩を驚かして啓發せしめん爲に更に百丈は乃ち高聲に大衆と召して喚び返した、大衆覺えず首を回したは恰かも南邊打着すれば此邊動じ來るやうなもので悟處思量に渉らず點頭し來つた、此の悟處といふ二字古本には無い、誠に無い方が穩かであるかと思ふ、百丈は大衆の首を回すを見て是れ甚麼ぞと一拶せられたが、恨むらくは百丈の會下に一個も此意を會する者がなかつたと見えて、一言も之に應答した者がない様子であ

るけれども、藥山惟儼禪師が遂に之に答て子に因て海兄を見ることを得たりと證明せられた、謂ゆる南山に鼓を撃てば北山に舞を作すといふものである。

實に古人恁麼の田地に一句道着する時、乃ち曰く相見了也と。又千里同風に似たり、又一絲も隔てなきに似たり。故に始め百丈に參じ藥山に登ることを得て、終に師資隔てなく彼此參得す。此田地に承當せば、唯自己曠劫已來の事を疑はざるのみに非ず、三世諸佛六代祖師、有鼻孔底の衲僧、一覰に覰破し一劄に劄破して、早く藥山百丈に相見し、直に雲巖道吾に眸を合することを得ん。且らく如何が這箇の道理を通じ得てん、大衆聞かんと要すや

孤舟不レ掉月明進。回レ頭古岸蘋未レ搖。

實に古人恁麼の田地に一句道着する時如何に時代を隔つるとも幾多の山川の外に在りとも、肝膽相照して間に髮を容れざるに因て、相見了也と叫び千里同風と唱ふ一絲も隔てなきものである。雪峯は衆に示して「望州亭汝と相見了い、烏石嶺汝と相見了い、僧堂前汝と相見了」といふた。又玄沙が雪峯に一書を贈つた處が、それが一幅の白紙であつた、雪峯は其白紙を拈じて「君子は千里同風」といふた、古人の做處は實に格外の風流では無いか。今雲巖和尚が始め百丈に參じ後に藥山に登ることを得て終に師資隔てなく彼此參得し百丈に於ける二十年の修行も、藥山の一言下に其光を發することを得たのである。一たび此田地に承當せば唯自己曠劫已來の事を疑はざるのみに非ず三世諸佛も六代の祖師も乃至あらゆる有鼻孔底の衲僧だちも、一覰に覰破し一劄に劄破して早く藥山百丈に相見し、直に雲巖道吾に眸を合することを得ん、有鼻孔底とは衲僧の面目を備へたる有道の師をいふ、劄は鎌なり鎌に引懸けて刈り倒すを劄破といふのである、道吾の事は前に已に述たる如く、藥山の會下に於て雲巖と共に四十年常坐不臥の願を發したる同參である。さて且らく如何が這箇の道理を通じ得てん大衆聞かんと要すやと例の小頌七言二句である。孤舟棹さず月明に進むとは雲巖禪師の修行經歷が不思量無分別に本地の風光に向ひ來つたる樣子を頌ぜられた、波に任せ舟の行くに任せて梶もとらず棹もさゝず、二十年來只々單々として修し來りたるもの、知らず知らず月明の本地に向つて進み得たのである、斯くて頭を回らして其の本源たる古岸を顧りみれば波平らかに水澄みて蘋未だ搖がず蘋は大萍なり浮草一葉も動搖せぬ其儘に、舟は早や目的地に到達して居る、孤舟明月を載せて碧潭に泛べる景況、何とも言へぬ好風光ではあるまいか。

第三十八章

第三十八祖洞山悟本大師。參雲巖。問曰無情說法什麼人得聞。巖云無情說法無情得聞。師曰和尙聞否。巖曰我若得聞。汝即不得聞吾說法也。師曰若恁麼。即良价不聞和尙說法也。巖曰我說法汝尙不聞。何況無情說法也。師於此大悟。乃述偈呈雲巖曰。「也太奇也太奇。無情說法不思議。若將耳聽終難會。眼處聞聲方得知。」巖許可

以上本章の本則、以下提唱例の如し。

師諱は良价。會稽の人なり。姓は俞氏。幼歲にして師に從て般若心經を念ず。某甲眼耳鼻舌身意の處に至て、忽ち手を以て面を捫て師に問て曰く。無眼耳鼻舌等あり何が故に經に無しと云ふや。其師駭然之を異みて曰く、吾は汝が師に非ず、即指して五洩山の禮默禪師に往しめて披剃す。年二十一、嵩山に詣して具戒す。母の爲めに愛子として兄亡じ弟貧し父亦先ちて亡じき。一度空門を慕て永く老母を辭し、誓て曰く我道を得ずんば再び故鄉に還らじ。又親を拜せじと。是の如く誓て鄉里を辭す。

第三十八祖は謂ゆる我が曹洞宗に於ける特別の高祖である、即ち曹溪の下に於て洞山の流れを汲む其れが曹洞宗と稱する所以である、高祖の諱は良价といひ會稽といふ處の俞氏の子であつた、幼歲にして師に從て般若心經を念ず、經文の中に無眼耳鼻舌身意とある處に至りて、忽ち手を以て自分の面を捫で師に問て曰く某甲には現に此通り眼耳鼻舌等あり何が故に經には無しと云ふやと質問せられた。其師駭然として之を異しみ驚き吾はとても汝の師にはなれぬと云て、即ち指して五洩山の禮默禪師の處へ往て披剃出家せしめた、禮默禪師は石頭の法嗣である。洞山高祖は更に二十一歲にして嵩山に詣して具戒す、然るに高祖は其母の爲めに愛子であつて、兄亡じ弟貧し父も亦先ちて亡じ誠に賴りなき身であつたが、一度空門を慕て出家した後は、永く老母を辭し誓て曰く我れ道を得ずんば再び古鄉に

還らじ又親を拜せじと、是の如く誓て郷里を辭すとある、眞に棄恩入無爲にして眞實の報恩を期せられたのである。

卒に參學事了て後に洞山に住す。母一子に離れて他の覆育なきに似たり。日日師を尋ねて卒に乞丐の中に交りて經行往來す。我が子洞山に住すと聞て、慕て此に往き見んとするに、洞山固く辭して方丈室を鎖して入れず。相見を許さゞるが爲めなり。是に依て母恨みて終に室外にして愁死す。死して後に洞山自ら往て彼の乞丐し持てる所の米粒三合あり。之を取て常住の朝粥に和して一衆に供養せしめて以て雲程を弔ふ。久しからずして其母洞山の爲に夢に告て曰く、汝志を守ること堅くして我を見ざるに依て、愛執の妄情立處に斷え、彼の善根力に依て、我れ忉利天に生じたりと。祖師何れも其德勝劣なしと雖も、洞山は此門の曩祖として殊に宗風を興せしこと是の如く、親を辭し深く志を守りし力なり。

さて洞山高祖は其後諸方徧歴して卒に參學の事了て後に洞山に住す、其母は又已に一子に離れて他に誰も覆育する者がないに依て、日日其子を尋ねて卒に乞丐の中に交りて經行往來と諸方を流浪し、やがて我が子が洞山に住すと聞て慕て爲に往き我子を見んとするに、其子たる洞山は固く辭して方丈室を鎖して母を入れず相見を許されなかつた、是に依て母は子の無情を恨みて終に室外にして愁死すとある、何故に洞山は斯くまでに母に對して無情なりしかを仔細に參究するの要がある。洞山は母を救ふて三惡道の苦みを免かれしめんとするには、先づ其の愛着の妄執を拂はせるのが肝要である、然るに此場合に臨みて此の愛執の凝結したる母に對して、如何に說法するとも、如何に參究せしむるとも、到底其効のあるべきではない、已むを得ずして一大折伏の法を行ふて愛着の妄執を斷念せしめたのである。かくて母死して後に洞山自ら往て母が乞丐し持てる所の米粒三合ありしを取て常住の朝粥に和して一衆に供養せしめて以て雲程を弔はれた、世間普通の道理から見たならば、生前に甚だ不孝にして、死後の追善は何の所詮もなく思ふことであらうけれども、謂ゆる棄恩入無爲眞實報恩の眞諦に在つては更に特別の道理あること、委くは明教大師の孝論等に參究すべきである。果して久しからずして其母洞山の爲に夢に告て曰く汝志を守ること堅くして我を見ざるに依て愛執の妄情立處に斷え、さて又彼の三合の遺物を以て一山の大衆に供養せられたる善根力に依て我は忉利天に生じたりと言はれ

たとある、一子出家すれば九族生天すとの金言も虚しからずと謂ふべきである。從上の祖師何れも其德勝劣なしと雖も別して洞山は此門すなはち曹洞宗の曩祖にして殊に宗風を興せしこと是の如くなるものは、乃ち此の固く親を辭し深く志を守られたる力の致す所である。

參學の當時最初に南泉の會に參じ、馬祖の諱辰に値ふ。齋を修する次で、泉衆に問て曰く來日馬祖の齋を設く未審馬祖還て來るや否や。衆皆無對。師出て對て曰く伴あるを待て即ち來らん。泉曰く此子後生なりと雖も甚だ雕琢するに堪えたり。師曰く和尙良を壓して賤と爲すこと莫れ。

先づ初め南泉に參じたる因緣を擧られた、最初南泉の會に參じ馬祖の諱辰に値ふ、南泉普願禪師は馬祖道一禪師の法嗣で百丈の兄弟である。乃ち今本師馬祖の爲めに諱齋を修する次で其の逮夜の時に南泉が衆に問て曰く來日馬祖の齋を設く未審馬祖還て來るや否やと、衆皆誰も之に對して答ふる者がない、時に洞山高祖が大衆の中から出て對て曰く、伴あるを待て即ち來らん馬祖に同伴し來る者は誰であらうぞ。梅に鶯の類であらうか蘆花に明月の類であらうか、物に主と伴とを假說し、主體は不變不動、その作用たる伴は應現自在なりとの意である。南泉は洞山を稱して此子後生なりと雖も甚だ雕琢するに堪えたりと云ふ雕琢は細工すること洞山は良材である雕琢せば必ず天下の美術と稱する至寶たらんとの意である。洞山之に對して和尙良を壓して賤となすこと莫れと云はれた、良賤といふは昔は民に良民と賤民との差別があり、今の公民と非公民とのやうなものであつた、人々自性の天眞佛なるに雕琢などゝいふて本來の佛體を見下げまいぞといふは實に衝天の志氣といはねばならぬ。

次に潙山に參ず。問て曰く頃聞く南陽の忠國師に無情說法の話ありと。某甲未だ其微を究めず。潙曰く闍黎記得すること莫しや。師曰く記得す。潙曰く汝試みに擧すること一徧せよ看ん、師遂に擧す。僧問ふ如何なるか是れ古佛心。國師曰く墻壁瓦礫是。僧曰く墻壁瓦礫豈に是れ無情に非ずや。國師曰く是。僧曰く還て說法を解すや否や。國師曰く常說熾然說無間歇。僧曰く某甲甚麼としてか聞かざる。國師曰く汝自ら聞かず。他の聞者を妨ぐべからず。僧曰く未審甚人か聞くことを得ん。國師曰く諸聖聞くことを得。僧曰く和尙還

て聞くや否や。國師曰く我れ聞かず。僧曰く和尙既に聞かずんば、爭でか無情の說法を解するを知らん。國師曰く賴に我聞かず、我若し聞かば即ち諸聖に齊し、汝即ち我が說法を聞かざらん。僧曰く恁麼ならば則ち衆生無分にし去るや。國師曰く我衆生の爲に說く、諸聖の爲めに說かず。僧曰く衆生聞て後如何。國師曰く即ち衆生に非ず。僧曰く無情の說法何の典敎にか據る。國師曰く灼然として言の典を該ねざるは君子の所談に非ず。汝豈に見ずや華嚴經に云く剎說衆生說三世一切說と。

以上忠國師無情說法の話の本則である、洞山高祖が南泉に參じられたる次に潙山の靈祐禪師に參じられた、潙山靈祐禪師は百丈の法嗣で潙仰宗の高祖である、洞山問て曰く頃聞く南陽の忠國師に無情說法の話ありと、然るに某甲は未だ其微細なる道理を究めずと云ふ。南陽國師は名を慧忠といひ唐の肅宗皇帝及び代宗皇帝二代の帝師となられた人である。洞山は潙山に對して其問答の大概を擧示した、曰く或僧が國師に如何なるか是れ古佛心と問ふ國師は墻壁瓦礫是れなりと答へた、墻壁瓦礫は無情の物であるに其れが說法するかと更に問ふ、國師は常說熾然無情の墻壁瓦礫が晝夜不斷に熾んに說法して更に間歇は無いと云ふ、僧は然らば某甲は何故に聞かぬであらうと疑ふ、其れは汝が聞かぬまでのこと、他人の聞く妨げをしてはならぬ。僧は未審まことに合點のゆかぬ話であるが、其れは何人が聞くのであらう、諸聖聞くことを得、諸の佛菩薩等が聞て居る、和尙あなたもお聞きになるかといふ、幸ひに我は聞かぬ、若し我が聞たならば我も諸聖に齊くなるから汝が我が說法を聞くことを得ざらん、其れでは衆生には聞く分がないのであるか、いや我は衆生の爲に說くので諸聖の爲めに說くのではない。そこで更に僧は無情の說法といふことは何の典敎に據るかと典據を問ふ、國師は灼然といふはその典據は最も明白であるぞと云ふ意、言の典を該ねざるは君子の所談に非ずと云ふ古語もある、汝豈に見ずや華嚴經に剎說衆生說三世一切說と說かれてあると示された。以上或僧と忠國師との問答を一と通り擧げられたのである。剎說の剎といふは國土の義で十方世界の一切の國土が皆晝夜不斷に說法して居る、其又國土に有らゆる一切衆生が皆說法して居る、其れが過去にも現在にも未來にも說法せぬ時もなければ說法せぬ物もないから三世一切說である、現に山は高く聳えて說法し、水は長く流れて說法し、花は紅に說法し、柳は綠に說法して居る、其れが即皆悉く古佛心の現成ならぬものはない。

師擧し了りて、潙曰く我這裏にも亦有り。祇是れ其人に遇ふこと罕なり。師曰く某甲未だ明めず乞師指示せよ。潙拂子を竪起して曰く會すや、師曰く某甲不會。請ふ和尚說け。潙曰く父母所生の口、終に子が爲に說かず。師曰く還て師と同時に慕道の者ありや否や。潙曰く此去て澧陵攸縣石室相連る。雲巖道人といふものあり。若し能く撥草瞻風せば必ず子が重んずる所たらん、師曰く未審此人如何。潙曰く他曾て老僧に問ふ。學人師に奉せんと欲し去る時如何。老僧他に對して道く、直に須らく滲漏を絕して始て得べし。他道く還て師の旨に違はざることを得んや無や、老僧道ふ。第一老僧這裏に在りと道ふことを得ざれ。

次に潙山が無情說法の道理を洞山に示し且つ更に指示して雲巖の處へ往かせた因緣を示された。潙曰く無情說法の話は南陽に限つたことではない、我が這裏にも亦有り祇だ是れ其人に遇ふこと罕なり其機緣の純熟するものが少ないと云ふ。洞山は某甲未だ明めず乞ふ師指示せよと請求した、乃ち潙山は拂子を竪起して無情の說法を現在に提示して會すやと試みられたが、洞山は正直に某甲不會和尚說けと願ふ、潙山は父母所生の口終に子が爲めに說かず、無情の說法は有情の言語では說かぬと云ふ。ここに至りて洞山は師と同時に慕道の者ありや否やと他に因緣の契ふべき師を求められた、潙曰く此去て澧陵攸縣といふ處の石室相連る邊に、雲巖道人といふものあり若し能く撥草瞻風して往て尋ねて見たならば必ず子が重んずる所の正師であらう。撥草瞻風は草を撥て風を瞻るで荒草を踏み分けて參得して其風彩に接すること、其人は曾てこの潙山老僧に向つて學人師に奉せんと欲し去る時如何と問たことがある。其時に老僧は直に須らく滲漏を絕して始て得べし滲漏といふは煩惱といふも同じことである、要するところ無我無心でなければ師に奉ずることが出來るものでは無い。雲巖は其れで師の旨に違はず即ち師に事ふるの道が圓滿するかと問ふ、潙山は之に答へて第一老僧這裏に在りと道ふことを得ざれ、眞に獨立無伴の識見でなければならぬと云ふたことがあると示された。

師遂に潙山を辭して徑ちに雲巖に造る。前の因緣を擧し了て便ち問ふ。無情の說法甚麼人か聞くことを得る。巖曰く無情聞くことを得る。師曰く和尚聞くや否や。巖曰く我若し聞かば汝即ち我が說法を聞かざらん。師曰く某甲甚

麽として聞かざる。巖拂子を竪起して曰く還て聞くや。師曰く聞かず。巖曰く我說法すら汝尙ほ聞かず。豈に況や無情の說法をや。師曰く無情の說法何の典敎をか該ぬ。巖曰く豈に見ずや彌陀經に曰く水鳥樹林悉皆念佛念法と。師此に於て省あり。

師遂に潙山を辭して潙山の指示に隨ひ徑ちに雲巖曇晟禪師の處へ往き、前の南陽國師このかた、潙山に參じたまでの因緣を陳べて、偖て例の如くに無情說法甚麽人か聞くことを得るやと問ふた。雲巖これに答へて無情の說法は無情聞くことを得るといふ、師曰く和尙聞くや否やあなたは無情でありますかと問ふたやうな調子である、巖曰く我もし聞かば汝即ち我が說法を聞かざらん、我もし無情であつたならば汝は我が無情の說法を聞くことが出來まいぞといふ、洞山さらに進んで某甲甚麽として聞かざる、私に聞けないわけが無いと思ひます、其れならばといふので雲巖が拂子を竪起して還て聞くやどうぢや聞こえたか、師曰く聞かず、巖曰く我說法すなはち此の拂子の說法すらも汝は聞き得ぬではないか豈に況や無情の說法をやと抑へつけられた。けれども洞山なほ屈せず一體に此の無情の說法といふことは何の典敎をか該ぬ何の經文に佛說の證據があるぞと云ふ、曾て忠國師は華嚴經を以て之に答へられてあつたが今雲巖は更に豈見ずや彌陀經に曰く水鳥樹林悉皆念佛念法と說かれてあるとの答であつた、此れは阿彌陀經に極樂國の體相を說て、彼の國には常に種々奇妙雜色の鳥あり、白鵠、孔雀、鸚鵡舍利、迦陵頻伽、共命の鳥、是の諸の衆鳥晝夜六時に和雅の音を出だし其音五根、五力、七菩提分、八聖道分、是の如き等の法を演暢すとあり、又彼の佛國土は微風諸の寶行樹及び寶綱羅を吹て微妙の音を出だし、皆自然に佛を念じ法を念じ僧を念ずるの心を生ぜしむとあるのを略言せられたのである、洞山大師は此に於て省ありと年來深く參究せられたる無情說法の公案に就て今や始めて省悟せられたのである。

此因緣國師の會に興り來り終に雲巖の處に著實す。乃偈を述て曰く。也太奇也太奇。乃至眼處に聞く時方に知ることを得ん。師雲巖に問ふ某甲餘習未だ盡きざることあり。巖曰く汝曾て甚麽をか作し來る。師曰く聖諦も亦爲さず。巖曰く還て歡喜すや未だしや。師曰く歡喜は則ち無にしもあらず。糞掃堆頭に一顆の明珠を拾ひ得たるが如し。師雲巖に問ふ。相見せんと擬欲する時如

何。曰く通事舍人に問取せよ。師曰く見に問次す。曰く汝に向て甚麼とか道ひし。師雲巖を辭し去る時問て曰く。百年後忽ち人あり還て師の眞を貌せしや否やと問はば如何が祇對せん。巖良久して曰く祇這れ是れ。師沈吟す。巖曰く介闍黎箇事を承當することは、大に須らく審細にすべし。師猶ほ疑に渉る。後に水を過て影を觀るに因て前旨を大悟す。偈あり曰く。切忌從他覓。迢々與我疎。我今獨自往。處々得逢渠。渠今正是我。我今不是渠。應須恁麼會。方得契如々。

さて此の無情說法の因緣は初め南陽の忠國師の會に與り來り、更に潙山和尙の處に於て數番の問答に渉つたけれども、未だ落着に到らず、和尙の指示に因て雲巖に見え子細に參究して漸く始めて著實の處に到り得たのである。そこで洞山高祖は偈を述て曰く、也太奇也太奇、無情說法不思議、若將耳聽終難會、眼處聞聲方得知と言はれた時始めて雲巖の許可を得られたといふのが即ち本章の本則である。也太奇也太奇といふは物に驚いた時に發する俗語と見える、無情說法の不思議さは耳では聞こえない、眼で聞くことが出來れば合點がゆく、眼で聞くことさへ出來たならば潙山の處で拂子を竪てられた時にも能く聞えるはずであつたが、其時は未だ因緣時節が純熟しなかつた、然るに今といふ今は始て印可を受けることになつた。又或時に雲巖に向つて某甲餘習未だ盡きざることありと言はれた、譬へば病氣はさつぱり治つてしふまても、久く病褥に在た時の癖が殘つて居るやうなものである、雲巖曰く汝曾て甚麼をか作し來る、師曰く聖諦も亦爲さず佛法修行の第一義たる聖諦をも致しません、病氣がないから療治も致しませんと云ふた調子、巖曰く還て歡喜すや未だしや、其れで心に喜ばしく思ふ所があるか、師曰く歡喜は則ち無きにしもあらず譬へば糞掃堆頭塵芥の中から一顆の明珠を拾ひ得たやうな心もちであるといふ。又或時は雲巖に向て相見せんと擬欲する時如何本來本法性の主人公にお目にかゝりたいと思ふ時には、如何いたせば宜しいかとの問である、雲巖は主人に逢ひたければ通事舍人に問取せよ受付の給仕に取次いでもらふが好い、師曰く見に問次す現在今問て居りますと云ふ。是の如くに時々色々な問話に因て子細に參究して居られたが、遂に雲巖を辭し去る時に臨て和尙百年の後すなはち遷化せられたあとで忽ち人あり師の眞を貌せしや否やと問はれた時には何と祇對したものでありませうかと問ふた。眞を貌すといふは肖像を書くといふことである、只是れ雲巖和尙の肉身の面貌のことではあるまい、果して雲巖は良久して祇這れ是れと言はれた、唯此れ是れといふも、

今良久沈默停立せられた雲巖老僧の肉身のみではあるまい、こゝに於て洞山高祖沈吟すとある、雲巖は更に誡められて价闍黎は洞山の名を呼で箇の一大事を承當することは大に須らく審細にすべしと示された、此時に洞山は猶ほ疑に渉るとあつて、未だ徹底する所に到らなかつたと見える。然るに其後のこと、洞山大師或時橋を渡りて水の上を通つた、水が澄で居たから自分の影がありくと映つたのを見て、前旨を大悟す、さきに雲巖和尙が良久して唯此れ是れと言はれた意趣が豁然として徹底せられた、此れが洞山の過水悟道といふて我が曹洞宗の淵源になつて居るのである。乃ち偈を述べられた切に忌む他に從て覓むることを此一大事因緣は冷煖自知するより外はない、然るに若しも誤て他に從て覓めたならば迢々として我と疎なり門より入るものは元來家珍ではない、我れ今獨り自ら往く獨立無伴自由自在の境界であるに依て、處々渠に逢ふことを得たり渠とは今水上に映つた影に就て言ふやうであるが、即ち其れが本來の主人公である、此の主人公には寢ても起ても常に逢て居る位ではない、從來共に住しながら名を知らずに居るのである、渠今正に是れ我、その本來の主人公たる渠こそは法界平等の妙體萬德總持の靈性である、その妙體靈性は決して心外に求むべきものに非ず、仔細に點檢し將ち來れば人々の自己心である、さればといふて我れ今ま是れ渠にあらず、此の自己心を以て强て不可思議の妙體とする譯では無い、元來自己なるものを究盡すれば過去心も不可得現在心も不可得未來心も不可得で畢竟自己と認むべき自己も無いのであるから我れを以て强て渠とすべきにはあらず、應に須らく恁麽に會して方に如如に契ふことを得べし、應に是の如く會得してこそ、方に如々の理に證契即通することを得べし、如とは不變不異の義であるから般若の眞空と同一意である、般若心經に是の法は空想にして生ぜず滅せず垢つかず淨からず增さず減らずとあるのが如の字の解釋と見るが宜い、自他共に如、色空共に如、凡聖も人境も盡く皆な如なるを以て如々といふたのである。

洞山一生參學の事了つて疑滯速に離る。因緣正に是なり。抑ゝ此無情說法の因緣は南陽の張濆行者と云あり國師に問て曰く、伏して承はる和尙無情說法と道ふ某甲未だ其の事を體せず。乞ふ和尙垂示したまへ。師曰く汝若し無情の說法を問はゞ他の無情を解して方に我が說法を聞くことを得ん。汝但だ無情の說法を問取し去れ。濆曰く只だ如今有情方便の中に約す。如何なるか是れ無情の因緣。師曰く如今一切動用の中但だ凡聖兩流都て少分の起滅なし便ち是れ幽（幽の字傳燈國師の章に出になる字形似たるゆゑに、あやまるか。下の講解すべて幽の字にて說示し玉ふ）識にして有無に屬せず熾然とし

て見覺す。只だ其の情識と繫執と無きことを聞く。所以に六祖曰く六根、境に對して分別するは識に非ずと。是れ即ち南陽の無情說法を談ぜし樣子なり。

是れは更に南陽國師の說示を引て無情說法の玄旨を明らかにせられたのである。最初の一語は洞山大師悟道の機緣を結ばれたので、洞山大師は前節に於ける過水悟道の端的に於て一生參學の大事を了畢して從前の疑滯速かに離れて大安心を成得せられたる因緣は即ち是れなり。抑も此の無情說法の因緣は禪門重要の問題であつて、昔し南陽の張濆行者と云ふ人あり、慧忠國師に問ふて曰く、伏して承はるに和尚は無情說法と道ふ玄談ありと、某甲は不幸にして未だ其の一大事を體得せず、乞ふ和尚仔細に垂示し玉へ、時に國師は行者に示して曰く、汝若し無情の說法を問はゞ、先づ他の無情といふことを解決して方に我が說法を聞くことを得ん、無情といへる深意を知らざればその說法に關する說示を聞くも遂に了不得ならん、故に汝は但だ從前の知解分別を放下して驀直に無情の說法を聞取し去るが宜い。濆行者曰く既に無情ならば法と非法との簡擇力もなく我れと人との辨別もなし然らば如何にして說法するや、若し果して無情に說法ありとせば、只だ如今有情の意識と推理とに訴へて方便力を以て說明せられんことを望む、知らず如何なるか是れ無情說法の因緣なるや、國師之に答へて曰く、汝宜く無情とは何ぞやと研究すべきである。如今吾々が平生底起居動靜する一切動用の中に就て點檢するに凡夫と賢聖との兩流に大別することを得べし、迷へる者は之を凡夫と稱し、悟道に進む者は之を賢聖と名く、生死去來の相外に現はれ善惡迷悟の道內に岐る、然れども一たび根源に遡つて本體を達觀すれば、無明の實性即佛性、幻化の空身即法身で生死去來眞實人、四大五蘊不壞の身である、波浪に變幻ありとも海水には增減なし諸法その儘の常住不滅なるを以て都て少分の起滅なし、吾人の本心是を幽識と稱す、幽とは深處又は暗處にあつて明白な見分けのつかぬこと、達磨大師神光に問ふ、心を將ち來れ汝が爲めに安心せしめん、神光曰く心を覓むるに終に不可得、是れ則ち幽識である、夾註には傳燈に幽の字出に作るといへり、されど太祖大師は幽識として垂示せらる、別に改むるに及ぶまじ、既に幽識なるが故に象ありといふべからず、既に靈妙の機あり之を無しともいふべからず、畢竟じて有無に屬せず、凡夫は有と執す故に我執に縛せらる、二乘は無と斷ず故に大悲の妙用を缺く、兩頭俱に不是である、有無に屬せずと雖も熾然として見覺す、熾照は威勢の盛なる形、見覺は見聞覺知の略、一心靈妙にして機用不思議である、されども曾て自性の認むべきは無いに依て、情識なるものありて吾々を繫縛し執着せしむるに非ず、四祖曾て三祖に謁して解脱の法門を乞ふ、三祖曰く誰か汝を縛す、四祖曰く人の縛する無し、三祖曰く何ぞ更に解脱を求むるや、然れば吾人は本來解脱である、

所以に六祖大師曰く、吾人の眼耳鼻舌身意の六根が色聲香味觸法の六境に對して種々の分別を起すは是れ一時の閑妄想にして根本の心識即ち幽識に非ずと故に參禪の士は先づ須らく幽識を體得すべし、此の幽識超然として情識繫縛の外に在り是れぞ眞の無情と謂ふべし、然れば有情に對するの無情と思ふべからず、有情無情の對待を超越したる眞如の妙性こそ無情の本體なれ、是を本來の面目とも名け本地の風光とも稱す。此の本體を識得すれば盡十方法界都盧實相なり、草木國土牆壁瓦礫常住不斷に說法して眞理を表現し宣說し擧揚せずといふこと無し、承陽大師は正法眼藏無情說法の卷に於て、有情界の音聲を奪ふて無情界の音聲に擬するは佛道にあらず、無情說法必ずしも聲塵なるべからず云云と示されてある、以上は是れ即ち南陽國師の無情の說法を談ぜられたる樣子である、

即ち曰く一切動用の中、但凡聖兩流、都て少分の起滅なし。便ち是れ幽識、有無に屬せず熾然として見覺す。然るを尋常に、人思はく、無情といふは牆壁瓦礫燈籠露柱ならんと。いま國師の道取の如きは然らず。凡聖の所見未だ分たず。迷悟の情執未だ發せず。況や情量分別の計度に非ず。生死去來の動相に非ず。幽識あり。實に此の幽識熾然として見覺す。情識の繫執に非ず。故に洞山も應に須らく恁麼に會して、方に如如に契ふことを得んと云へり。到る處獨り自ら行くと知らば、一切如如に契はざる時なし。故に古人曰く曾て如の外の智の如の爲めに證せらるゝなく、智の外の如の智の爲めに修せらるゝなし。如如不動にして了了常智なり。故に謂ふ圓明の了知、心念に依らず。熾然の見覺即ち繫執に非ず。又曰く衆生聞くことを得ば衆生に非ずと。僞山曰く父母所生の口終に子が爲めに說かず。是の如く諸師の提訓を受て眞箇の無情を會せし故に、一門の曩祖として恢に宗風を興す。

無情說法の宗旨は南陽國師の即ち曰はれし如く、一切動用の中但だ凡聖兩流都て少分の起滅なし便ち是の幽識有無に屬せず熾然として見覺す、吾人の平生宇宙の活動、その凡夫なると聖賢たるとを問はず、一切諸法その儘が少分の生滅なく盡く是れ不生不滅不變不易である。その本體たる幽識は有無を超越して而かも眼は色耳は音聲鼻は香舌は鹹醋、應用自在神通無礙である。此の幽識を徹證するに非ざれば無情說法を聞取することは出來ぬ、國師が他の無情を解せよと仰せられたは是れである。然る

を尋常に人思はく無情といふは有情に簡別した語であるから、感覺も意識も無い、牆壁瓦礫や燈籠露柱や草木金石の類ならんと考へて居る、是れ全く其の名に惑ふて其の實を失ふたる淺見である、いま國師の道取の如きは然らず無情といふは情と非情とを超越したる父母未生前の本來人のことである。故に凡夫とか聖賢とかの見解も未だ分たず迷妄とか悟了とかいふ情慮執着も未だ發せず況や煩惱妄想の原因たる情量分別より出でたる計較卜度を云ふに非ず、從つて出生入死滅し去り現はれ來る底の變化無常の動相にも非ず、無始無終 常住眞寂の幽識なり、實に此の幽識は不生不滅不去不來なりと雖も靈動して止まず因緣時節寂然として昭著し熾然として見聞覺知の妙用を發す、而して情識の繫執に非ずして、正に是れ天眞無作の大用たり。故に洞山大師も應に須らく恁麼に會得して方に如如の理に契ふことを得べしと云へり、吾人も亦た其の到る處大師の如く獨り自ら往くと知らば一切時一切處如如に契はざる時なし、此の幽識を覺了すれば此の身此儘が凡聖を圓融し迷悟を解脱して天上天下唯我獨尊で所謂大道の往來である。故に古人も、曾て如の外に智ありて如の爲めに證せらるゝ無く、智の外に如ありて智の爲めに修せらるゝ無しと曰はれたり。如といふは所證の理で智といふは能證の智である、如といへる一物ありて智力を以て之を發見し證得するには非ず、如何となれば吾人の自心の相も即ち如々の本性で所謂性相一如であるから能觀の智が所觀の如に依て證悟を與へらるゝには非ず、從つて自己以外に如々の理境があつて自己の智力に依て修練せらるゝにも非ず、所謂智境不二である。要するに自己是れ自己に非ず諸法是れ諸法に非ず、自己と諸法と總に是れ一大如如の妙體である、此の妙體は火に入ても燒けず水に入ても溺れず古往今來 常住不動にして而も了々として常に知り、菩提の莊嚴も般若の正智も皆な是より出生し來る、故に是を圓明の了知心念に依らず熾然の見覺即ち繫執に非ずと曰ふのである。圓明の了知とは本性天然の妙智是れ凡夫の分別心念を以て造り出せしものにはあらず本有佛性の覺知は妄想繫執の產物では無い、此の玄旨は言詮の及ぶ所にあらざるを以て潙山は父母所生の口終に子が爲めに說かずとも又衆生若し無情の說法を聞くことを得ば最早衆生にあらずとも曰はれた。即ち既に凡聖の二途を超越して如々の法界に證入したるものぞと仰せられたのである。洞山大師は是の如く僞山雲巖等諸師の提撕訓導を受けて眞箇禪門向上の無情といへる大公案を會得せし故に、曹洞一門の曩祖として恢に靈山少林の宗風を興されたのである、然れば無情說法の公案は實に是れ曹洞門下の皮肉骨髓なることを知りて、審細に參究すべきである。

然れば仁人者、子細に熟看して、この幽識熾然に見覺し來る、これを無情と謂ふ。聲色の馳走なく情識の繫縛なき故に因て無情と謂ふ。實に是れ子細に

彼の道理を說取せるなるべし。故に無情と說くを聞きて、妄りに牆壁の解を作すこと勿れ。唯だ汝等情念惑執せず見聞妄りに分布せざる時、彼の幽識明明として暗からず、了了として明らかなり。此の處、取らんとすれども得ることなし色相を帶びざる故に是れ有に非ず。捨てんとすれども離るゝことなし遠劫より伴ひ來る故に是れ無に非ず。尙ほ識知念度の情に非ず。何に況んや四大五蘊を帶びんや。

以下太祖徹惘の御垂訓である、然れば諸仁者增々勇猛精進して、此の公案を子細に熟看して其の地に到達すれば、此の幽識熾然に見覺し來りて自己本具の佛性、宇宙天眞の大道が當處に現成し來る、是を卽心是佛といふ。果して恁麽なることを得ば此身此儘が凡聖を融會し迷悟を超越する無情の妙體となるから、是を無情と謂ふのである、此の時身心倶に脫落して外聲色の境に馳走することなく內情識の爲めに繫縛せらるゝことなき故に因て無情と謂ふ、南陽國師の如きは實にこれ老婆親切に彼の無情說法の道理を說取せるなるべし、故に無情と說くを聞きて妄りに牆壁の如きもの との妄解を作すこと勿れ、無情といふは本來面目の異名である、圓通せる大道の異稱である、然れば唯だ汝等が兀然端坐して大無我の三昧に安住し、胸裡廓然として情念惑執せず、色を見聲を聞く上に於ても妄りに無制限に凡情を外界の諸境に分布せざる時は、彼の幽識卽ち本心が明明として暗からず觸處に輝きを放ち、了了として明らかなり般若の大智現成して生死の根源を究め諸法の實相を證すべし、是れ則ち豁然大悟の端的である。此のところ這裏の消息は、身心脫落し來るを以て自己尙ほ立せず、故に取らんとすれども得ることとなし、徹底無我なるを以て色相を帶びざる故に是れ有にあらず乃ち實際理地に一塵を立せざる底の境涯である。又脫落身心し去るを以て捨てんとすれども離るゝことなし、元來此の道は人々分上豐かに具はり法界に圓通して未だ曾て暫くも離るゝこと無し、過去久遠劫より伴なひ來る故に無に非ず、伴なひ來るといふも主伴の關係あるには非ず當體一如の大道である、是れ則ち無我の大我にして佛事門中一法を捨てざる底の活計である。風穴禪師が、若し一塵を立すれば家國興盛し一塵を立せざれば家國喪亡すと道破せしも畢竟眞空妙有の玄談を打せられたるものである。承陽高祖は佛法を習ふといふは自己を習ふなり、自己を習ふといふは自己を忘るゝなり、自己を忘るゝといふは萬法に證せらるゝなりと仰せられた。自己を習ふを以て無に非ず、自己を忘るゝを以て有に非ず、佛祖の大道は恁麽に參究せねばならぬ、尙ほ識知念度の情にあらず、凡情を放下し去るを要す、況んや四大五蘊を帶びんや、自己を脫落し將ち來れ、身心自然に脫落してこそ本來の面目は現前すれ。

故に宏智曰く、情量分別を離て智あり、四大五蘊に非ずして身ありと。即ち恁麼の幽識なり。常説熾然と云は謂ゆる時として顯はれずといふことなき、これを説と謂ふ。彼をして揚眉瞬目せしめ、彼をして行住坐臥せしむ。造次顚沛死此生彼、飢ゑ來れば喫飯し困じ來れば打眠す、皆な悉く説なり。言語事業動止威儀重ねて是れ説なり。有言無言の説のみに非ず、都て堂堂として來り明々として覆藏せざる者あり。蝦蟆鳴き蚯蚓鳴くに至るまで一切顯はれ來る。故に常説熾然説無間歇なり。

故に天童宏智禪師曰く、凡夫の情量分別を離れて如如を證得する根本智あり、此の四大五蘊假和合の肉身に非ずして常住不壞の淨法身ありと、是の根本智淨法身が即ち恁麼の幽識なり、離れてとか非ずしてとか、いふても、吾人の身心を除外して心外に法ありと謂ふにはあらず、前に述べたる凡聖一如性相不二の宗意を示されたものである。常説熾然と南陽國師の云つたのは、此の幽識が無住の本より一切の法を立して謂ゆる時として顯はれずといふことなき是を常説とも説法ともいふたのである、現代語でいへば事象それ自身が最も雄辯に説明するの意である。眞理の説明は決して舌頭上にのみ在るに非ず、目前に展開する一切の事實が盡く眞理を語り靈性を説て居る、天の覆ひ地の載する風の動き水の潤ほふ何れか眞理の表現に非ざる。馬祖大師は藥山を接して、我れ或時は伊をして揚眉瞬目せしめといはれた、伊れとは幽識である大道である、森羅萬象は皆な幽識の活動大道の妙用である、伊をしてといふても別に主宰者指揮者が外にあるのでは無い、幽識本來の活動、大道天眞の妙用である。故に伊をして行住坐臥せしめ、伊をして開花落葉せしめ伊をして柳綠花紅せしむ、造次も顚沛も死此も生彼も飢ゑ來れば喫飯し困じ來れば打眠す皆な悉く雄辯に眞理を説明して居るに非ずや。造次は物を組立る間をいひ顚沛は物のくつがへり落る間をいふ、寢るも起るもといふ位の意である、言語も事業も動いたり止まつたりする威儀も重ねて是れ説法なり、有言とか無言とかいふ舌頭上の説のみにあらず所謂不言の言無舌の語であるから、その説法は眼にも見るべく耳にも聞くべしすべて堂々として現はれ來り、明々として覆藏せざる者あり、所謂水鳥樹林念佛念法である、縱ひ蝦蟆の池畔に鳴き蚯蚓の草間に鳴くに至るまで決して他物に非ず、悉く是れ幽識の放光明である、是の如く一切時一切處に現はれ來るを以ての故に常説熾然その説法に間歇無しといふなり。

子細に見得せば、必らず後日洞山高祖の如く他の爲に模範と爲ることを得ん。

且く如何が此の道理を說取せん。

微微幽識非情執。平日令伊說熾然。

人々一段の光明の在るあり、若し切實に大道を欣求して子細に此の事を見得せば、吾人も亦後日洞山高祖の如く他の衆生の爲に模範と爲ることを得ん、佛祖の往昔は我等なり、我等が當來は佛祖ならん、唯だ須らく精進辨道して此の一大事因緣を究盡すべきである。且く如何が此の洞山悟道の端的たる無情說法の道理を說取せんといふて、例の如く七言二句の頌を示さる、微微たる幽識情執に非ず、平日伊れをして說熾然ならしむ、人々分上曾て缺かざる本來心の幽識は微々として眼見耳聞の及ぶ所に非ず、微々とは不明の貌である、是を妙法とも不可思議光とも稱す、故に幽識と稱すと雖ども情執に非ず妄情執着の我と我所では無い、然れども此の幽識は吾人の本心、宇宙の大靈にして常住無間に活動して息むこと無し、故に平日伊れ幽識をして熾然に說法せしめて居る、溪聲便ち是れ廣長舌山色豈に清淨身に非ざらんや、夜來八萬四千の偈、他日如何が人に擧似せん、とは蘇東坡が此の大說法を聞着し得た時の喜びである。縱ひ八萬の法藏を諳んずるの聰明漢なりとも、若し世尊拈花の轉大法輪を聽取すること能はずんば爭でか正法眼藏を禀受することを得ん、縱ひ辯才無礙なること文殊大士の如くなりとも、若し維摩の一默に耳聾ならば豈に入不二の法門に證入することを得ん、承陽高祖は艸木牆壁は能く凡聖含靈の爲めに宣揚し、凡聖含靈はかへつて草木牆壁の爲めに演暢す、自覺々他の境界もとより證相をそなへて缺けたること無く證則行なはれておこたる時なからしむと仰せられたり、這箇の說法は六根門頭を閉却して始めて聞着の分があるであらう。

第三十九章

第三十九祖、雲居弘覺大師。參洞山。山問曰闍梨名什麼。師曰道膺。山曰向上更道。師曰向上道即不名道膺。山曰與吾在雲巖時祇對無異也。
以上本章の本則、以下御提唱例の如し

師は幽州玉田の人なり。姓は王氏、童丱にして范陽の延壽寺に出家し、二十五にして大僧と成る。其の師聲聞の篇聚を習はしむ。其の好みに非ずして之を棄てゝ遊方す。翠微に至り道を問ふ。會〻僧の豫章より來るあり。盛んに洞山の法席を稱す。師遂に造る。山問ふ甚の處より來る。師曰く翠微より來る。山曰く翠微何の言句ありてか徒に示す。師曰く翠微羅漢を供養す、某甲問ふ

羅漢を供養す羅漢還て來るや否や。徹曰く儞每日箇の甚麼をか噇ふ。山曰く、實に此の語ありや否や。師曰く有り。山曰く虛く作家に參見し來らず。山問ふ闍梨名は什麼ぞ乃至祇對と異なること無し。

雲居禪師は幽州の玉田の人、姓は王氏、童丱はあげまき髮を束ねて兩角の如き者、即ち幼稚にして范陽の延壽寺に投じて出家せられ、二十五歲にして戒法を受けて大僧と成りしが、其の師は更に聲聞戒にて傳ふる所の五篇七聚の戒法を習はしめられた、聲聞戒とは小乘の戒法にて五篇七聚と稱する緻密なる戒目があつて專ら自調解脫即ち自己一分の規律淨行を目的として居る。禪師は元より大乘の法器でありしかば形式に拘泥する小乘自利の戒行は其の好む所に非ず、依て之を棄てゝ四方に遊歷せられた。先づ初めに終南山の翠微無學禪師の處に至りて道を問ふて參學せられた、會〻一僧の豫章方面より來るあり盛んに洞山大師の法席の殷賑なるを稱贊す、禪師深く之を敬慕して遂に洞山の會に造る、洞山問ふ汝甚の處よりか來る、脚跟下の點檢である、師曰く翠微より來る、洞山曰く、翠微近頃何の言句ありてか徒に示すや、禪師曰く、翠微此頃羅漢尊者を供養せられた、某甲是に於て、和尚今日羅漢を供養す知らず羅漢還て來るや、若し羅漢來らずんば供養も亦た徒勞なるべし、若し來るとせ

ば如何が相見せん、翠微曰く、儞每日箇の甚麼をか喫ふ、舊きに依て早朝喫粥午時喫飯して、法身の慧命を養ひつゝ佛威儀を行ずるに非ずや、若し能く自己を見得せば始て羅漢を見ることを得ん、是れ實に老婆徹慨の垂示である。洞山曰く、翠微實に此の語ありしや、禪師曰く實に有り、洞山曰く、若し此の語を會得せば汝は盧く作家に參見し來らず、問法參禪の功ありと謂ふべし。作家とは一家を作すの意にて堂々たる宗師家分上のこと、自己是れ羅漢なることを體得せざれば活羅漢に相見すること能はざるべし、洞山更に第二の鉗鎚を下して闍梨名は什麼ぞと問着し乃至吾れ雲巖に在りし時の祇對と異なること無しといふ本則の問答があつたのである。

師、洞水を見て悟道し、即ち悟旨を洞山に白す。山曰く吾が道汝に依て流傳窮り無けんと。爾るのみならず。有る時師に謂て曰く。吾れ聞く思大和尙倭國に生れて王と作ると是なりや否や。師曰く若し是れ思大師ならば佛とも亦作らず。況や國王をや。山之を然りとす。一日山問ふ甚麼れの處にか去來す。師曰く蹋山し來る。山曰く那箇の山か住するに堪えたる。師曰く那箇の山か住するに堪えざらん。山曰く恁麼ならば則ら國內總に闍梨に占却せらる。師曰く然らず。山曰く恁麼ならば則ち子箇の入路を得たりや。師曰く路なし。山曰く若し路なくんば爭でか老僧と相見することを得んや。師曰く若し路あらば即ち和尙と隔生し去らん。山曰く此子以後千人萬人も把不住ならん。

禪師は一日洞山より流れ出る洞水を見て廓然として悟道し、即ち其の悟道の旨を洞山大師に告白せられた、其の行持といひ知見といひ實に綿密正確でありしかば、洞山は之を證明せられて曰く、吾が道汝の力に依て永久に天下に流傳して窮り無けんと仰せられた。爾るのみならず、有る時洞山は禪師に謂て曰く吾れ聞く南嶽惠思大和尙が倭國即ち日本國に生れて聖德太子と稱せられ攝政の王と作ると果して是なりや否や、肯定し得べきや如何、禪師曰く、若し是れ眞實の惠思大師ならば決してその樣なことはあるまじ、既に達磨に參じて正法眼藏を開悟し生死の牢關を透破し凡聖の岐路を截斷す、故に佛とも亦作らず況や國王をや、錯て生死の相を認めなば是れ其の影を捕へ塊を逐ふもので、恐くは思大師の法身舍利に辜負するであらう、併し洞山の所謂思大師は歷史上の大師に非ずして眞如法性の眞面目を提唱せられたものと見るべきである、洞山も之を然りとして肯はれた。一日洞山問ふ、汝今日甚

麼れの處にか去來す、禪師曰く、山を蹋み來る、洞山曰く、那箇の山か汝の住居とするに堪えたる、釋尊は華嚴を説き般若を談じ法華涅槃を開示す、皆な是れ向上の法門である、汝は何れの處を以て安心立命の地となすや、禪師曰く、那箇の山か住するに堪えざる、盡十方世界總に是れ遊戯場、虛空法界處として寂滅道場に非ざるは無し、洞山曰く恁麼に道ふが如くならば國土世界の內は總に闍梨に占却せらるるであらう、闍梨は梵語具さには阿闍梨此に軌範師と譯す、五夏以上は闍梨の位十夏以上は和尙の位ともいふて、修行稍や昇達して他の軌範と爲すべき者を稱す、今は尊前とか貴公とかいふが如き敬稱である、一國を占領し去らば恐くは平等の見に偏せずや、禪師曰く、然らず、決して平等門に墮在せず、洞山曰く、恁麼ならば子箇の入路を得たりや、特別に入山の路ありて是の如く大運動を打するものなりや、禪師曰く、路なし、出入去來の相を認めては祖門下の遊山は不可能である、洞山曰く、若し入山の路なくんば果然として一色光中に在るを以て爭でか老僧と相見することを得ん、目前に闍梨なく此間に老僧なしとせば臣は君に奉し子は父に順ずる底の遊戯三昧なきに非ずや、禪師曰く、若し路あらば即ち和尙と生を隔て去らん、幸にして路なし道本と圓通何ぞ出入に煩はん故に和尙と感應道交して師資の道即通す、若し路あらば自身と和尙とは生を隔てゝ面授面稟の消息を通ずること能はざるべし、禪師の此の一語は誠に是れ正偏回互、君臣道交の活機輪にして、穩々當々の中に壁立萬仭の嶮處あることを知るべし、故に洞山曰く、此の子は實に祖門の豪雄なり今日以後千人萬人の力を以てしても把不住にして執へることも押へることも出來ぬであらう。

師、洞山に隨て水を渡る次で、山問ふて曰く水深きか淺きか。師曰く濕はず。山曰く麤人。師曰く請ふ師道へ。山曰く乾かず。山、師に謂て曰く南泉僧に問ふ甚麼の經をか講ず。曰く彌勒下生經。泉曰く彌勒幾く時か下生す。曰く見在には天宮。當來は下生。泉曰く天上に彌勒なく地下に彌勒なし。師、洞山に問ふ。天上に彌勒なく地下に彌勒なくんば未審し誰か與に名を安ず。山問はれて直に禪床震動することを得て乃ち曰く、膺闍梨吾れ雲巖に在て曾て老人に問ふ直に火爐震動することを得たり。今日子に一問せられて直に得たり通身汗流るゝことを。師資問答異なる事なし。一會肩を齊ふする者なし。

洞山雲居の二師其の親しきこと父子よりも切なり、師資の問答往來の跡子細に翫味して見るが宜い、正に是れ木人方に歌ひ石女立て舞ふが如き觀がある。禪師一日洞山に隨侍して河水を渡る次で、洞山

問ふて曰く、水深きか淺きか、古人は道中し乍らも一大事の研究に沒頭して居られる、水とは吾々の脚跟下である、吾人が人生に處して出處進退して居る此の人生是れ樂か是れ苦か、是れ淨土か是れ穢土か、是れ佛界か是れ魔界か將た又淺き凡夫世界なるや、深き聖賢の世界なるや、禪師曰く、濕はず、禪界に欲なし佛界に魔なし、通身本來解脫して固より深淺の論を絕す、故に脚跟下一滴の水も也た無し、是れ雲居の不動三昧である。洞山曰く、麤人、荒ら過ぎる餘りに大膽である、佛法は更に綿密の行持なかるべからず、禪師曰く、請ふ師道へ、師の說明こそ願はしけれ、洞山曰く、乾かず、水中に在りては水に背かず人生に處しては人生に背かず、苦樂昇沈の跡を留めざれども水には水の三昧あり人生には人生の安禪なかるべからず、是れ實に潛行密用の妙訣である。或時洞山禪師に謂て曰く、曾て南泉普願禪師講經の僧に問ふ、甚麼の經をか講ず、僧曰く、彌勒下生經を講じて居る是れ豫め彌勒菩薩當來に下生して成道說法し玉ふべき事を說かれたる經典なり、南泉曰く、彌勒は幾時にか下生するや、僧曰く、見在には兜率天宮に在りて說法し、當來五十六億七千萬歲を經て此の婆婆世界に下生し龍華三會の曉に成道し玉ふ、南泉曰く、天上に彌勒なく地下に彌勒なし、心外に法を求むる是を外道といふ、法界虛空都盧一團の佛光明、這裡彌勒も無く衆生も無し、若し强て彌勒を見んと欲せば果然として空裏に華を捉ふることを免れず、是れ實に南泉向上の提唱である。其の時禪師は洞山に問ふて曰く天上に彌勒なく地下に彌勒なくんば未審誰が與めにか彌勒の名を安ずるや、南泉惜い哉靈龜尾を曳き其の迹を拂ふことを知ると雖も其の名に滯ふることを如何せん、向上更に向上の事を道破するを要すと、禪師の一語鐵壁銀山も猶ほ百雜碎の英氣あり、洞山は此の一問に逢ふて直に禪牀の震動するを覺え、乃ち身震ひせられた、依て乃ち曰く、道膺闍梨よ吾れ雲巖に在りて曾て雲巖老人に一問せし時直に火爐ががた〳〵と震動せしことありき、汝の禪機極めて嶮峻恐くは三世の諸佛も亦退身三步するであらう、今日子に一問せられて直に得たり通身汗流るゝことを、是の如く師の洞山と賓の雲居との問答は常に同道唱和して相異なる事なし、されば洞山の一會雲居と肩を齊ふする者なし、恰も迦葉尊者の釋尊の會座に於けるが如くであつた。

師、後に庵を三峰に結んで旬を經て堂に赴かず。山問ふ子近日何ぞ齋せざる。師曰く毎日自から天神の供を送るあり。山曰く我れ將に謂へり汝は是れ箇の人と猶ほ這箇の見解を作すこと在り。汝晚間に來れ。師晚に至る。山、膺庵主と召す。師應諾す。山曰く不思善不思惡是れ甚麼ぞ。師、庵に回て寂然と

して宴坐す。天神此れより卒に尋ぬれども見えず。是の如きこと三日乃ち絶す。山、師に問ふ甚麼をか作す。師曰く醬を合せ去る。山曰く多少の鹽をか用ゐる。師曰く旋入る。山曰く何の滋味をか作す。師曰く得たり。山問ふ大闡提の人五逆罪を作る孝養何んか在る。師曰く始て孝養を成すと。爾しより洞山許して室中の領袖と爲す。師始め三峰に止りて其化未だ廣まらず、後に法を雲居に開き四衆臻萃す。

○師は曹山禪師と與に洞山の堂奥に參徹して其の秘藏を傳承せられたので、一擧一動一言一句が實に宗門萬古の儀表である、故に後日衆に示して、此事を保任することを得んと欲せば、須らく高々たる峰頂に立ち深々たる海底に行き方に些子の氣分あるべしと言はれた。嘗て草菴を三峰に結で修練せられし時、旬を經れども洞山の食堂に赴かず、旬は十日をいふ、或時洞山問ふ、子近日何ぞ堂に來りて午齋を喫せざる、禪師曰く、毎日自ら天神の來りて供物を我が爲めに送るあり、乃ち天神の供養を享けて居られたのである、洞山曰く、我れ將さに謂へり汝は是れ箇の眞實の大道人と、然るに猶ほ這箇の見解を作すこと在り、天神の供養を受けて滿足する樣な考をなし居るや、汝試に晩間に來れ我れ汝が爲めに教ふる所あるべしと。禪師晩に至る洞山驀直に膺菴主と召す、禪師はいと應諾す、洞山曰く、不思善不思惡是れ甚麼ぞ、善惡の分別を離脱して大無我の境に證入せば其の證入する底の者は何物ぞ、是れ通身影像なき空王那畔の眞面目を直指せられたのである。禪師は此提撕を得て菴に囘り寂然として宴坐するに、天神供物を捧げ來るも此より覓に尋ぬれども禪師の姿を見ることが出來なんだ、此の如く三日を過ぎて天神も思ひ切て供を送ることを絶つた。或る時洞山問ふ、甚麼をか作す、禪師曰く、醬を合せ去る、味噌醬油の手入であつたと見える、洞山曰く、多少の鹽をか用ゆる、鹽加減が一番大切である、迷ふが故に三界城、悟るが故に十方空、凡聖も苦樂も一心の鹽加減如何に依て分る、禪師曰く、旋や入る、程々に調和して居ります、現前を得んと欲せば順逆を存すること勿れ、一法に執すれば早く邪見に墮す、適度の鹽梅是れ修養の秘訣である、洞山曰く何の滋味をか作す、どんな御馳走が出來るぞ、三界解脱か衆生濟度か、禪師曰く得たり、どんな御馳走とも説明は出來ぬが從劫至劫法味に飽滿して無上の法樂を得て居ります、是れ絶學無爲の閑道人妄想を除かず眞をも求めざる底の自受用三昧である。或時洞山問ふ、大闡提の人五逆罪を作るとせんに此の人猶ほ孝養の分ありや、大闡提とは信不具と譯して無宗教者のこと、五逆罪とは父母を殺し羅漢を殺し佛身血を出し和合僧を破り羯磨僧を破るの五大重罪を犯すこと、羯磨僧とは佛教の作法辨事をいふ乃ち作法を破壞するの罪過で

ある、禪師曰く、始めて孝養を成す、祖門下に於ける一闡提とは佛地を跨跳する底の人、五逆罪とは獨立無伴の境界、故に佛見法見を立せず一切萬境を解脱してこそ能く九族を救ひ佛意に酬ゆることが出來る、是れ正しく恩を棄てヽ無爲に入る眞實恩に報ゆる者である、雲居の堅實なる行持卓越せる知見は實に當代に冠絶するものがあつたから、爾しより洞山は許して室中の領袖、一會の上座として待遇せられた、領袖は首領といふ意味である。禪師始め三峰に止まりし時は其の教化未だ廣まらざりしも、後に法を雲居山に開きてより比丘比丘尼優婆塞優婆夷の四衆が潮の如くに輳り雲の如くに萃まりて遂に天下の大叢林を作したのである。

實に師初め翠微に見えてより、洞山の會に參じて曹山と兄弟たり。適來の問答、師資の決疑悉く以て至れり。既に洞山の懸記あり吾が道汝に依て流傳無窮ならんと。其の言虚しからず展轉囑累して今日に及べり。實に洞水流傳し來る。其の道今に乾爆爆たり。淸白家に傳へ來る。其の源今に乾かず。冷秋々たり。既に一問を出す時其大機を運ぶ。因て禪牀震動するのみならず。通身汗流る。是れ古今稀なる所なり。然れども尚ほ三峰庵に住して天の食を送りしに、山曰く我れ將に謂へり汝は是れ箇の人と猶ほ這箇の見解をなすことありと。言て晩間呼び來して膺庵主と召す。即ち應諾す。是の如く應諾する者、是れ天食を受くべからざる者なり。喚で決擇するに不思善不思惡是れ甚麼ぞと。這箇の田地子細に透到し恁麼に見得するとき。諸天卒に花を棒ぐるに路なく、魔外竊かに伺ひ求むるに見えず。恁麼の時節佛祖も尚ほ是れ怨家。佛眼も竟に覰不見なり。恁麼に承當するとき合醬しもてゆき旋入し來る。得得として他に依らず。故に大闡提の人父を殺し母を殺し佛を殺し祖を殺す五逆重ねて作る。此の時孝養意に存する所なし。恁麼の見處を親切に試みんとするに是の如し。父子の恩何くんか在る。曰く始て父子の恩を成す。曹山の道取と是れ一般なり。

實に雲居が初め翠微無學禪師に見えてより洞山の會座に參じて彼の有名なる曹山本寂禪師とは法の兄

弟たり、洞山には澤山なる法嗣があつて史傳に出づる者が二十七人、外に投機の者十有九人もあつたが、雲居は其の中の第一座であつた。既に洞山の將來を豫記する懸記もありて、吾が道汝に依りて流傳窮まり無からんと仰せられ、其の言ば虚しからず雲居の法子法孫が展轉と順次に兒孫に囑累して今日に及べり懸記の懸はかゝると訓じ因縁の將來に關係するをいふ、囑累とは親く遺言して將來を囑託すること、實に洞山の法水が永久に流れ傳はり來る、其の道今に盛昌を極めて居る、乾爆々とは火力に依りて水が乾き爆々と火がパチ〳〵はねる貌、清白家とは棒喝本位の禪機を弄せず清淨潔白に佛祖の身心を學得するの家風をいふ、その清白家に傳へ來る、其の道今に乾かず冷湫々とは水の深く湛へて清冷なるをいふ、湫々は水の溜りて湛ゆる貌、前に洞水が燃え揚りといはれ此には靈源が湛えて居るといふ、火と水とを回互して正偏自在の宗風なることを示されたる深意を味ふべきである。既に彌勒の問題で未審し誰が與にか名を安ずとの一問をいだす時その偉大なる禪機を運用せられたから、洞山も禪牀が震動するのみならず通身汗流るとある、是れ古今に類ひ稀れなるところなり、然ども尚ほ三峰菴に住して天神の供養食を送りしに對し、洞山は之を誡めて曰く我將さに謂へり汝は是れ箇の人と尚ほ這箇の見解をなすことありといひて、晩間改めて喚び來して膺菴主と召された、雲居即ち應諾す、是の如く應諾する者是れ甚物ぞ、是れぞ涅槃妙心にして天神地祇も窺ふに路なし即ち天食を受くべからざる者なり故に洞山は雲居を喚ぶ宗門の大安心を決擇するに、不思善不思惡是れ甚麽ぞといふ鐵槌を下された。雲居は是に於て這箇本分の田地に子細に透到し、恁麽に應諾する底の那人を見得する時、諸天の通力を以てしても卒に花を捧ぐるに路なく惡魔外道も竊かに伺ひ求むるに見えず、恁麽の王三昧に安住したる時節佛祖と雖ども尚ほ是れ怨家の如くにして傍にも寄せつけぬ、佛眼を以てするとも竟に覰不見で覰ひ見ることを得ず、恁麽の田地に承當する時始めて合醬しもてゆき醍醐の法味を調ふることが出來旋入し來る、漸々に修養の實蹟が現はれる。此の時こそ得々と元氣横溢して一切の二邊を脱落し他の迷悟凡聖等の故巣に依らぬ、故に大闡提の人の如く佛を信ずるといふ心と所信の境との對待を離れ獨立にして伴侶なきを以て、父を殺し母を殺し佛を殺し祖を殺す五逆を重ねて作る、この時孝養といふことも意中に存するところなし、世法と佛法とを超越し妄情と道情とを跳出する底の境界である。雲居果して恁麽の見處に達するや否やを親切に試みんとするに是の如く孝養の問題を試みられて、父母の恩何くんか在ると問はれたのである、然るに雲居は始て父子の恩を成す、佛祖門中の孝養是に於て成ずと明白に斷案を下された。曹山禪師嘗て僧あり問ふて曰く、子歸つて父に就く甚麽としてか、父全く顧みざるやと、幻化の空身が法身に冥合する時體用一如であるから顧みるべき間隔は無い、故に曹山は理合に是の如くなるべしと答へた、顧みやうとて顧みらるべきものでは

無い、僧は更に父子の恩何くんか在る、孝順は至道の法である、父が子を顧みず　父子の恩情は無きに非ずや、此の時曹山は、始て父子の恩を成すと曰はれた、雲居の答話は全く曹山の道取と是れ一般にして割符を合せし如くである。

故に室中の領袖として入室瀉瓶を蒙ぶる因緣、殊更に山問て曰く闍梨名は什麽ぞと。師資相見の人を見ること舊情を以てせず因て名は什麽ぞと問ふ。知るべし洞山師の名を知らざらんや。然れども是の如く問ふ。是れ來由なきに非ず。師答るに道膺と。設ひ千變萬回問來問去すとも、尙ほ是の如くなるべし。曾て來由すべからず。恁麽の見得不肯に非ずと雖ども、更に他の透關逸格の機を具すや否やと言はん爲めに、問ふ向上更に道へと。師已に六根不具七識不全唯だ破癩の如く、又芻狗に似たり。因て向上に道はば即ち道膺と名けずと。這箇の田地に到ること大に難し。それ參學未だ此に到らざれば作家の種草に非ず。尙ほ解路葛藤に亂さるゝことあらん。此の田地を保任し來ること、細やかなるに依りて、末後一大闡提人の問答あり。違背の處なし。

雲居は實に是れ洞山の宗旨を體得せられた故に室中の領袖即ち上首として入室を許され一瓶の水を一瓶に瀉ぐが如き付囑を蒙むるに至つたが其の證契即通の因緣が此の章の本則である。洞山は雲居の脚跟下を驗辨せんが爲め殊更に風なきに波を起して闍梨名は什麽ぞと問着した、徒らに俗名を聞くのでは無い、全く自己の本面目の詮鑿である、此の自己をば佛性とも妙心とも名づけたのであるが、それも畢竟假說の名字である、即今呼で甚麽とかなす、師と資と相見の時その人を見ること、舊見や妄情を以てせず因て名は什麽ぞと問ふ、知るべし洞山は雲居の名を知らざるには非ず、然れども是の如く問ふ、是れ來由のいはれなきにあらず、雲居は答ふるに道膺と、誠に僞りなき答話である、歷劫名なし且らく呼で名を付す、山と呼び河と呼ぶも亦た然り、縱ひ千變萬回幾度繰り廻して問ひ來り問ひ去るとも猶ほ是の如くなるべし、此の外には別に答へ樣が無い、外に理窟の付け樣が無いから、曾て來由すべからず、是れ雲居の理致を超越したる識見である、故に恁麽の見得底不肯即ち肯定せざるには非ず、不是には非ずと雖ども、更に他の雲居に猶ほ一重の關を透破し普通の格則を逸過するの禪機を具足すや否やと言はん爲めに問ふ、向上更に道へと、此の言はんはこゝろみんの誤記にはあらざる

かと思はるゝ。雲居は既に身心脫落して六根も具へず七識も全たからず、六根は身で七識は心なり、癩病患者の鼻目破れて面目を喪失するが如く、又は藁作りの狗に似たり、身心あれども無きが如く既に大虛空裏に向て非思量の三昧に坐して居られる、因て向上に道へば道膺と名けずと道破せられた、扨て這箇の田地に到ることは大に難事である、阿難の刹竿倒却、二祖の不可得、六祖の本來無一物、洞山の無情說法、悉く異曲同工である。夫れ參學の士として未だ此の境致に到らざれば作家たるべき宗匠の種草にはあらず、尙ほ妄見より發する解路に彷徨し名字の葛藤に拘泥して正知見を亂さるゝことあらん、雲居は能く此の田地を保任し來ること細やかにして綿密なるに依りて、末後に洞山との間に於て一大闡提人の大公案に關する問答あり、始て孝養を成ずといふ處に於て洞山の宗風を正傳し毫もその宗旨に違背のところなし、是れ實に雲居の正法眼藏である。

諸仁者識破せば即ち本色了事の衲僧ならん。今日又如何なる言ありてか此因緣を識破し得たりとせん。又聞かんと思ふや。良久して曰く、

名狀從來不ㇾ帶來。說ニ何向上及向下一

前文を總結して諸仁者此の公案を識破せば即ち本色の鐵漢にして大事了畢の衲僧と稱することを得べし、今日又如何なる言ありてか此因緣を識破し得たりとすることが出來やうか、諸人者又聞かんと思ふやと仰せらる。良や久ふして、七言二句の頌を示されて曰く、名狀從來帶び來らず、何の向上と及び向下とか說かん、洞山が闍梨名は甚麼ぞと問はれたるは人々自己の問題である、此自己を究盡して見よ、佛と稱し凡夫と稱し菩提と稱し煩惱と稱す、皆な假名字に過ぎぬ、若し假名字に固執せば水中に月を捉ふるよりも果敢なし、此の自己大には方處を絕し細には無間に入る、從來何等の名目も形狀も帶び來つては居らぬ、洞山は向上更に道へと問はれたが、自己本來の面目には向上とか向下とか說き明かすも混沌に眉を描く樣なものである。古語に、把住すれば眞金も色を失なひ、放行すれば瓦礫も光りを放つとある、把住し去つて平等法界に安住するは向上門で、放行し來つて差別門頭に遊戲するは向下門である、されど法の本法本と無法、自己の本面目には平等とか差別とかいふ區別も無い筈である、須らく兩頭を截斷して正中妙挾の處に向て參究し去るべし。

第四十章

第四十祖。同安丕禪師。雲居有時示曰。欲得恁麼事。須是恁麼人。既是恁麼人。何愁恁麼事。師聞自悟。

以上は本則にして雲居上堂垂示せられし最後の語である、恁麼といふは直趣無上菩提のことをいふ、乃ち人々具足の佛性、本來圓通の大道である、從來名くる所なく、且らく稱して如來藏とも涅槃妙心ともいふ、今は是を恁麼といはれた、承陽高祖には正法眼藏中に恁麼の卷の親訓がある、須らく拜讀して子細に參究するが宜い、太祖の御提唱は最も徹悃にして親切を極められてある、以下力を盡して研鑽すべきである。

師は何れの許の人と云ふことを知らず。即ち雲居に參じて侍者と爲りて年を經る。有る時雲居上堂して曰く。僧家言を發し氣を吐く須らく來由あるべし。等閑を將てすること莫れ。這裏是れ甚麼の所在ぞ。爭でか容易なることを得ん。凡そ箇の事を問ふ也た須らく些子の好惡を識るへし、乃至、第一に將來すること莫れ。將來すれば相似ず。乃至、若し是れ有ることを知る底の人ならば自ら護惜することを解すべし。終に取次ならず。十度言を發し九度休し去る。甚麼としてか此の如くなる。恐怕らくは利益なからん。體得底の人は心臟月の扇子の如し。直に得たり口邊醭出づることを。是れ強て爲すにあらず任運是の如し。恁麼の事を得んと欲せば、乃至、何ぞ恁麼の事を愁へん。

禪師諱は道丕、何れの許の人なるや其の誕生地及び經歷を詳かにせず、即ち雲居に參じて侍者と爲り幾年月を經られた、有る時雲居上堂して曰く、祖師門下の衲僧家が尋常言を發し氣を吐くには須らく來由即ち確實なる理由あるべし、等閑を將てしてはならぬ、若し胡亂に大言壯語せば啻に口業を招ぐのみならず他を惑亂すること少なからざるべし、這裏是れ甚麼の所在ぞ、汝等はそも如何なる地位に在りと思ふぞ、佛祖の兒孫として法身の慧命を相續するの大責任を有して居るではないか、して見

れば其の一言一行爭でか容易なることを得ん、實に放身捨命して究辨すべきことである。凡そ箇の佛法の一大事を問ふには、須らく些子の好惡を識らねばならぬ、些子とは少し計りといふ語であるが、今は大體に於ける善惡是非の甄別力即ち參禪上の常識が無ければならぬ、傳燈錄には、凡そ事を問ふには須らく好惡尊卑貴賤を識るべし口に信せては益なしとある。次に、傍家到る處相似の語を覓む、故に尋常ね兄弟に問て道ふ相似ならざるを怪む莫れ云云とあるを略して乃至とせられたのである、是に由て之を觀れば雲居の時代にも既に相似の語を記憶して口に任せて商量する者が多かつたと見える。先づ第一に將來すること莫れ、色々の記憶などを將て來てはならぬ、そんな物を將來し擔ぎ廻つては相似せず、宗乘に似たこととすらも言はれまいぞ、此の次に、八十の老人場屋に出づ是れ小兒の戲に非ず、一言も參差すれば千里萬里收攝を爲し難し云云の垂訓あるを略して乃至せられた、乃ち老優が檜舞臺に出でたる如く畢生の技術を顯はすべきである、決して小兒の戲むれの樣な眞似をしてはならぬ、一言の過誤も取り返しのつかぬ失敗を招くものぞとの誡めである。故に若し是れ有ることを知る底の人は自ら法門を保護し愛惜して佛祖の眞生命を維持し宗義の神聖を侵害せざる樣正確に大道を解了し心得ねばならぬ。終に取次して自分勝手な取扱をせまいぞ、十度言を發せんとしても九度迄は遠慮して休し去る樣に成るべく無益の言を用ぬ樣にするが宜い、甚麽として此の如く八釜しく注意するかといふに、謂はれなき說明の徒らに多辯を好むことは恐怕らくは自他ともに何等利益ある所が無いであらうと思ふからである、眞實宗乘を體得する底の人は、其の心までが臘月の扇子の如く有れども無きと同然で心念を發起せぬ、常に無心の狀態に住して居る、故に言語も亦た亂りに發せぬから直に得たり口の邊から醭が湧き出づることを、是れも强ち斯く爲さしむるのでは無く、大法を重ずる者は任運に自然に是の如くなるものである。是れは宗乘そのものが言語道斷心行處滅で言辭を離れ分別念慮を超越したものであるからである、是れ則ち恁麼事である恁麼の事を得んと欲せば、須らく是れ言外に宗を會し無心に心を證する恁麼人なるべし、此の法は人々分上ゆたかに備はりて他より求むべきものに非ざれば、箇々盡く既に是れ恁麼の人であれば、何んぞ恁麼の事の體得すること難きを愁へんや、唯だ凡情を盡くせば別に聖解なし、直下に承當すれば、一刹那の間にも佛祖の大道に圓通することが得られやうぞ。

恁麼事即ち得難きこと是の如く示すを聞きて、師乃ち明らめ、終に一生の事を辨じて、後に洪州鳳棲山同安寺に住す。道丕禪師なり。盛んに雲居の宗風を開演す。有る時學者問ふ頭に迷ふて影を認む如何んが止まん。師曰く阿誰

にか告ぐ。曰く如何して即ち是ならん。師曰く人に從て覓めば即ち轉た遠し。曰く人に從て覓めざる時如何ん。師曰く頭甚麼の處にか在る。僧問ふ如何なるか是れ和尚の家風。師曰く金鷄抱子歸霄漢、玉兎懷胎入紫微。曰く忽ち客の來るに遇はば何を將てか祇待せん。師曰く金菓早朝猿摘去、玉華晩後鳳銜來。

恁麼の事即ち容易に證得行得し説得すること難きこと是の如く示すを聞きて、同安は乃ち能く此の事を明らめ終に一生參學の事を辨求して後に洪州鳳棲山同安寺に住せられたのが道丕禪師である。道丕禪師なりの六字は恐くは傳寫人の竄入ならんといふ說もあるが、强ちに削除にも及ぶまいと思ふ。同安に在りて盛んに雲居の宗風を開示演說せられた、その開演の例を擧れば、有る時參學の者來り問ふ、頭に迷ひ影を認む如何が止まん、楞嚴經に演若達多といへる女が晨朝鏡に向ひ自身の頭の映らざるを見て、愚かにも何者にか己れの頭を奪はれしかと驚き騷いだことがある、凡夫が自己本有の恁麼事を了却せず枉て迷衢に彷徨するに演若達多の頭に迷ふに似たり、又愚人あり、自分の影の鏡に映れるを見て是れ己れの影なることを知らず、驚き怪みて騷ぎ廻つたといふことである、凡夫が十界の諸法皆な自心の影像なることを知らず徒らに天界を羨み魔界を憎みて自ら不安の中に苦しむの類は、正しく影を認むるの徒輩である　吾人は常に頭に迷ひ影を認めて繩なき繩に縛られ徒らに煩悶惱亂して休することを知らず、如何が此の惑障を止めんや、同安曰く、何誰にか告ぐ、それは誰に向つて道ふのである他に問着すべき問題ではあるまいぞ、彼の學人は曰く、如何にしてか即ち是ならん、どうすれば宜いでありませう、同安曰く、他人に從て覓めんとすれば却て轉た自己に遠ざかる、但だ自己に返照して脚下を顧りみよ、彼れ曰く、人に從て覓めざる時如何、自己返照の方針を向ふたのである、同安曰く、頭甚麼の處にか在る、自己の頭何處へも去りはせぬ。己の頭を撫でゝ看よ、一佛成道觀見法界草木國土悉皆成佛なるぞ。又有時僧問ふ、如何なるか是れ和尚の家風、同安曰く、金鷄子を抱て霄漢に歸り玉兎懷胎して紫微に入る、霄漢は天をいふ紫微は天帝の座をいふ、黃金の鷄が子供を抱て天に歸り玉兎の月が妊娠して天帝の座に入る。金鷄玉兎は本來寂淨の恁麼事を指す、子を抱くとか懷胎とかいふは天眞の妙用自然の活動をいふ。天地萬象の大より吾人の喫茶喫飯に至るまで皆な恁麼人の妙用である、その妙用の歸着する所は上天の載は聲も無く臭も無しといふに至る、所謂圓通より出でゝ圓通に歸るの意である、正中偏偏中正　正偏回互の妙處と見るも宜い、僧曰く忽ち客の來つて道を問ふに遇はゞ何を得てか祇待し待遇したものであらう、同安曰く、金菓早朝猿摘み去り玉華晩て

後凰銜み來る、無心供養である、猿猴朝に黄金の菓物を摘み去り鳳凰夕べに珠玉の華を銜み來る、求むる心も無く應ずる念も無く、畢竟王三昧裏の法供養で所謂如にして來り如にして去る底の消息である。

はじめ、先師の示す所によりて、眞箇の田地を明らめ得て家風を説くに、金鷄霄漢に歸り玉兎紫微に入ると曰ふ。又爲人する時、金菓日日摘將去、玉華夜夜銜持來と。參學の因縁いづれ勝劣なしと雖も適來の因縁能く子細にすべし。故如何となれば恁麼の事を得んと思はゞ、即ち是れ恁麼の人なり。縱ひ頭に迷て求め來りしも即ち是れ頭なり。謂ゆる永平開山曰く。我といふは誰ぞ、誰ぞといふは我なる故に、良遂座主麻谷に參ず。谷來るを見て便ち門を閉づ。良遂門を敲く。谷乃ち問ふ阿誰そ。良遂答へて曰く良遂。纔に名を稱へて忽爾として契悟し、乃ち云く和尚良遂を瞞ずること莫れ、良遂若し來つて和尚を禮拜せずんば泊んと合に十二部の經論に一生を賺過せらるべし。谷乃ち門を開て悟由を通ぜしめ遂に之を印可す。講肆に歸るに及んで席を散じ、徒衆に告げて云く、諸人の知る處良遂總に知る、良遂の知る處諸人知らずと。

同安ははじめ先師雲居の示す所によりて眞箇の田地たる一大事を明らめ得て、その家風を説くに金鷄霄漢に歸り玉兎紫微に入るといふて正偏回互の妙旨を示された。又爲人する標準として説く時には、金菓日々摘み將ち去り玉菓夜々銜み持ち來ると示された。本文には猿と鳳とを加へてあるが、太祖は之を除いて聊か語句を改められたのは、之を他の事とせず直下人々の日用なることを開示せられたのである、古來祖師方が參學せし所の因縁は何れも道念の流露であつて勝劣の別なしと雖ども、適來擧げ來りし雲居同安の因縁よく〳〵子細に參究すべし、故如何となれば恁麼の大事を得んと思はゞ、即ち是れ恁麼の人なるべし、縱ひ從來は頭に迷ひて自己本具の佛法を他に向つて求め來りしも、その求むる者も別人では無い卽ち是れ頭なり、迷へりと思ふ者も矢張恁麼人である、いはゆる永平開山承陽大師が、我といふは誰のことぞ、誰ぞといふは卽ち我なりと仰せられし祖語を翫味するが宜い。故に昔し麻谷禪師の資たる良遂座主が麻谷に參じた時、麻谷は良遂の來るを見て便ち門を閉づ、是れ麻谷の活機輪の轉處である、良遂進んで門を敲く、麻谷乃ち問ふ、阿誰ぞ、良遂答て曰く、良遂であり

ます、纔かに自分の名を稱し乍ら忽爾として契悟した、自己が自己に當着したのである、乃ち云く、和尙良遂を瞞頇すること莫れ良遂は舊に依て良遂である、他の鼻孔を借て氣息を通ずるに非ず、即ち堂々たる恁麼人である、阿誰ぞ抔といふてごまかしてはなりませぬ。だが良遂若し來て和尙を禮拜せざれば、良遂の良遂たることを知らず、洎んど合に大乘十二部の經論に此の一生を賺過し、だまされて了ふたのであらう、從前幾許の講經徒らに他の寶を算へて自己是れ佛敎なることを覺えざりし、今幸に和尙に參じて、佛敎の即自己なることを了ぜりといふて喜んだのである。そして麻谷乃ち門を開いて良遂を接しその悟得せし由來を通ぜしめ遂に之を印可證明せられた、良遂は講肆即ち講經の莚に歸るに及んで、その講席を解散し徒衆に告げて云く、諸人の知る處は良遂總に知る、良遂の知る處諸人知らず、須らく良遂の知る所に參じて敎外別傳の宗旨を究辨すべしといふたのである。

實に此の知處風を通ぜず。然れば諸仁者。子細に參徹せん時無始劫より以來具足し來る。一時も欠けたることなし。縱ひ思量を以て量り求むるとも即ち是れ我なり。また他に非ず。獨照すとも分別に非ず。また是れ我なり。今新たなるに非ず。謂ゆる眼を使ひ、耳を使ひ、口を使ひ、手を開き、足を動かす。盡く是れ我なり。元來手に執るに非ず眼に見るに非ず。故に聲色の所論に非ず。耳目の所到に非ず。人々子細にせん時、必ず我あることを知るべし。己あることを知るべし。此の處を知らんとするに先づ一切是非を措きて物に依らず他に渉らざる時、此の心獨り明なること、日月よりも明なり。此の心淸白なること霜雪よりも淸し。然れば暗昏昏にして是非を覺えざるに非ず。淨明々にして自己自づから顯はるゝなり。

實に此の良遂の知處は密室風を通ぜず餘人所不見である、然れば諸仁者子細に此の知處に參徹せん時、無始刧より本來具足し來る所の恁麼事であるから凡聖同一性で一時も欠けたること無し、縱ひ思量や學解を以て量り求むるとも畢竟他に在るに非ずして即ち是れ我なり、また他の手裡に在るにあらず、唯一單獨に靈光天地を照すとも凡夫の分別を以て見得すべきに非ず、また是れ我なり、本有妙淨明の心なれば今新たなるに非ず、謂ゆる吾人の身分色に對して眼を使ひ聲に對して耳を使ひ、味に對し

て口を使ひ、手を開きて執捉し、足を動かして運奔す、盡く是れ我れ即ち自己である。併しその自己畢竟何物ぞといへば元來手に取るべき物に非ず眼に見るべき物に非ず、故に聲色の法として論ずべきに非ず、耳目の作用を以て視聽の到る所に非ず、唯だ六根六境を坐斷して人々子細に參究せん時、忽爾として必ず我あることを知るべし、豈に良遂に讓るべきものならんや。此の處を知らんとするには先づ一切の是非善惡をさしおきて、外一物に倚らず、他に向つて渉らざる時、此の心獨り明なること日月よりも明らかなり、智慧德相圓滿して缺くる所なし、又此の心清淨潔白なること霜雪の淨きよりも清し、煩惱罪障の爲めに穢さるゝこと無し、然れば分別心を脫落すといふても、決して暗昏昏と眞暗にして是非を覺えざるに非ず、根本智も差別智も自然に發現するを以て、淨潔明々にして昧ます所なき本來の自己が自づから顯はるゝなり普勸坐禪儀に、身心自然に脫落して本來の面目現前すとあるは此の消息を示されたものである。

故に諸仁者。語默動靜を離れ皮肉骨髓を帶せずといふ者なしと思ふこと勿れ。又兀然獨立して我とも思はず他とも言はず、如何にといふ心なし。株の立るが如く全體物に倚らず無心なること草木の如くと思ふこと勿れ。佛道の參學豈に草木と同じかるべきや。元來自なく他なし。都て一物なしといふ所見は外道の斷見二乘の空見に同じし。大乘極則豈に二乘外道に同じくすべけんや。子細に精到して正に落著せん時、有といふべきに非ず空朗朗なるゆゑに。無といふべきに非ず明了了なるゆゑに。是れ身口意の分つ所に非ず、是れ心意識の辨ふべきに非ず。如何が此の道理を通じ得ることあらん。

空手自求空手來。　本無得處果然得。

故に諸仁者宜しく勇猛精進して恁麼人を見得せよ、此の恁麼人は大小長短の量を絕し迷悟凡聖の域を脫して居るに依て、語默動靜をも離れ皮肉骨髓をも帶せず、是を無位の眞人とも稱す、斯かる不思議體のものはなしと思ふこと勿れ、三世の諸佛も此の不思議體のものゝ爲めに難行苦行もせられたのである。さればとて此の恁麼人は、兀然不動山の如く獨立して我とも思はず他とも言はず、如何にといふ心もなし、乃ち無念無想無意識にして唯だ株などの立てるが如く、その全體孤獨にして物に倚らず、無心なること草木の如くであると思ふこと勿れ、卽ち孤立して石の如く固まり山の如く高く草木の如く無意識なものと思ふてはならぬ。此の恁麼人には任運にして智德あり斷德あり恩德もある、決して

死物では無い、佛道の參學豈に草木と同じかるべき物を目的として修證すべきや、元來自もなく他もなし總て一物なしといふ單空一偏の所見は、外道の斷見や聲聞緣覺の二乘の空見に同じ、苟も大乘佛教の極則たる禪門に參學する者豈に二乘や外道に同じくすべけんや、子細に精到し精密に到達して正に本分の地に落着せん時は逈かに兩頭の見解を超脫するものである。有といふべきに非ず有の見に住らぬ、此の恁麼事は空朗々で本來空寂にして朗々と障礙がないからである、又無といふべきに非ず、無の見に住らぬ、此の恁麼事は明了了で法々位に住して世間の相常住で明歷々にして少しも藏す所がないからである。扨て斯く有無の窩窟を驀過したる大知見は、是れ人間の身口意の作用を以て判斷し分つべき所に非ず又心意識の妄分別即ち有限の知慮を以て辨解しわきもふべきものに非ず、然らば如何んが此の道理を分明に通じ得ることあらん、諸人聞かんと要すや、例に依て七言二句の頌を付せられて參學者を提撕せられた。此の恁麼事は如何にして之を求むべきやといふに、空手にして自ら求め、空手にして來る、本無得の處果然として得たり、一切の對待の見を放下し空手にして自ら求むべきの法である、求め得たる上は空手にして還り來るべきものである。承陽大師は、佛法を習ふといふは自己を習ふなり自己を習ふといふは自己を忘るゝなりと仰せられた、自己を忘るゝ時は對待の諸法一物もその身にうけぬ、全く空手空身にして求むるのである、又今事門頭に還り來て度衆生の願行を營むにも所謂無我の妙用、不染汚の往來であるから空手還鄉である、此の恁麼事は本來所得なきもの是を本來無一物と曹溪は言はれた。此の無得の處に達するには空手の人に非ざれば能はず、通身影像なき人となりてこそ始て果然として得たり、所謂無得の得無作の作といふのである。永嘉大師は、取ることを得ず捨ることを得ず不可得の中只麽に得たりと申されてある、黃檗の三十棒も德山臨濟の一喝も皆な一切を放下して空手ならしめんとの接得である、吾人亦宜しく放下著にし去らんことを要す。

第四十一章

後同安大師。參前同安曰。古人曰世人愛處我不愛未審如何是和尚愛處。同安曰既得恁麼。師於言下大悟。

以上本則、以下御提唱例の如し。

師諱は觀志、其の行狀委く錄せず。先同安に參じて得處深し。先同安將さに示寂せんとす。上堂に曰く、多子塔前宗子秀づ。五老峯前事若何と。是の如く三び擧するに未だ對ふる者あらず。末後に師出でゝ曰く。夜明簾外排班立萬里歌謠道太平。同安曰く須らく是れ驢漢にして始めて得べし。爾しより同安に住す後同安と號す。

禪師諱は觀志其の生地及び經歷等の行狀は傳燈錄五燈會元等の禪史に委しく錄せず、先同安たる道丕禪師に參じて精進辨道せられ祖門の玄旨を研鑽して得處最も深し、師資の證契即通を得られたのが本則の公案である。先同安が將に示寂せんとするに當り、上堂して曰く、多子塔前宗子秀づ、五老峯前の事若何んと多子塔前は迦葉尊者が始て釋尊を禮せられた處、一見の下に以心傳心せられ、迦葉尊者は正宗單傳の法子となりて八萬の大衆中最も秀でたる聖者であつた、又五老峯は達磨大師面壁の靈地である、乃ち五老峯中の嵩山に少林寺は建立せられてあつた、二祖神光は五老峯前に臂を斷ちて法を求め、遂に不可得安心の處に於て達磨の髓を傳へられた、此の多子塔及び五老峰に於ける密傳密付の正法眼藏こそ禪門の一大事である。その一大事とは畢竟如何なるものぞとの垂問である、恰も釋尊の拈花と同一なる問題の公開である。是の如く三たび擧唱するに未だ之に應じて對ふる者あらず、三度目の末後に禪師は衆を出でゝ曰く、夜明簾外排班して立つ萬里歌謠して太平を道ふと、夜明簾とは皇帝の玉座の前の御簾である、水晶簾の如く夜中も猶ほ明徹して輝くものと見える、その御簾の前に文武百官が各々其の班位に排列して起立し、最も莊嚴なる朝見の大禮を行ふ樣子である、皇帝の御姿は見えぬが其の威德は殿の內外に輝き渉つて併び居る官僚は規律整然箇々皇帝の聖德を頌して其の大化に服せざるは無い、玉簾深く垂れて顏を露はさざるは廓然無聖不識の端的である。心王の威德中

外に横溢し眞理の光明法界に照耀す、故に萬里歌謠して普天の下率土の賓皆な盡く君が代を謠ふて太平を稱道す、佛祖の正法付囑は世尊の三昧迦葉知らず達磨の三昧慧可知らずであるが、その間に證契即通の儀行はるれば、正法の光輝は遍法界に宣揚し羣生一として其の恩に浴せざるは無い、所謂有情非情同時成道である。斯く答へられた時、先同安は之を證明して曰く、須らく是れ驢漢にして始めて得べし、驢漢とは驢馬の様な人間といふのでボンヤリ者といふ位の辭、以心傳心の消息はボンヤリ者ならでは得られまいといふ意である、愚の如く魯の如く只だ能く相續し去つてこそ主中の主と爲るに堪えたり、爾しより同安に住して師席を繼承せられたので後同安と號す。

それ多子塔前宗子秀づと云は昔し釋迦牟尼佛、摩訶迦葉に相見せしこと多子塔前なり。一度び相見せしに衣法ともに傳附す。其の後十二頭陀を行じ後に半座に居す。涅槃會上は迦葉會にのぞまずと雖ども一衆を以て悉く迦葉に附囑す。即ち此意なり。宗子秀づといふ。今同安大師洞山の嫡孫として青原一家の家風此の處に逆流飜回す。示滅のきざみ、其の嫡子を顯はさんとして五老峯前事若何と。是の如く三たび擧するに衆悉く不會。故に衆皆な答へず。須彌突兀として衆山の頂に秀で日輪杲杲として羣象の前に照す。故に夜明簾外排班して立つ。實に物の比倫すべき無し。脫體無依なる故に直下第二人なし。故に萬里に纖埃を絕し、謀臣猛將、今何くにか在る。謠ひ、謠ふて皆な太平なり。奇衲子なり。參學此の田地に至りて始て得べし。

夫れ多子塔前宗子秀と云は昔し釋迦牟尼佛が初めて摩訶迦葉尊者に相見せしことが多子塔前にありて、一度び相見せしに肝膽相照して證契即通し、直下に衣も法もともに傳附し了られた。其の後尊者は十二頭陀の淨行を行じ、後釋尊の會座に列する每に佛勅に依て如來の半座に居す、釋尊御涅槃の會上には迦葉尊者は敎化遊行中にて其の會に臨まずと雖ども、釋尊は正法眼藏を迦葉に傳附する旨を宣言せられ、一會の大衆をもて悉く迦葉に附囑せられた、その正法眼藏とはすなはち此の佛心印なり、迦葉佛心印を稟受して如來の慧命を繼ぎ世界の光明幢となり玉ふ、是を宗子秀づといふ。今ま同安大師は洞山の嫡孫として青原一家の家風を繼承し、曹溪の波濤は此の同安の處に逆流し飜波回濤す、逆流飜回は波浪の奔騰する貌で活機輪を轉ずるをいふ、大師今や此の世を去らんとする示寂のきざみ、正

法附囑の其の嫡子を顯はさんとして、五老峰前事若何と公衆の前に試問を發せられた、是の如く三び擧唱するに、大衆悉く其の宗旨を會せず故に一衆皆な默して答へず、此の時の光景は恰も須彌山が突兀として衆山の頂に秀で、日輪が杲々と照り輝いて羣象の前に照すが如し、高ふして攀づべからず光り熾んにして仰ぎ觀ること難し。譬へば神聖なる皇帝の玉座の前なる夜明簾外に排班して立つが如く、大尊貴生實に物の比倫すべき無し、唯我獨尊の英姿は脱體無依なる故に直下第二人なし、何人も其の聖位を犯すことは出來ぬ。脱體とは傑出の貌、無依とは何物にも依らぬ獨立の風格である、此の時一天四海皆な皇化に服し萬里に微塵ばかりも妖氛は無い、乾坤淸明、皎として纖埃を絕して居る、謀臣猛將、今何くにかある、弓は袋に刀は鞘、軍議も戰略も一切用不着、億兆の臣民は甲も泰平を謠ひ乙も昇平を謠ふて皆な太平の化を樂しむ、是れ實に同安會上の光景にして同時に多子塔前及び五老峰前の風致である、此の光景裡に卓立してこそ奇衲子と稱することが出來る、祖門參學の士此の田地にいたりて始て其の人たることを得べし。

是の如く拔羣の操行、超邁の得處、先だちて其の風操を顯はす。故に曰く世人の愛處我れ愛せず未審如何なるか是れ和尙の愛處と。謂ゆる世人の愛處といふは、自を愛し他を愛す。此の愛漸漸に長ず。乃ち依報を愛し正報を愛す。此の愛愈よ深著し將ち來り、一重の鐵枷上に一重の鐵枷を添へて、乃ち佛を愛し祖を愛す、是の如く愛染愈よ、汚れ將て來る。終に衆生の業因連綿として斷ぜず。元來不自由の處より生じ不自由の處に向つて死し將ち去る。唯だ是れ此の愛に依れり。故に生佛男女有情非情、是の如くなる相著の愛なり。都て早く須らく拂却すべし。都て軌則なく一物なく、是れ何なるとも辨ぜず。都て不知不識なる、是れは是れ非相の愛處なり。即はち住まること勿れ。

觀志禪師には是の如く羣を拔きたる操行と衆に超え倫に邁ぎたる宗乘の得處ありしも、是れ決して一朝一夕の修練には非ず、乃ち此の時に先きだちて早くも先同安の輪下に於て其の風格志操を顯はす、本則の商量が則ちそれである。故に曰く世人の愛處は我れ愛せず未審如何なるか是れ和尙の愛處と、謂ゆる世の人の愛處といふは全く自我を中心として起つて居る、或は自を愛して利己に沒頭し、或は他を愛して偏せる愛着に溺る、此の愛情が漸漸に增長して益々貪愛の念を激成し、乃ち依報を愛し愛

を外界に求めて財產領土を貪ぼり、又正報を愛す愛を衆生の身分に求めて子孫を愛し情人を愛し、此の愛愈々深く執着し將ち來り、恰も一重の鐵枷の上に更に一重の鐵枷を添へて、乃ち佛を愛し祖を愛して止まる所を知らず、愛は人心自然の情致であるから愛必ずしも不是に非ず、但だ虛妄分別の念を抱き貪婪邪欲の情を有する時は、此の念却て恐るべき迷執罪惡の基となる、故に佛祖を愛するといふも猶ほ迷信妄信顚倒信に陷ゐることを免れぬ。是の如く貪愛染着の念が愈よ汚れ將て來るを以て、終には衆生罪惡の業の因種となり、是れが連綿として相續し未來際に渉りて斷ぜず遂に迷界の生死を招ぎ永く業障の繋縛を被むる、凡夫は惡業に依て生死するが故に元來不自由の處より生じ不自由の處に向ひて死し將ち去るのである、其の源は唯だ是れ此の愛に依れり、法華經には諸苦所因貪欲爲本とある、故に衆生界とか佛界とか男性女性有情非情千差萬別盡く惱煩苦患の因緣となる、是の如くなる假相執着の愛なるものは、皆な貪欲所生であるから、早く須らく拂却すべきものである。さればとて一切の愛念を斷除して枯木寒巖の如くになり父母の恩もなく夫婦の情もなく都て人倫としての軌則なく又眼中一物なく、自己を忘れ他己を忘れ、是れ何なるとも辨ぜず、すべて不知不識なるに至らば、恰も死人と一般全く無用の長物である、是れはこれ非相の愛處なり、所謂空見に捕はれたる法愛である、即ち此の法愛にも住まること勿れ、是れ有心無心を超過する中道妙圓の理想境である。

尙ほ有相執着は一度發心せば自ら體達することもありなん。若し非相の所見を執して無色界に墮在しなば、恨むらくは幾許の劫數を送りて、天壽つきん時、却て無間に落ちなん。謂ゆる是れ無心滅想なり。此の有相及び無相重ねて是れ世人の愛處なり。有相中にして己れを見他を見、無相中にして己を亡じ他を亡ず。悉く是れ邪なり。

此の一段は世人の愛處を說かれたり、普通の凡夫は有相に愛着し、外道は非相に執着す、尙ほ有相の執着は善知識の指導に遇ふて一度發心せば自ら眞理に體達して妄執を脫することもありなんが、若し非相の所見即ち外道の空見を執して、無色界に墮在しなば恨むらくは容易に解脫の緣に觸れることが出來ぬ。故に幾許の劫數を送りて後天の壽命盡きし時却りて墮落して無間地獄にも落ちなん、遂に永久安心の境致には非ず、無色界天は三界の中の最高位で但だ心識のみありて物質の障礙なきを以て無色と名く、此に空無邊處と識無邊處と無所有處と非想非々想處の四天がある、その壽量も空無邊處は二萬大劫、識無邊處は四萬大劫、無所有處は六萬大劫、非想非々想處は八萬大劫と稱して居る、縱しや其の壽量遠長なるも有漏の定力に依て得たる果報であるから、虛空に向て箭を射るが如く勢力盡

ぬれば箭還て落ち、結局生死流轉を免るゝことが出來ぬ。謂ゆる是れ無心滅想なり佛教の三昧に比すべきに非ず、況や我が禪門の王三昧とは雲泥の相違がある、無心滅想といふても定中に於て心想起らざるのみで斷惑證理の效果あるものでは無い、此の無心滅想に愛執せば全く死人と同然で神通妙用を發すること能はず、然れば此の有相の執着も及び無相の偏執も重ねて是れ世人の愛處なり即ち有漏界の執着である、有相中にして己れを見他を見て我見妄想を起すも、無相中にして己を亡じ他を亡じて空見に墮在するも、悉く是れ邪見の迷執なり。俱に佛法の正見では無い。

然れば諸禪德、初機後學、かたじけなく釋尊の兒孫、佛受用を受用す。豈に世人の愛處に同じふすべけんや。先づ須らく一切の是非善惡男女差別の妄見を解脫すべし。次に無爲無事無相寂滅の處に住まること勿れ。此の處に承當せんと思はゞ、他に向ひて求め、外に向ひて尋ぬること勿れ。當に此の身未だ受けず此の體未だ萠さゞりし以前に向ひて親しく眼を着くべし。必らず千差萬別毫髪も萠すことあるべからず。暗昏々、黑山鬼窟の如くなること勿れ。此の心本來妙明にして赫赫然として暗からず。此の心空豁として圓照す。此の中終に皮肉骨髓を帶び來ること一毫も無し。何に況んや六根六境迷悟染淨あらんや。

有相に執するも無相に執するも俱に邪執である、然れば諸禪德、初機の人後學の士、我等は辱じけなく釋尊の兒孫として佛衣を披し佛鉢を持し佛の受用し玉ひし物を受用す、豈に凡夫世人の愛處に同ふして妄見の群に墮すべけんや、先づ須らく參禪辨道して一切の是非善惡及び男女親疎等差別の妄見を解脫すべし、次には彼の無心滅想といへるが如き無爲無事無相寂滅の處に住まること勿れ、此の兩重の關を透破する處に承當せんと思はゞ、宜く同光返照して自己を究盡すべし、決して他に向ひて求め又は外に向ひて尋ぬること勿れ、當に此の身未だ受けず此の體未だ萠さゞりし父母未生以前に向ひて親く工夫の眼を着くべし、是れ實に參學の要訣である。黃龍死心禪師も、儞諸人參禪を要すや須らく是れ放下著すべし、箇の什麼をか放下せん、箇の四大五蘊を放下し無量劫來許多の業識を放下し、自己の脚跟下に向つて推窮して看よ、是れ甚麽の道理ぞと、推來推去せば忽然として心華發明十方刹を照すべしと示衆せられた。斯く參究し去る時は必ず千差萬別の諸法毫髪も萠すことあるべからず、さ

ればとて無心の地に坐着して暗昏昏眞くらがり、鐵圍山の間に在りて日月の光明に觸れることの出來ぬといふ黑山なる餓鬼の窠窟の如くなる枯木死灰の生活に墮すること勿れ、元來人々具有の此の本心佛性は本來靈妙明白にして蓋天蓋地の光輝を放ち赫々然として暗からず、雲晴れて後の光りと思ふなよ本より空に有明の月である。且つ此の本心は虛空の豁如として一切障礙なきが如く圓かに十方の世界を照破す、無始以來眞空平等にして對待なきを以て此の中終に皮肉骨髓を帶び來ること一毫もなし、何に況んや六根六境迷悟染淨の別あらんや、太祖大師は信心銘の圓同大虛無欠無餘を拈提して、虛なるが故に內外なし大なるが故に際涯なし同なるが故に差別なし圓なるが故に始終なしと開示せられた、現象界の相を執することを息めよ、正眼に看來れば、現象即眞空平等である、此の玄旨に通ぜざれば未だ以て祖師道を語るに足らぬ。

佛、汝が爲に說くことなく、自から師の爲に參ずるなし。唯だ聲色の分れ來るなきのみに非ず。即ち耳目の具し來るなし。然れども心月輝きて圓明なり。眼華綻びて紋鮮かなり。子細に精到して、須らく恁麼に相應すべし。諸禪德如何んが這箇の道理を會することを得ん。便ち代て一語を着けん。早く須らく體前に眸を附くべし。

心月眼華光色好。　放開劫外有誰瓣

佛も汝等が爲に一法をも說くこと無し、四十九年一字不說である、佛に說法ありと執するは佛の不孝見である、又自ら法を求めんとして師の爲に參ずる無し、人々分上豊かに備はれるの法、他に就て求むべきものでは無い、若し師に就て求めんとせば他の鼻孔を借りて呼吸せんとするに似たり。元來法界平等萬法一如の大道を大觀すれば、唯だ聲色の分れ來るなきのみに非ず、即ち耳目等の六根の具し來るなし、六根六境共に空寂である、然れども空寂の名を聞て單空に墮在せまいぞ、此の空寂の眞體を證得し去らば、本心の明月は常に第一義天に耀きて圓明玲瓏なり、眼の華綻びて紋彩最も鮮かなり、普通には一翳眼に在れば空華亂墜すといふて、眼に翳りがあると虛空にチラ〳〵したものが見ゆる之を空華といふ、無中に有を認むる幻影に喩へたものであるが、今はそれを轉用して平等法界の中より靈機を轉じて種々の妙相を現出するの義となす、山高く水深く柳は綠花は紅、是れ皆な虛空裡の紋彩である。釋尊八萬の法藏を打開し、達磨五家の禪風を產出す、總に是れ空華の紋章である、故に八萬の法藏一乘に歸し五家の禪風一玄に收む、水鳥の行くも返るも跡絕えてされども道は忘れざりけりで

ある。承陽大師は空華の巻に於て、諸佛如來この空華を修行して衣座室を得るなり得道得果するなり拈華し瞬目する皆な翳眼空華の現成する公案なり、正法眼藏涅槃妙心今に正傳して斷絶せざるを翳眼空華といふなりと仰せられた。吾人は子細に精進し到達して須らく恁麼に相應すべきである、是れ則ち前同安の愛處である。此の愛處こそ佛祖の愛處である、此の愛處人々具有して缺くること無し、故に先同安は既に恁麼なることを得たり、人々皆な恁麼に相應し居るに非ずやと提撕せられた、觀志禪師は此の言下に於て大悟した、乃ち自受用三昧に安住せられた。諸禪德如何んが這箇の道理を會得することを得ん、試に一轉語を呈出し來れ、若し呈出し得ずんば便ち代て一語をつけん、早く須らく善惡凡聖等の體性が未だ現はれざる以前に向つて活眼を開き電眸を附けて此一大事を看破すべし次に例に依て七言二句の頌を示された。心月眼華光色好し、劫外に放開して誰れ有てか翫ばん、試に看よ、心月常に輝きて昧まさず眼華紋鮮かにして風流窮まり無し、その光明といひ色彩といひ無盡藏の莊嚴にして一點の煩惱なく微塵の繫縛なし實に是れ雨奇晴好、日々是れ好日である、併し看て以て有相と執すべからず無相と計すべからず、此の本地の風光は宜く生滅變遷の時劫を超越して劫外に解放し展開して勘破せねばならぬ、さあ這箇の風光は誰れあつて眞實翫賞することを得るぞや、纔かに分別に渉らば既に是れ沒交涉、聊かも妄執を抱くあらば果然として白雲萬里なるぞ。

第四十二章

第四十二祖。梁山和尚。參侍後同安。安問曰如何是衲衣下事。師無對。安曰學佛未到這箇田地最苦汝問我道。師問如何是衲衣下事。安曰密。師乃大悟。

以上本則、以下大師の提唱微を穿ち玄に徹す宜しく審細に參究せよ。

師は何れの許の人と云ふことを知らず。諱は緣觀。後の同安に參ず。執侍すること四歲。衣鉢侍者に充つ。同安有時上堂早參、衲法衣を掛くべし。時到て師、衲法衣を捧ぐ。同安、法衣を取る次で、問て曰く。如何なるか是れ衲衣下の事。師對ふる無し。乃至師乃ち大悟す。禮拜して感淚衣を濕す。安曰く汝既に大悟す又道ひ得るや。師曰く緣觀便ち道ひ得ん。安曰く如何なるか

是れ衲衣下の事。師曰く密。安示して曰く密有密有。

禪師も何れの許の人と云ふことを知らず、其の生地閲歷等を詳かにせず、諱は緣觀と稱す、後の同安觀志禪師に參ず、執侍すること四歲、情恰も父子の如し、五侍者の中の衣鉢侍者に充てられ專ら近事して孝養に勤められた。同安有る時上堂して早朝の參問を許された、此の時は衲法衣を掛くるのが例である、衲は補と訓じて綴り合せて裁製したる袈裟である、時到て禪師は衲法衣を捧げて同安に呈した、同安は其の法衣を受取る次でに問ふて曰く、如何なるか是れ衲衣下の事と、是れ實に緊要なる問題である。法衣は佛衣なりその佛衣を掛くる者は唯だ禮容を作つたり寒氣を防いだりするが爲めでは無い、佛衣に包まるゝ丈の深き意味を存せねばならぬ、搭袈裟の偈にも、大哉解脫服、無相福田衣、披奉如來敎、廣度諸衆生とある、徒らに俗情に走り妄念に縛せらる、是れ衲衣を汚瀆するものといはねばならぬ、依て此の事を試問せられたのである。禪師は對ふること無かりしも、同安の慈訓に依て頓に大事を了得して大悟せられた、乃ち禮拜して感涙衣を濕すに至る、同安曰く、汝は既に大悟す又衲衣下の事を道破することを得るや、禪師曰く、緣觀幸に和尚の提携に依り便ち道得すべし、同安曰く、如何なるか是れ衲衣下の事、禪師曰く、密、師資一枚である、併し決して口眞似では無い、只

此密の一語は、萬の法藏を打開して餘蘊は無い、衲衣下の事は十方の諸佛歷代の諸祖を包容して一袈裟に打成し了る、意以て測るべからず、言以て說くべからず。そこで同安示して曰く、密有密有、密は即ち妙にして有は即ち法なり、密有は妙法と云ふに同じ、妙なるが故に思量分別の能く識る所に非ず、法なるが故に佛々の菩提に合當し祖々の三昧を嫡嗣するのである、此の密有の宗旨は下文の祖訓に親參するが宜い。

師これより逗機多く密有の言あり。住して後に學人ありて衲衣下の事を問ふこと多し。有る時學人問ふ如何なるか是れ衲衣下の事。師曰く衆聖も顯はすこと莫し。又有る時學人問ふ家賊防ぎ難き時如何。師曰く識得すれば寃を爲さず。曰く識得して後如何。師曰く無生國裏に貶向せん。曰く是れ他の安身立命の處なること莫しや。師曰く死水に龍を藏さず。曰く如何なるか是れ活水の龍。師曰く波を興して浪を作さず。曰く忽然として湫を傾むけ嶽を倒すの時如何。師下座把住して曰く老僧が袈裟角を濕却せしむること勿れ。又有

る時問ふ。如何なるか是れ學人の自己。師曰く寰中は天子塞外は將軍。是の如く他の爲にせる悉く是れ密有を呈似す、

梁山は此の密の一語に大悟してより學人の根機を接するに多く密有の意味を以てする御言葉があつた。迌機の迌は射也と註し矢を以て人を射るが如く來機に應じて接得するをいふ、鼎州の梁山に住して後に學人ありて衲衣下の事を問ふこと多し、衲衣下の事といふことが禪林の一大問題になつたと見える、有る時學人問ふ、如何なるか是れ衲衣下の事、梁山曰く衆聖も顯はすこと莫し、三世の諸佛歷代の祖師乃ち衆多の賢聖が力を盡して說破するも之を言ひ顯はすこと能はず、是れ密傳密付の意である。又有る時學人問ふ、家賊防ぎ難き時如何、山中の賊を破ることは易く心中の賊を破ることは難し、外より來るの賊は防ぐことを得べし、家に在るの賊は如何共すること能はずと聞く、即今自己心中に蟠る煩惱無量の賊之を如何がすべきや、梁山曰く、識得すれば寃を爲さず、賊の賊たることを識れば防禦の術自から之れあらん、衆生顚倒して煩惱を以て愛處と爲す恰も賊を認めて子と爲すに似たり、但だ須らく自己を究盡すべし、學人曰く、識得せばその後は如何、梁山曰く、無生國といふ本來寂滅の裏に貶向せん貶向とは追ひ出といふの意、煩惱本來無自性不可得であつてその實體は無い、故に不可得の本體に還元せしめ再び頭を出さぬやうにするが宜い、學人曰く、その空寂の處こそ是れ他の安身立命の處ならずや、此の僧惜い哉空見に墮在し了れり、梁山曰く、死水に龍を藏さず、溜池の樣な死水の中には龍は居らぬ、空見の中に佛法の生命は無いぞ、學人曰く、然らば如何なるか是れ活水の龍、活水とは何ぞ龍とは何物ぞ、梁山曰く、波を興して浪を作さず、活波瀾を興して居るが而も常に湛寂にして波平かなり是れ色即是空の妙處である。此の僧多少の伎倆あり更に一問を進めて曰く、忽然として湫水を傾け山嶽を倒し大海嘯の如き大活動を起す時如何、乃ち佛祖の頂顬をも一超し天地法界をも粉碎するの大機用を現ぜば如何、是れは餘りに見知に誇つて脚跟下の行履を顧みぬ誇大妄想の兆が見ゆるので、梁山は直ちに座を下つて彼の僧の胸藏を把住まいて曰く、そんなに大海嘯を起して老僧が袈裟角まで濕却してはならぬぞ、即ち佛法の神聖を侵すまいぞと誡められた。又有る時問ふ、如何なるか是れ學人の自己、梁山曰く、寰中は天子の直轄で塞外は將軍の所管である、寰中は畿内のこと塞外は諸侯の領土である、是れ法爾差別の當相、火は熱し風は動搖、水は濕ひ地は堅固、法々位に住して世間の相常住なり汝は汝、我は我、自己の靈光是の如く明歷々たること知るべし、是の如く他の爲に應機の說法をせる悉く是れ密有の宗旨を呈似するものである、似は示と同意。

適來の因縁に曰く。學佛未だ這箇の田地に到らざる最も苦なりと。實なる哉此の言、縱ひ定坐牀を破り、精進疲を忘れ　高行梵行の人なりとも、若し未だ這箇の田地に到らざれば、尚ほ三界牢獄出で難し。四辯を具し八音を具して巧説霧の如く起り、口業海の如く飜へり、説法天地を驚して、華を雨らし石を動すとも、若し未だ這の田地に到らずんば閻羅老子言多きことを恐れず。設ひ日久しく月深く修行して、念盡き情鎭まりて、形枯木の如く心死灰の如くにして、一切時に於て境に逢ても心起らず、事に觸るゝとも念亂れず、遂に坐しながら脱し、立ながら死し、生死に於て自在自由を得るに似たりとも、尚ほ未だ這の田地に到らざれば佛祖屋裏用不著なり。故に古人曰く先達悉く此の事を以て一大事とすと。

此の一段は學佛未だ這箇の田地に到らずんば最も苦なりといふ同安の誡告を敷衍せられたのである。適來の因縁に曰く學佛未だ這箇の田地に到らざる最も苦なりと、誠に眞實なる哉此の言、這箇の田地とは衲衣下の事を究辨し佛心を證得したることである。縱ひ禪定に勉勵して坐禪の牀を破る程に修行し、日夜精進して猶ほ疲を忘れ、高潔なる行持、清淨なる梵行を保ち得るの人なりとも、若し未だ這箇の田地に到らざれば、尚ほ三界生死の牢獄は出で難し、縱ひ佛の如く四辯の德を具し八音の妙を具して善巧説法霧の如くに起り口業の演説は大海の波浪の如く順逆縱橫に飜へり、その説法の威力は須菩提尊者の如く天地を驚して華を雨らし、又姚秦の道生法師の如く頑石を動ずるの奇特ありとも、若し未だ這の田地に到らずんば遂に墮落することを免れず、地獄の主宰者たる閻羅老子は言説多辯なることを怕れず、閻摩羅王は善惡因果の原則に依て罪惡の衆生を罰せられる、因果の大原則は口頭辯論を以て之を動かすことは出來ぬ。四辯とは義辯法辯詞辯樂説辯の四で如來説法の靈德、八音とは極好、柔軟等の八相で如來音聲の妙德である。設ひ日久しく月深く幾年月の間修行して、一切の妄念既に盡き所有凡情亦た鎭まりて、其の形枯木の如く人世を解脱し、其の心死灰の如く煩惱を遠離して、一切時に於て順逆の境に逢ふても微塵も心起らず、諸般の事緣に觸るゝとも一念も亂れず、生死岸頭に自在の安心を得て、或は曩祖の如く坐しながら脱して圓寂に歸し或は三祖大師の如く立ながら死し、生死に於て自在自由を得るに似たりとも、尚ほ未だ這の田地に到らざれば佛祖屋裏に於て用不着なり、必要の人物とは言はれぬ。故に古人曰く先輩の達人悉く此の事を究辨するを以て學道の一大事

とすと、坐脱立亡の如きは聲聞乘の人も猶ほ之を能くす、信仰堅固の士女亦之を能くす、然れども見性悟道に至つては未だし、是れ禪門肝要の法門なり。

是を以て曩祖洞山和尚僧に問ふ。世間何物か最も苦なる。曰く地獄最も苦なり。山曰く然らず、此の衣線下に在りて大事を明めざる是を最苦と名く。此の門人雲居角立す。乃ちこの因緣を擧して曰く。先師道く地獄未だ是れ苦ならず。此の衣線下に向て大事を明めざる却て是れ最も苦なりと。汝等乃至更に些子の精彩を著けば便ち是ならん。上座平生の行脚に屈せず。叢林に辜負せざれ。古人曰く此の事を保任することを得んと欲せば、須らく高高たる山頂に立ち、深深たる海底に行て、方に些子の氣息あるべしと。汝若し大事未だ辨ぜずんば且つ須らく玄途を履踐すべし。

以下は梁山禪師の機緣に據りて佛弟子たる者の參學に對する徹悃の警訓である。參禪學道は唯だ箇の事を究辨せんが爲めである、是を以て曩祖洞山和尚因に僧に問ふ、世間何物か最も苦なるや、僧曰く地獄こそ最も苦なり、洞山曰く、然らず、此の佛衣たる袈裟を纏ふ衣線の下に在りて大事を明らめざるこそ是れ最も苦痛と名く、地獄に在りと雖も壽盡れば再び人界に生を稟ることもあらん、幸に佛法中の人となることを得て却て佛法を知らざらん、此の人こそ盡未來際解脱の期あるべからず、洞山の門人にして嫡嗣たる雲居は麒麟の一角の如く禪界に獨立す、乃ち洞山の因緣を擧して曰く、先師洞山道く、地獄未だ是れ苦ならず此の衣線下に向て大事を明らめざる却て是れ最も苦なりと仰せられた。汝等は今雲居の會に在りて參學す修行未だ十成ならざるも更に些子少々計りは修禪の功を著はす、精彩とは精進文彩の意、乃ち精進の力に依て修行地に色彩の具はりしこと俗に色が付いたといふに同じ、是れ便ち是なることである。上座とは諸大衆といふが如し、汝等は一層奮勵して平生の行脚參禪に退屈の念を起さず叢林の風規に辜負かず益々辨道するが宜い、古人の曰く、是れは藥山禪師の垂示であろう、此の參學の大事を保任して完全に證得することを得んと欲せば、須らく高々たる一番高い山の絶頂に立ち、深々たる最も深い海のどん底に行て、方に些子少し計り氣息が有て活氣を得ることであらう、汝若し此の一大事が未だ成辨ぜずんば且つ須らく幽玄微妙の途即ち從前の學問智解の及ばざる禪門獨得の行路を履踐すべしと垂示せられてある。

然のみならず。釋迦牟尼佛も亦五佛の開章に、諸佛世尊は唯だ一大事因縁を以ての故に世に出現すと。謂ゆる佛智見を開示悟入せしむるなり。方に此の一段の大事因縁を明らむるを大事とす。徒に佛弟子に似たることをば喜ばず。若し這箇の事を明らめずんば、畢竟じて在家の俗人と何の異なることあらん。故如何となれば眼に色を見ることも異ならず。耳に聲を聞くことも變らず。外に境縁に對するのみに非ず。內に縁慮も忘ずることを得ず。唯だ是れ形の代るのみなり。卒に別なし。畢竟じて一息斷じ兩眼閉る時、汝が精魂徒に物に隨ひて轉ぜられて三界に流注し、僅に人中に生じ、天上に生ずること品あるに似たるとも、車の廻り廻りて限りなきに似たり。

發心正しからざれば萬行虛しく施す、道人と否とは發心の如何に依りて定まる、必ずしも髮の有無や衣の緇白を以て論ずべきでは無い、既に佛衣に包まれたる出家人は、打成一片佛心に承當して自己を究盡し、未來際を期して濟世度生の大任務に當るべきである。徒らに佛飯を費して、佛袈裟を汚瀆し去らんその罪實に重大なり、生を人間に稟けて三惡道の苦難を招ぐ其の不幸幾許ぞ、更に佛弟子と爲りて無間獄の禍因を殖ゆること、實に最大の悲慘事である、先聖古賢の嚴訓は、古今同一轍である。獨り洞山雲居が然あるのみならず、釋迦牟尼佛も亦た五佛の開章たる法華經方便品に於て、諸佛世尊は唯だ一大事因縁を以ての故に世に出現すと宣ふてある。五佛とは十方佛と過去佛と未來佛と現在佛と釋迦牟尼佛とである、五佛同道開示の法門であるから五佛開章といふ、開示悟入の四字も、天台宗などでは非常に込み入つた解釋もあるが今は之を略して置く、要するに證入の意と見て置くが宜い、一切諸佛出世の本懷はいはゆる佛智見を開示悟入せしむるの外は無い、まさに此の一段の大事因縁を明らむるを大事とす、徒に姿形のみが、佛弟子に似たることをば喜ばず、縱ひ剃髮染衣すとも、若し這箇の大事を明めずんば、畢竟じて在家の俗人と何の異なることかあらん、故如何となれば、眼に色を見ることも世人に異ならず、耳に聲を聞くことも俗人に變らず、外に六境の諸縁に對して世情に關係するのみに非ず、內には諸縁を追ふ所の情慮妄想も亦た忘ずることを得ず、唯だ是れ形の代り異なるのみであるから、其の境界に於て卒に別なし、唯だ別なきのみならず在家人は皆な夫々の業務に從事して衣食の資を作る、僧侶は安坐して妄りに他の信施を受く、其の罪寧ろ大なりと謂ふべし、故に畢竟じて一つの息忽ち斷じ兩つの眼閉る時、乃ち死に臨む時、汝が精魂徒らに物に隨ひて業に

轉ぜられて三界生死の巷に流注し、僅かに人間界の中に生じ又は天上界に生ずることもあつて其の果報の品異なるあるに似たるとも、皆な煩惱海中の頭出頭沒であるから、恰も車の廻り、廻りて限り無きに似たり、苦樂昇沈一出一沒して無際限に輪廻するに過ぎぬ。

本より人をして、在家を離れ塵勞を出さしむる心何事にか有る。唯だ是れ佛智見に達せしめんが爲めなり。煩はしく叢林を設け四衆を集むる唯だ此の事を開明せしめんが爲なり。故に僧堂を名けて選佛場といふ。長老を呼で唱導の師とす。妄りに衆を集め喧しくせんとするに非ず。唯だ人をして悉く自己を開明せしめんが爲なり。故に設ひ出家の形と爲りて、なまじゐに叢林に交はるといふとも、若し此の事を明らめずんば、徒に勞して功なきのみなり。何に況んや、末代惡世の初機後學、設ひ身儀心操先佛の方規の如く學ばんとすとも、天性迂曲にして學得すること能はず。近來の僧手を定め足を下すこと穩かならず。大小威儀內外心術悉く學ばんとせず。故に僧儀なきが如し。縱ひ身儀心操昔しの如くなりとも、若し心地を明らめずんば、人天の勝果にて有漏の因緣、何に況んや、心地明らめず身儀調はず、徒に信施を受け來る、皆な是れ墮獄の類なり。

出家人に對する重々の嚴訓である、本より人をして在家を離れ世俗の塵勞を出さしむる其の心は何事にかあるや、四民の外に於て遊民を作るが爲めに非ず、唯だ是れ佛智見に達せしめんが爲なり、佛智見を開發して民衆敎化の先達となり、以て四恩に報答し三有を拔濟するこそ、出家人の大目的なれ。それが爲めに煩はしく叢林を設けて修道の安居處となし、比丘比丘尼優婆塞優婆夷の四衆を集めて說法宣敎す、唯々此の一大事たる佛智見を開明せしめんが爲めなり、故に坐禪辨道する僧堂のことを名けて選佛場といふ、此の中より佛智見開發者を選び出すの謂である。又一衆を指導する長老を呼で唱導の師とす、宗旨を提唱して佛地に引導するの謂である、妄りに大勢の衆僧を集め、喧しくがや〳〵させんとするにあらず、唯だ人をして悉く自己の佛知見を開明せしめんが爲なり、故に設ひ出家の形となりて、なまじゐに利口らしく叢林に交はるといふとも、若し此の一大事を明らめずんば徒に勞しても功のなきことゝなる。なまじゐは生强の義にて心に欲せぬを自ら强ひて爲すの意なるも、今は俗に

生意氣といふ語と見るが宜い、何に況んや末代濁惡の世に於ける初機後學即ち初心の者や晩學の士では、設ひ其の身の威儀や其の心の操守をば、先佛の御示しになつた方法規式の如く學ばんとすとも、天性迂愚で且つ邪曲にして、學得することが出來ぬ者が多い。然るに近來の僧衆の如きは手を定め足を下すこと穩かならず、手足に落付が無く只だ浮々とのみして居つて、大小の威儀、內佛祖に對し外檀越に對する心術の心懸等も悉く之を學ばんとする量見も無い樣である、故に僧侶であり乍ら僧儀なきが如し、誠に淺ましきことならずや、設ひ身儀心操が昔しの祖師方の如くなりとも、若し心地を明らめずんば決して佛祖の兒孫とは稱せられぬ、其の得る所のものは僅かに人間天上の勝果を得る丈の事にて全く凡情を基礎として造り擧げた有漏の因緣である。何に況んや心地も明らめず身相威儀さへも調はず徒らに信施を受けて粥飯を費やし來る、罪の上に罪を重ぬる者であるから皆な是れ地獄に墮落し去る流類なり。梵網戒經には、佛子たる者は必ず十大願を發せよと敎へられ、その十大願の中には、寧ろ熱鐵の羅網を以て千重周匝して身に纒ふとも、終に破戒の身を以て信心檀越の一切の衣服を受けず、寧ろ此の口を以て熱鐵丸及び大流猛火を呑むこと百千劫を經るとも、終に破戒の口を以て信心檀越の百味の飮食を食せずといふことあり、佛在世に於ける佛弟子の心行夫れ是の如く嚴密なり、我等佛祖の兒孫として常に深く自ら返照せざるべけんや。

然れども先德曰く。世下り人疎にして、設ひ身儀心操古聖の如くなくとも、精細綿密にして一大事を明らめ得ば恐らくは三世諸佛と差ふこと無からん。六代祖宗歷代古聖悉く兄弟ならん。本より三界の出づべきなし。豈に六道の廻るべきあらんやと。然れば精細に功夫し綿密に參學して、衲衣下の事を明らむべし。此の一大事因緣、正像末の時隔て無く、梵漢和國異ならず。故に末法惡世と悲しむこと勿れ。遠方邊地の人と嫌ふこと勿れ。此の事本より千佛競ひ來りて與へんとすといふとも、佛力も終に及び難からん。然れば子に授る道に非ず、父に受る道に非ず、但だ自修自悟自身自得すべし。無量塵劫の修行なりとも自證自悟せんことは一刹那の間、一度憤發の勢を爲さば盡乾坤一毫も得來らず。一度此の處に到りなば曠大劫來昧からず。豈諸佛の授る在る有らんや。

然れども此の事は人々具足箇々圓成の法なるを以て自家の法藏外より來らず、固より時を擇び機を擇

ぶべきに非ず、故に先徳曰く、世運も下り人心も疎慢にして綿密を缺き、設ひ身儀心操古への聖賢の如くには無くとも功夫辨道に熱中し其の修行力精細綿密にして此の一大事を明らめ得ば恐らくは三世諸佛と差ふこと無からん、達磨以來六代の祖宗や歴代の古聖人とも互に手を執り膝を交へて悉く兄弟の如くならん、這裏に到つては即處道場であるから元より三界の出づべきなし豈に六道の廻るべきあらんや悟る時は十方空にして大道元來當處を離れず常に湛然である。釋尊は、衆生劫盡て大火に燒ると見る時、我が此の土は安穩にして天人常に充滿すと仰せられた。然れば汝等は精密審細に功夫し、綿密周到に參學して衲衣下の一大事を明らむべし、此の一大事因緣は十世古今を一貫したる法門なるを以て正法千年像法千年末法萬年などゝいふ時間の隔ても無く、梵の印度漢の支那和の日本といふ國境の異なりも無い、故に今は末法惡世であるからとて之を悲しむこと勿れ、又吾々は釋尊出生の地と時とを隔てたる遠方邊地の人であるなどと嫌ふこと勿れ、此の事は本より衆生本具の靈性にして他より授受すべきものに非ず、故に千佛が競び來りて之を與へんと思召すといふとも佛の御力も是れ計りは終に及び難からん、然れば世の財產の如く子に授る道にもあらず、父に就て受る道にもあらず、但だ自ら修行し自ら悟得し自身自からが之を得べきものである。無量塵點劫の長きを經たる修行なりとも、自ら證得し自ら大悟せんことは一刹那の間である、故に三祇百刧とか五刧思惟とかいふ名を聞いて志を挫いてはならぬ、一度び自己を放下して大道を欣求せんとする大憤發の勢を爲さば、盡乾坤一毫末も得來たらず、法界洞然として唯だ一大光明となり一物も障礙する底のものは無い。本來無一物何れの處にか塵埃を惹かん、一度び此の處に到りなば曠大劫と無始の昔しより以來本來成佛して更に昧からず、是心是佛、是心是法である、豈に別に諸佛の授る所の法の存して在り有らんや。

故に子細に此のところに到らんと思はば、先づ須らく萬事を捨つべし。尚ほ佛祖の境界をも求むること勿れ。何に況んや自他憎愛あらんや。唯だ毫髮の知解を起さずして、即ち直下を見よ。必ず皮肉なき物あり。體虛空の如くにして別色なし。恰かも清水の徹底明らかなるが如し。廓然明白にして、唯だ了了として知るのみなり。且く道へ這箇の道理、如何んが露はし得んや。

水淸徹底深沈處。不待琢磨自瑩明。

故に子細に此の自修自悟底の處に到らんと思はゞ、先づ須らく諸緣萬事を捨てゝ王三昧に坐定することが肝要である、尚ほ佛祖の境界をも求むることを止めよ。作佛をも圖ること勿れといふが參禪の妙

術である。何に況んや自を執し他に着して憎愛の念に捕はるゝことあらんや、但だ毫髮の知見をも解量をも起さずして即ち直下に回光返照して自己を究盡して見よ、必ず皮肉も無く體相も無き物があるであらう。是れ則ち無位の眞人にして其の體は虚空の如くにして凡聖迷悟の色彩も無く是非善惡の別色も無し、恰も清水の徹底透明にして表裏無きが如く廓然明白である、廓はほがらかにして障りなき貌遍宇宙の法性水は平等一色にして内外玲瓏である、此の法性水は明白にして曾て藏さず、苟も凡情を解脱する底の者ならば當處に了々として自知自得するものである。且く道へ這箇の道理如何んが言詮に露はし得んやとて、例に依て七言二句の頌を示された。水清ふして徹底深沈たる處、琢磨を待たず自ら瑩明、這箇の法性水は無始以來毫末も混濁の氣を帶びず清淨潔白である、道本圓通爭でか修證を假らんといふは此の意を示されたもの、此の法性水は宇宙に充滿して、玲瓏無礙で底に徹して皎潔而も極めて深沈と奧深いから、どこまで深いやら廣いやら其の際限を窮むることが出來ぬ、無始無終不生不滅である。是の如きは決して人間が珠玉を琢磨するが如く人工に依て清淨にしたものでは無く、本來自然に瑩明なのである、瑩もあきらかと訓じ透き徹つて潔白なるをいふ、圓覺經に、始て知る衆生本來成佛、生死涅槃猶ほ昨夢の如しとあるも此の意である。太祖大師は、後醍醐天皇の勅問に答へて、衆生本より以來佛性を見ずと雖ども日に用て知らず、釋迦老子成道の端的活眼を開て之を觀れば則ち草木國土悉皆成佛なり、六祖曰く悟れば則ち衆生是れ佛、迷へば則ち佛是れ衆生、生佛もと隔て無し、迷ふが故に衆生と爲り、悟るが故に佛と爲る、衆生若し迷なくんば佛と何ぞ別たん、故に四十九年の說法も迷の衆生を度して本有の佛性を見せしむるのみと奏對せられた。此の一大事能々實參實究して法性水中に優遊自適せねば本分の人とは稱し難し、殊に此の章に於ける太祖大師の御垂示は、佛祖の兒孫たる僧衆に對する頂門の針砭にして言々句々涙は實に痛腸より出づるの感あり、吾人は宜しく朝參暮請してその訓誡に服膺せねばならぬ。

第四十三章

第四十三祖。大陽明安大師。因問梁山和尚。如何是無相道場。山指觀音像曰。這箇是吳處士畫。師擬進語。山急索曰這箇是有相底。那箇是無相底。師於言下有省。

以上本則、以下太祖の御提唱例の如し。

師諱は警玄。傳燈等に載する處、時の皇帝の御名に依て警延と云ふ。然れども實の諱は警玄なり。江夏、張氏の子。智通禪師に依て出家す。十九にして大僧と爲り、圓覺了義を聞く。講席に能く及ぶ者なし。遂に遊方して初め梁山に到りて問ふ。如何なるか是れ無相の道場。乃至師遂に省あり。便ち禮拜し本位に倚て立つ。山曰く何ぞ一句を道取せざる。師曰く道ふことは即ち辭せず恐くは紙筆に上らん。山笑て曰く此の語碑に上せ去ること在らん。師偈を獻じて曰く。我昔初機迷學道。萬水千山覓見知。明今辨古終難會。直說無心轉更疑。蒙師點出秦時境。照見父母未生時。如今學了何所得。夜放烏雞帶雪飛。山謂く洞山の宗倚るべしと。一時に聲價籍籍たり。山沒して塔を辭して大陽に至り堅禪師に謁す。堅席を讓て之に主たらしむ。それより洞山一宗盛に世に興る。人悉く風に走る。師神觀奇偉。威重あり。兒稚の時より日に祇だ一食し、自ら先德附授の重きを以て、足限を越えず。脇、席に至らず。年、八十二に至て猶ほ是の如し。遂に陞座して、衆を辭し終焉す。

太陽諱は警玄、傳燈錄等に載する處に依れば時の皇帝の御名に觸れるに依て警延と稱せられたが、然れども實の諱は是れ警玄である、江夏の張氏の子として誕生せられ、その親戚に當る智通禪師に依て出家し、十九歲にして具足戒を受けて大僧と爲り、圓覺了義經を聞く其の深義を研究するに於て講座

の中に能く太陽に及ぶ者なし、講師に向て經の玄旨を討論せしに、講師は大に嘆じて、是の兒齒少ふして識見此の如し我が學する所何ぞ之を益するに足らん、穢食を以て寶器に置くが如しと申せしとかや、遂に遊方の途に上り、最初に梁山禪師の處に到りて本則の問答があつて豁然大悟せられ、便ち禮拜して本位に倚て立たれた。梁山曰く、何ぞ一句を道取せざる、大陽曰く、道取することは即ち敢て辭退はせぬが、恐くは文章となりて紙筆に上り却て宗旨の尊嚴を傷つけるかと思はれる。潙山の嗣たる米胡和尙が僧をして仰山に今時の人還て悟を假るや否やと問はしめたるが、仰山は、悟は即ち無きにあらず第二頭に落ることを爭奈せんと答へた、今の答話も同一轍である。梁山笑て曰く、此の語碑に上せ去ること在らん、乃ち碑に刻して永久に傳ふるに堪えたりといふ證明の語である。大陽時に偈を獻じて曰く、我れ昔し初機即ち初發心の折學道の針路に迷ひまして、遠く萬水千山の間に明師を訪ふて自己の見知を開かんことを覓めました、今時の學說を明らめ古人の註釋を辯論しても終に宗乘の玄旨を會し難し、驀直に無心なるべしと說くも猶ほ轉た更に疑ふて安心を得ず、今幸に師の秦の時に寶鏡があつて此の鏡に向へば五臟六腑までも見えたといふが、恰もその鏡の如き內外透徹の御敎訓を點出するを蒙むり、始て父母未生以前の時に固有する本來の面目を照し見ることが出來ました、如今こそ學道の目的を了じたが然らば何んの得る所ぞといふに、深夜烏のやうな眞黑な雞を放ちたるに

彼の烏雞は眞白な雪を帶びて暗夜の中を自在自由に飛び廻つて居ります、烏雞とは凡聖迷悟の文彩を離れたる平等一實の妙體、雪を帶ぶとは現象差別の相、烏雞が雪を帶ぶるといふので事理不二體用一如の妙境界を形容せられたのである。梁山謂く洞山の宗風は汝に倚て永く隆ならんと、是れより一時に大陽の聲價即ち評判が籍籍と名高くなつた、籍々はかまびすしき意である。梁山が沒去せられてから塔を辭して大陽山に至りて山主堅禪師に謁せられた、堅禪師は其の德風を喜で席を讓つて之に主たらしむ、それより洞山一家の宗風盛んに世に興り、天下の禪人悉く風に走りて其の輪下に湊まる。大陽は神觀奇偉で體格風彩ともに世に珍らしく偉大にして堂々たるものであつた、自然と威嚴の重〻しきものあり、兒稚の時より日中に祇だ一食し、常に自ら先代諸德の佛法を附授せられしことの重大なるを思ひ自ら其の身を愼しみ、大陽山裡に端坐して足は限を越えて山を下らず、脇は席に至らずして常坐三昧に住し、年八十二歲に至て猶ほ是の如し、終に座に陞りて最後の法を說き大衆を辭し暇乞をして終焉遷化せられた。

實に夫れ參學尤も切要とすべきは、即ち是れ無相道場なり。形を帶びず名を受けず。故に言に關からずと雖も必ず果然として明らかなる所あり。謂ゆる

父母未生の時の形貌なり。故に此の田地を示さんとするに、呉處士が畫く所の觀音の像を指す。恰も鏡を示すが如し。謂ゆる眼あれども見ず、耳あれども聞かず、手あれども取らず、心あれども量らず、鼻あれども齅がず、舌あれども味ひず、足あれども蹈まず、六根悉く用なきが如く全體すべて閑家具なり。恰も木人の如く鐵漢の如し。此の時見色聞聲早く免かれ畢りぬ。此に進語せんとせしに、木橛に住まらざらしめんとして、急に索めて曰く。這箇は是れ有相底、那箇か是れ無相底と。此の不用底を以て無面目を知らしむ。明鏡を見て己れを知るが如し。昔し秦時に鏡ありき。彼の鏡に向へば、身中の五臟六腑八萬四千の毛孔、三百六十の骨頭、皆な悉く見るが如し。耳目あれども用ひざる所に身心を帶ぜざる所を看見す。有相の千山萬水悉く破れ來るのみに非ず、無心無分別の暗昏速かに破れ、天地とも分れず萬像都て崩さず。了然として圓具す。實に是れ洞上の一宗一時の聲價是の如くなるのみに非ず。累祖見得する皆以て是の如し。

此の一段は無相道場を提唱せられたり、實にそれ參禪學道の上に於て最も至切肝要とすべきは、即ち是れ無相道場なり。釋尊は菩提樹下に於て成道し玉ふ依て其の處を道場と稱す、然れども成道の場處は決して遠く印度の佛陀伽耶を尋ぬべきに非ず、人々返照して自己に承當すれば觸處皆な道場である。靈雲は桃花の下に成道し香嚴は竹林の畔に成道す、承陽大師は、三界を拈じて大悟す百草を拈じて大悟す四大を拈じて大悟す佛祖を拈じて大悟す公案を拈じて大悟す、皆な倶に大悟を拈來して更に大悟するなりその正當恁麽は而今なりと仰せられた。然れば盡十方世界悉く是れ道場であるに依て、國土、時劫を論ずべきに非ず、是を無相の道場といふ、故に形を帶びず名をも受けず、故に言に關からず言葉を以て說明し得べきことには非ずと雖も、必ず果然として明らかなる所あり、我れ從來汝に藏さず、實に偏界藏さず明歷々である明歷々とは申せども形を以て見るべき法に非ず、謂ゆる父母未生の時の形貌なり、形貌といふても無相の相である。故に梁山は此の田地を示さんとするに、暫く唐の呉處士といへる有名なる畫伯が畫くところの觀音の像を指し示された、當處に大道を究盡せしめんとの慈悲方便である。恰も鏡を懸けて形を示すが如し、畫は水墨丹青の所成であるから其の形貌は

明なる實體は無い、謂ゆる眼あれども見るに非ず、耳あれども聞かず、手あれども執らず、心あがる如くなれども量らず、鼻あれども齅がず、舌あれども味ひず、足あれども履まず、六根ありと雖も悉く用なきが如くその全體がすべて閑家具で、無駄な道具である。恰も木偶人の如く鐵製の漢の如し、吾人も亦大死一番して人境倶に無相三昧に安住するが宜い。此の時見色聞聲の緣は早く免かれ畢りて解脱地に到ることが出來る。梁山が觀音大士の畫槪を指されたるは實に意味深長である。然し大死一番するも猶ほ大活現成の機用が無ければ木橛即ち木の材の樣な生命の無いものとなるから、大陽がこゝに進語せんとせし時に、木橛に住まらざらしめんとして急に索めて、這箇は是れ有相底那箇か是れ無相底と逼られた。此の畫像にはまだ姿がある眞の無相底如何と問着せられた。元來畫像を指されたのがこの不用底の物を以て無面目の本來人を知らしめられたのである、明鏡を見て己れの姿を知るが如し、昔し秦の時代に不思議なる鏡ありき、彼の鏡に向へば身中の五臟も六腑も八萬四千の毛孔も三百六十段の骨頭も皆な悉く見えたといふ、丁度その鏡の如し、耳目はあれども有り乍ら用ひぬ、その用ひぬ處に於て身心を帶びざる所の無相の道場を看見するのである、併し此の無相は有相に對するに非ずして、有相無相を超越したる無相であるから、有相の千山萬水悉く破れて寂滅に歸し來るのみに非ず、無心無分別の境界、暗昏々として有無色空の文彩までも速かに破れ了る、此の時こそ天地とも分れず萬像も都て萠さず迷なく悟なく凡なく聖なし、而して是の如き不可思議體は一切衆生皆な了然として何の疑ふ所もなく圓かに具有して居る、此の圓具の妙性を七通八達し隨時隨處に無相の道場を打開するのが曹洞の宗風である、大陽既に此の宗風を傳受す實に是れ洞上の一宗一時に其の聲價を擧げられたのである、併し大陽ばかり是の如くなるのみに非ず、累代の祖師の見得する正法は皆な以て是の如し、佛面祖面古今一枚である。

この旨を會せしより後、大陽にして僧あり問て曰く。如何なるか是れ和尙の家風。師曰く滿瓶傾不出大地沒饑人と。實に是れ此の田地、傾くれども出さず。推せども闢かず。挑ぐれども起さず。觸るれども跡なし。故に耳目の至る處に非ず。語默動靜に伴ひ來れども、曾て動靜に礙えられず。此の事唯だ祖師獨り具足するのみに非ず。盡大地の人一箇も具せざる無し。故にいふ。饑たる人なしと。

大陽は此の玄旨を會得せしより後、堅禪師の請に應じて大陽山に住して大法輪を轉ぜられた、或る時

僧あり問ふて曰く、如何なるか是れ和尚の家風、大陽曰く、滿瓶傾け出さず大地に饑人なし、曹溪の法性水は淨瓶に滿ちて居る、啻に淨瓶のみならず天地四維に彌綸して居る、されど此の水瓶を傾けても一滴も外へは出ぬ。又此の水瓶は手を觸れても傾くることも動かすことも出來ぬ、是を釋尊も一字不說といひ達磨も不識といはれた、だが天地間此の法性水の惠みに潤はぬ者は無い、此の法性水に身心を養ひ法味に飽滿して一箇の饑人だも無い、是れ即ち有情非情同時成道の宗意である。故に太祖の御提唱に實に是れ此の田地は生滅去來の相を泯じて居るから、傾くれども出さず、推せども闔かず、挑げんとすれども起すこと能はず、觸るれども觸れたる跡なし、故に耳目の至る處にあらず、所謂不可思議の妙法である。吾人の語默動靜の際にも此の妙法は常に伴ひ來りて、暫くも離れざれども曾て動靜に礙えられず、決して色々に變化する物では無い、此の妙法とも法性水ともいふべき一事はただ傳法の祖師のみ獨り具足するのみに非ず、盡大地の人一箇も具足せざる無し、一切衆生悉有佛性である、故にいふ饑たる人なしと、豈に人のみに限らんや、日月の照臨も海波の出沒も花の開落雲の去來皆な法味に飽滿底の姿ならざるは無い。

然れば諸禪德幸に洞家の兒孫と爲りて、既に古佛の家風に遭へり。精細綿密に參到して父母未生、色空未起の時の自己に承當し、已に一毫ばかりも相狀なき所に到り、既に微塵ばかりも外物なき所を見得し、千生萬劫摸索すれども四大五蘊得來らず。十二時中一時も欠少なき所を明らめ得ば、正に是れ洞家の兒孫、青原の枝派ならん。且く如何が此の這箇の道理を通ずることを得ん。聞かんと要すや麼。

圓鑑高懸明映徹。丹雘盡レ美畫不レ成

然れば諸禪德よ、汝等は幸に洞山一家の兒孫と爲りて、既に古佛の家風に遭ひ奉ることを得たり、此の機會を逸せず精細綿密に參究し到達して、父母未生以前、色も空も未だ起らざる以前の時の、自己の本面目に承當して、已に一毫ばかりも相狀の認むべき無き所に到り、既に微塵ばかりも外物なき常住寂滅の所を見得して大安心を決定するが宜い、正當恁麽時は身心倶に脫落して、千生萬劫摸索すれども身となし心となすべき物なく、四大五蘊得來らず、所謂四大本空、五蘊有に非ず、而して盡十方世界都盧一枚の佛光明、十二時中一時も欠少することなき卽心是佛なることを明らめ得ば、正に是れ洞家の兒孫たるに恥ぢず、青原の枝葉を飾り、派流を輝かすものといふべし、且く如何が此の這

箇の道理を通ずることを得べき諸大德聞んと要すやとて例の頌を示され、圓鑑高く懸けて明かに映徹す、丹艧美を盡して畫けども成らず、七言二句を擧せられた。無相の道場は宗門の眼睛である、梁山は秦時の鏡の如き大圓鑑を高く懸けて佛祖密傳の法を示された、此の大圓鑑は人々具足の光明にして内外玲瓏、法界に照映し透徹して森羅萬象一として其の輝きに漏るゝものは無い。梁山は此の大圓鑑を直指せんが爲めに吳處士の筆になる觀音の像を以てせられた、此の像の有相無相の兩頭を離却したその眞實相を見破せねばならぬ、敢て必ずしも壁上にのみ眺むべからず、柳は染む觀音微妙の相松は吹く說法度生の聲、雲に聳ゆる山色、霞に開く花影にも、自ら慈眼視衆生福聚海無量の德相がある、その相好光明は丹艧美を盡して畫けども成らず、艧は飾り舟の事であるが今丹艧といふは丹青彩色の意である、天下の名畫伯が丹青の美を盡して畫き來るとも其の眞を寫し成すことは六かしい、一代藏經八萬の法門も猶ほ寫し盡すこと能はず、釋尊は我が法は妙にして思ひ難しと仰せられた、寒山も物の比倫に堪えたる無し、我をして如何が說かしめんといふに、參學の君子は直に須らく有相無相の分別を截斷して、烏雞雪を帶びて飛ぶといふ光景を瞥見せねばならぬ。信心銘の拈提には、耳に盈つる溪聲、眼に餘る青山、終日之に向へども語らず竟夜之に向へども答へず、世法佛法何に依て分たん、道情世情誰が爲にか語らんといふ御示しがある、是れが無相道場の的意である、能く此的意に承當し去らば、草木國土牆壁瓦礫皆な盡く、圓通無礙の妙道、普門示現の光明である。

第四十四章

第四十四祖、投子和尚參圓鑑。鑑令看外道問佛不問有言不問無言因緣。經三載。一日問曰汝記得話頭麼、試擧看。師擬對鑑掩其口。師了然開悟。

投子禪師の嗣承に就ては古來より議論紛起して衆說區々たるも要するに二說を出でず、一は大陽警玄禪師年既に老たるも未だ得法の嗣あらず、偶ま浮山の圓鑑來り參じて機宜投合したるを以て、特に直綴と皮履とを托し、他日其の人を得ば之を付與して我が大法を相續せしめよと囑せらる、圓鑑後に投子を接して大陽の法嗣たらしめたり、故に投子は禪に圓鑑に參じて開悟し、而して大陽の嫡嗣として洞上の家風を相承すといふのである。一は佛祖の大法は面授面稟である、豈に依托嗣法の事あるべけんや、大陽の遷化せらるゝ時投子は齢既に二十三歲に達して居る、此の本則の如きは圓鑑と投子との機緣に非ずして、大陽と投子との面授面なり。故に永平廣錄には此の本則の圓鑑を大陽と記されてある、思ふに投子既に面たり大陽に參じて大法を付囑せられたるも、大陽は時世の難を防がんが爲めに衣履を圓鑑に託せられ、投子は大陽の寂後九年を經て圓鑑より此の衣履を受けられたるは、大陽面授の深恩に報ぜられたものであらう。續傳灯錄には大陽の法嗣は投子を併せて二十五人あることを錄せり、既に幾多の法嗣ありとせば、何を苦しんで依托嗣法の如き輕擧を爲し玉ふべきや、是れ畢竟衣履代授の事ありしより誤り傳へたる妄譚なりといふのである。面山和尚は此の嗣法の問題を一大事となして元文三年に洞上金剛杵一巻を著はし、大陽投子面授の消息を精密に評論して一大斷案を下して居る。以上二說の內、太祖大師け前說に依りて評唱せられてあるが、大師は必ずしも歷史に就て考證斷案せらるゝの目的に出で玉ふに非ずして、宗乘の上から投子、證契の密意を提唱せられたのである、故に大師は且らく五燈會元や續傳灯錄や禪林僧寶傳等に記述せる依托嗣法の事跡を假定して、大陽と投子との間に證契即通するものあることを縱橫に垂訓せられた、苟も本錄を參究する者は、歷史上の事蹟に重きを置かず、直ちに師資契合の上に感應道交難思議の法門あることを體得せねばならぬ。若し諸傳を考索して判斷するに於ては、面山和尚の說の如く、投子禪師は出家の後華嚴經を研鑽して其の蘊奧を究め、遂に大疑團を生じて訣を禪門に求めんとし、直ちに大陽に參じて其の鉗鎚を蒙むり、十八歲にして契悟して面命を承け自後參隨すること五年、大陽示寂の後諸方の叢林を訪ひ終に浮山圓鑑に侍すること六年、三十一歲の時衣履を圓鑑に受く、乃ち辭して叢林に韜昧すること十年熙寧六年四

十二歳にして白雲の海會禪院に住し元豐三年四十九歳にして投子山に移り、同六年五月四日五十二歳にして遷化せられしとするを、最も的確なるものと思ふ。本則に對する太祖大師の記述と提唱とは前來言ふが如く、決して史跡上の問題たるに重きを置かず、全く證悟感應の轉法輪として參究すべきものである、依て玆に豫め此の事を説明し、以下は唯だ大師の垂示のまゝに講述することゝなすべし。

師諱は義青。青社李氏の子なり。七齡にして穎異、妙相寺に往て出家す。經を試みて十五にして得度す。百法論を習ふ。未だ幾ならず、歎じて曰く。三祇塗遠し自ら困ずとも何の益かあらん。乃ち洛に入て華嚴を聽く。義、珠を貫くが如し。嘗て諸林菩薩の偈を讀み、即心自性といふに至て、猛省して曰く。法は文字を離る寧ろ講ず可けんや。即ち棄てゝ宗席に游ぶ。時に圓鑑禪師、會聖巖に居す。一夕、青色の鷹を畜ふと夢み、吉徵と爲す。旦に屆て師來る。鑑禮を以て之を延く。外道問佛の話を看せしむ。乃至、師了然として開悟し遂に禮拜す。鑑曰く汝玄機を妙悟するや。師曰く設ひ有りとも也た須く吐却すへし。時に資侍者傍に在て曰く。青華嚴今日病に汗を得るが如し。師回顧して曰く狗口を合取せよ。若し更に忉忉せば我れ即ち嘔せん。此れより復た三年を經て、鑑、時に洞下の宗旨を出して之を示す。悉く皆な妙契す。附するに大陽の頂相、皮履布直綴を以てし囑して曰く、吾に代て其の宗風を續ぎ、久しく此に滯ること無れ。善く宜く護持すべし。遂に偈を書して送て曰く。「須彌立大虛。日月輔而轉。群峰漸倚他。白雲方改變。少林風起叢。曹溪洞簾卷。金鳳宿龍巢。宸苔豈車碾」

投子禪師諱は義青、青社の李氏の子として趙宋の明道元年に生れ、七齡にして穎異、穎は錐鋩にて靈利なるをいふ異は智能の常人に殊なること、妙相寺に往て出家す、經典を習ふことを試みて十五歳にして得度す、始め百法論を習ふて性相の學を修められしが、未だ幾くならず、大に歎じて曰く、此の學に依れば成佛を期することは三大阿僧祇劫を經ざるべからず其の塗甚だ遠し如何に自ら困苦して修行すとも何の益かあらん、所詮此の生に於て其の一端をも得ること難し、故に更に進んで頓機の法門

に入らざるべからずと念じ、乃ち洛陽に入て華嚴經を聽講せられしに、華嚴經は釋尊最初の轉法輪にして十玄門六相圓融の敎義を以て法界緣起、事々無礙の宇宙論を說き吾人の一善一行は其儘萬善萬行にして一成一切成一證一切證なりと示されたり。其の義は一絲以て連珠を貫くが如く因位の萬行の華が佛果の萬德を莊嚴することを開顯し玉へり。師は熱心に研究して甞て諸林菩薩の偈を讀むに、即心自性といふに至り猛然として省悟して曰く、諸佛の妙法は文字を離る寧ろ講ずべけんや、宜しく實參實究して之を體驗せざるべからずと、即ち講席を棄てゝ禪門の宗席に游ぶ、恐くは此の時大陽禪師の輪下に參ぜられたものであろう。時に圓鑑禪師とあれど想ふに數年の後の事蹟なるべし、圓鑑は其の頃浮山を退て會聖巖に隱栖して居つた、一夕青色の鷹を畜ふといふ夢を見て以て吉瑞の徵と爲す、徵は驗である、翌旦に屆りて投子來る、圓鑑は禮を備へて之を延見せられた、其の時本則に擧ぐる所の外道問佛の話を看せしむ、乃至、師は了然として開悟す、遂に禮拜す、圓鑑曰く、汝佛祖門中玄々微妙の靈機を妙悟するや、師曰く、設ひ有るも須らく吐却すべし、有言無言に干からざる世尊の王三昧には悟了も亦無し況や迷想をや、若し悟得底の物あらば須らく吐き出し去るを要す。時に資といへる侍者が傍に在りて曰く、青華嚴は今日熱病に發汗劑を服して汗を得たるが如く、心も身も大安樂に至りしならん、師回顧して、狗口を合取せよ、狗の吠ゆる樣な無駄口を合取て默つて居よ、若し更に此の上に無駄口を扣かば我れ即ち嘔せん胃中の物を吐き出して汝に引掛けてやるべきぞ、忉々は叨々に改むるが宜い多言の貌である、嘔は吐き出すこと、是れは資侍者の舌頭を截斷したる獨立無伴の大力量である。此れより復たもや三年を經て悟後の修行を勵まれた。圓鑑時に其の圓熟せるを見て洞上門下の宗旨を拈出して之を示されしに悉く皆な妙契す、そこで附するに大陽禪師より依託の頂相は大陽の畫像である、皮履は皮製の鞋履、布直綴は麤布製の法衣、直綴は袖の廣き法服、古は一般に偏衫と裙子とを着けたり、偏衫は僧祇支と覆肩衣とを縫合したるものにて上半身を覆ふ、裙子は下半身を纒ふもの、後世に至り此の兩衣を直に綴り合せて一枚とせり故に直綴と稱す、此の三種を以て之に與へ且つ附囑して曰く、吾に代つて其の大陽の宗風を相續せよ、依て速かに去て久しく此に滯ること無れ、今後益々自重して善く宜しく洞上の宗風を護持すべしといひ、遂に一偈を書して其の行を送られた。其の偈に曰く、大陽禪師の佛法は高ふして上なく濶ふして彊り無きこと恰も須彌山の大虛空裏に立つが如くである、日月は賢臣の其の君を輔弼するが如く常に須彌山の周圍を回轉して居る、我は正に大陽の須彌に對しての日月として聊か其の志を輔けたのである、須彌は世界の中心なるが故に九山等の群峰は漸々に他の須彌山に倚り從がふが如く、天下の衲僧は自づから大陽の德風に靡くであろう、白雲は方に改變す、時に從て形を改め境に依て影を變ずるも青山は千古動ずること無し、佛祖の正法

は古今を一貫して終始變ぜず、故に汝今大陽の家風を保任し去らば、少林に於ける達磨の禪風は、大に興起して繁盛を極むること草の叢がり出づるが如く、曹溪に於ける六祖の大法も洞門を鎖せる雲の簾の巻き上げられて其の秘奥を現はすが如く、天下人をして齊く瞻仰せしむるであろう、汝が我が會下に在るは金鳳の龍巢に宿するにも似たり、倶に世の儀表たるべしと雖も、類して齊しからざることを知るべし、宸苔といふて帝王の宮城内に於ける御苑の苔は亂りに車を碾らせて侵すことを得ざるが如く、如何に傍人が妄評を下すとも大陽の法燈には一微塵も暗き影は無きものぞとの意味である。

如來の正法輪、東西密密として傳來し、五家森森として唱へ喧し、關棙區々にして家風聊か異なり。鳳凰あり龍象あり。共に群せず。何れも劣ならず。青華嚴、機語、大陽に契ふ。正に是れ洞家の兒孫と謂つべし。遠錄公は宗旨を葉縣に嗣げり。是れ正に臨濟下の流なり。龍巢に鳳子を止むべからず。故に、送りて圓通秀禪師に依らしむ。彼に至りて參問する所なし。唯だ睡を嗜むのみ。執事、通に白して曰く。堂中に僧あり日に睡るのみ。當に規法を行ふべし。執事曰く青上座なり。通曰く未可なり待て與に按過せん。通乃ち杖を引て堂に入り、師の正に睡るを見る。乃ち牀を撃て呵して曰く。我が這裏、閑飯の上座に與へて喫し了て打眠せしむる無し。師曰く和尚某をして何をか爲さしめんとす。通曰く何ぞ參禪し去らざる。師曰く、美食飽人の喫に中らず。通曰く爭奈せん、大に人あり上座を肯はざることを。師曰く肯ふことを待て甚麼を作すにか堪えん。通曰く上座曾て甚麼人にか見え來る。師曰く浮山。通曰く恁麼に頑懶なることを怪しみ得たり。遂に手を握って相笑て方丈に歸る。是れより道聲籍甚たり。初め白雲に住す。次に投子に遷る。是れ五燈會元に誌す所なり。

釋迦牟尼如來の正法輪は西天二十八代東土六代密密として今日に傳來して曾て斷絶せず、諸佛の正法は能く衆生の迷妄を破碎すること車輪の轉じて瓦礫を碎くが如し故に法輪といふ、密々とは他に祕するの謂に非ず、以心傳心の消息は水を飲で冷煖自知するが如く餘人の能く知る所に非ざるの意である。

曹溪の佛法天下に弘通するに當り明師宗匠續々出世し、各々一家風をなす、爲めに曹洞宗臨濟宗潙仰宗雲門宗法眼宗の五家を唱ふるに至つた。其の五家の家風が森森として盛んに唱へ出されて頗る喧しく賑やかなことであつた。關棙は關貫である、五家各々門戶を張り之に入る者の爲めに關所を構へて點檢を嚴にす、その關棙の形式は區々にして、唱道の家風は聊か少々づゝ異なり、五家共に鳳凰の如き德者あり、龍象の如き大力量の師家あり、共に群小に同ぜず、何れも低劣ならず、畢竟千里同風である。青華嚴の機緣言語は能く大陽の宗旨に契ふ、面々相對せずと雖も心々相通ずるを以て、正に是れ曹洞家の兒孫と謂つべし。浮山の遠錄公は即ち圓鑑禪師である、諱は法遠、浮山に住して化を揚ぐ、曾て同參の衆と與に蜀に遊で幾度か橫逆に遭ふ、師の機智能く其の難を免かる、衆は其の吏事に通曉するの故を以て遠錄公と稱せり、彼は宗旨を臨濟下なる葉縣の歸省禪師に嗣げり、是れ正に臨濟下の門流なり、臨濟下なる圓鑑の龍巢に洞下の兒孫たる投子の鳳子を止むべからず、故に送りて圓通秀禪師に依らしむ、秀禪師は法を雪竇禪師の法嗣天衣義懷禪師に嗣ぐ圓通禪師は勅賜號である。投子彼に至りて參禪問法する所なし、唯だ僧堂裏に在りて睡を嗜むのみであつた、まさかに睡眠のみを貪つても居られまいが一向に衆と與に入室もせず獨參もせざりしかば、大衆は睡眠僧と思ふたらしい。そこで執事の僧が圓通に白して曰く僧堂の中に一僧ありて日々睡に耽るのみである當に淸規に法を行ふて處分すべしと、圓通曰く是れ誰ぞや、執事曰く青上座なり、圓通曰く未可なり、未だ輕々しく處分すべからず、待て與に按過せん、按は考なり按過は吟味すること、圓通即ち杜杖を曳て僧堂に入り師の正に睡るを見るや其の牀を擊て呵責して曰く、我が這裏には閑飯の上座に與へて喫し了つてはぼんやりと打眠せしむる無し、そんな閑飯は無いぞ。師曰く和尙は某をして何事をか爲さしめんとする御思召なるや、圓通曰く何ぞ大衆と共に參禪し去らざる、師曰く如何なる美食でも腹の空かぬ飽人の喫には中らず、悟道安心の境界には何ぞ煩はしく參禪して公案の請賣を要せんや、圓通曰く、倂し爭奈せん大に人ありて上座を肯はざることを、諸大衆の非難攻擊を如何せん、師曰く、肯ふことを待て甚麼を作すにか堪えん燕雀何ぞ鴻鵠の志を知らん衆愚の妄評は道人の關する所では無い、圓通曰く、上座の威氣甚だ豪なり知らず曾て甚麼人にか見え來りて此の安心を得たる、師曰く、浮山の遠錄公、圓通曰く、道理で恁麼に頑懶なることを怪み得たり、餘りに橫着らしいので頗る不思議と思ふて居たわい、とて、遂に手を握て相笑て方丈に歸られた。是れより道人であるとの名聲、評判が籍甚と盛んに言ひ觸らす樣になつた、初め白雲山海會寺に住す、次に投子山に遷り大に洞上の宗風を擧揚せられた、是れ五燈會元に誌す所の行狀なり、師は平生枯淡、弊衲楮衾を存するのみ、元豐三年四十九歳にして投子山に住し、六年五十二歳にして圓寂せられた。

又續古尊宿錄に曰く。師は鑑禪師に得法す。圓鑑は嚮きに大陽明安大師に參ず。機語相契ふ。卒に宗旨を傳へ皮履布直綴を附せんとす。圓鑑辭して曰く、既に先に得處あり。安歎じて曰く我が一枝人の傳ふるなし。時に圓鑑白して曰く。洞上の宗風盡て擧し難し、和尚尊年にまします、若し人の傳ふるなくば某甲正に衣信を持して和尚の爲に永く人に轉じて相附囑せん。安許して曰く。我れ偈を書して留む證明とせよ。乃ち書して曰く。「陽高山頭草。憑君待價燉。異苗繁茂處。深密固靈根。」その末に曰く。得法の者衆に潜る十年にして方に闡揚すべし、と。後に遠と師と相逢ふ。洞下の宗旨、大陽の眞像、衣信、偈を以て附囑して曰く。吾に代りて大陽の宗風を嗣げと。後果して十年に方に出世し大陽に嗣ぐ。上に陽廣山と云は大陽山なり。異苗繁茂の處とは今の青禪師なり。價燉と曰ふは圓鑑を謂ふなり。

又續古尊宿錄に依るに曰く、投子禪師は圓鑑禪師に得法す、圓鑑は嚮に大陽明安大師に參ず、而して機語相契つて證明を得たり、卒に宗旨を圓鑑に傳へ皮履と布直綴とを附與せんとす、圓鑑之を辭退して曰く、某甲は既に曩に得處あり、大法に於て得る處あり即ち葉縣歸省を以て師と爲す旨を告ぐ、安禪師大に歎息して曰く我が一枝の佛法人の傳ふるなし我れ之を悲しむ。時に圓鑑白して曰く、禪師の住持し玉ふ洞上の宗風も其の賚なきが爲めに盡きて擧揚し難し、和尚今や尊年にて頗る老體にまします、若し不幸にして人の傳ふる無くば某甲正に衣信即ち傳法の信證となすべき法衣を持して和尚の爲に、傳法の大器を得て永く衣信を其の人に轉附して相附囑せん。安禪師は之を許して曰く、我れ一偈を書して世に留むべし、願くは之を以て證明とせよと仰せられ、乃ち偈を書して與へられた。その偈に曰く、我が陽廣山頭の草は、種子を靈山に下し芽を少林に生じ而して這裡に長養せらる、今や君が道情に憑て其の價の世に顯はれて益々燉盛なるを待つ、他日異常なる靈苗が時を得て繁茂し傳法の大善知識を出す處、枝秀で葉蕃り林深く影密にして其の靈根を固ふす、盡未來際枯凋の憂あるべからず。此の偈を示し了て其の末に又曰く、我が法を得たらん者暫く法身を培養して輕しく世に出でず、雲衆水衆の向に身を潜むること十年にして後始て大法を開闡擧揚すべし、と懇囑せられた。後に遠公は投子禪師と相逢つて機宜投合せり、是に於てか洞下の宗旨、大陽の眞像即ち頂相と衣信と偈とを以て附囑して曰く、吾に代りて大陽の宗風を嗣げと、投子は後果して光りを韜み十年にして方に出世して白

雲山に開堂せられた、上の偈に陽山といふは大陽山の事なり、異苗繁茂の處とは今の投子義青禪師なり、價燉といふは圓鑑囑累の功に待つをいふなり。

來記違はず。終に出世し、拈香して曰く。此の一瓣香大衆還て來處を知る麼。天地の產する所に非ず。陰陽の成ずる所に非ず。威音王以前、諸位に落ちず。然燈より後七佛傳來して直に曹谿に至り、派を大夏に分つ。山僧向に治平の初め、浮山圓鑑禪師に在りて親しく手づから其の宗頌を傳得寄附して委く證明せらる。慈旨に曰く、吾に代て大陽の宗風を續げと。山僧大陽禪師を識らずと雖も、浮山の宗法、人を識て以て嗣續を爲すこと是の如し。更に敢て浮山和尚法命附囑の恩に違せず。恭く郢州大陽山明安大和尚の爲にす。何が故ぞ。父母諸佛は親に非ず。法を以て親と爲すと。爾しより、大陽の宗風を開演し、即ち芙蓉楷禪師を得て嗣續す。夫れ浮山圓鑑禪師は臨濟和尚より七代、謂ゆる葉縣歸省和尚の嫡嗣なり。昔日、三嵩交和尚に投じて出家し、幼にして沙彌と爲る。僧の入室して趙州庭柏の因緣を請問し、嵩其の僧を詰るを見て傍より明らむ。諸師に參じて皆な相契ふ。汾陽葉縣に謁して皆な印可を蒙むる。卒に葉縣の嫡嗣たり。然して又大陽に參ず大陽亦た機緣相契ふ。故に宗旨を傳へんとせしに、法遠辭して曰く。さきに得處ありと。因て自ら傳受せずと雖も、大陽卒に人なき故に寄付して斷絕せず。後に其の機を得て密に付す。此に到りて知るべし、青原南嶽本より隔てなしといふことを。

大陽禪師の將來に對する記莂違はず、投子禪師は終に出世して白雲山に住せられ、開堂に拈香して嗣承を表明し玉へり。其の時の語に曰く、此の一瓣香、瓣は瓜中の實なり一瓣は一片といふに同じ、是れ則ち袖裏より拈出するものにして直に此の香を以て自己の悟處得處となして提唱するのである。諸大衆還て此の香の來處を知るや、自己の心香は大道の本體宇宙の靈源である、故に天地の產する所に非ず、天地も此の心香より生ず、陰陽二氣の成立する所に非ず、陰陽も亦た此の心香の影像子である。過去威音王佛以前に在りて凡聖賢愚の諸位に落ちず、實に絕待平等の妙體である、然燈佛より後相續して過去七佛に至り、七佛亦た是を傳來して直に曹谿に至り、大に派を大夏四百餘州に分つ、威音王

佛及び然燈佛は久遠の佛である、大夏は大唐と同じく支那のこと、山僧向に治平の初め浮山圓鑑禪師の處に在りて、親く手づから其の太陽の宗旨と偈頌とを寄附せられたるを傳へ得て機語相投じ委く證明せらる、其の時圓鑑の慈旨に曰く、吾に代て大陽の宗風を續げと、山僧不幸にして大陽禪師の面貌を識らずと雖も、浮山の擧揚する宗法は山僧が實に其の人なることを識りて以て嗣續を爲すこと是の如し、故に山僧は更に敢て浮山和尙法命を以て附囑し玉ひし所の恩に違背せず、玆に恭く心香を燒きて郢州の大陽山明安大和尙の爲にす、以て附法の大恩に酬ひ奉る。何が故ぞ、父母や諸佛は我が親に非ず法を以て親と爲す、正法の傳受は形式に在らずして心心證契に在り、法の存する所佛祖現成するが故なり。以上は投子禪師拈香の法語である。禪師は爾しより專ら大陽の宗風を開顯演說し、後に即ち芙蓉道楷禪師を得て大法を嗣續す、夫れ浮山圓鑑禪師は臨濟和尙より七代の法孫にて謂ゆる葉縣歸省和尙の嫡嗣なり、昔日三嵩交和尙の門に投じて出家して、幼にして沙彌と爲る、沙彌は勤策と譯す惡を息めて慈悲行を策勤するの謂なり出家して比丘となる迄の行者の名である。一日僧の三嵩の室に入て趙州禪師が祖禪西來意の問に答へて庭前の栢樹子と答へられたる因緣を請問し、三嵩が嚴重に其の僧を問詰するを見て、傍に在りて忽然として宗意を明らむ。それより諸方の宗師家に參得して皆な相契ふ、尋で汾陽善照禪師葉縣歸省禪師に謁して皆な印可證明を蒙むる、卒に葉縣の嫡嗣となられたり、然して又大陽に參ず、大陽下にても亦た機緣相契ふ、故に宗旨を傳へんとせしに、法遠圓鑑は辭退して曰く、曩に得處ありて師資の緣定まると、因て圓鑑自から傳受せずと雖ども、大陽卒に嗣法の人なき故に圓鑑に寄附委托して斷絕せず、後に其の機たる投子を得て密に大陽の佛法を付す、此に至りて青原下の曹洞も南嶽下の臨濟も一佛法にして絲毫の隔て無しといふことを知るべし。

實に大陽の一宗、地に落ちなんとせしを悲んで、圓鑑代て大陽の宗旨を傳ふ。然るを自家の門人は曰く、南嶽の門下は劣なり、青原の宗風は勝れりと。又臨濟門下は曰く、洞山の宗旨は廢れたりき、臨濟門下に扶けらると。何れも宗旨暗きが如し。自家他家、若し實人ならば共に疑ふべからず。故如何となれば、青原南嶽共に曹谿の門人、牛頭の兩角の如し。故に藥山は馬祖に明らめて石頭に嗣ぐ。丹霞も馬祖に明めて却て石頭に嗣ぎき。實に兄弟骨肉共に勝劣なし。然るに唯だ我が祖師を稱して嫡嗣とし餘を旁出とす。知るべし臨濟門下も尊貴なり。自家門下も超邁なり。若し臨濟に到らざる所あり、劣

なる所あらば、圓鑑既に以て大陽に嗣ぐべし。若し大陽劣なる所あり、錯まる所あらば、圓鑑何ぞ投子に付せん。然も諸仁者、五家七宗と對論することなく、唯だ當に心を明らむべし。是れ即ち諸佛の正法なり。豈に人我を以て爭はんや。勝負を以て辨ずべからず。

曹洞臨濟兩家一佛法なるを以て實に大陽の一宗嗣法の人なくして將に地に落ちなんとせしを悲んで、圓鑑代て大陽の宗旨を投子に傳ふ、其の隔て無きこと知るべし、然るを曹洞自家の門下に在る人は曰く、南嶽の流を汲む臨濟門下は劣なり、青原の下に屬する曹洞の宗風は勝れりと、又臨濟門下の者は曰く洞山の宗旨は大陽に至りて廢れたりき、臨濟門下の圓鑑に扶けらると、斯く論ずる者は何れも宗旨を考ふるの識見昧きが如し。曹洞の自家も臨濟の他家も若し眞實に道を知るの人ならば、共に疑ふべからず、故如何となれば青原も南嶽も共に曹谿の門人にして其の衣鉢を傳持する者なれば、其の優劣なきこと牛頭の兩角の如し。故に藥山は馬祖大師の處にて大道を明らめて法は之を石頭大師に嗣ぐ、丹霞天然禪師も馬祖の處に於て心地を明らめて却て石頭に嗣ぎき、實に其の親しみは兄弟骨肉の如くにて共に勝劣なし、然るに唯だ我が自門の法系の祖師を稱して正傳の嫡嗣として餘を旁出とす、旁はかたはら枝流又は分家の意、同一佛法中に於て本家分家を爭ふ何等の錯誤ぞや。知るべし臨濟門下も正傳の佛法を保任して尊貴なり、曹洞の自家門下も直指の妙道を繼承して超邁なり、邁はすぎると訓じ佛法中最も超越したる尊貴の宗旨なるをいふ。若し臨濟の宗旨に到らざる所あり劣なる所あらば、圓鑑は既に以て大陽に法を嗣ぐべし、豈に人情に泥んで師資の縁を定めんや、若しも大陽の宗旨に劣なる處があり錯まる處あらば、圓鑑何ぞ洞上の命脈を投子に付せん、下劣の法を强ふるは凡俗も亦忍ぶ能はざる所である。然も諸仁者は此の意を體得して徒らに五家七宗といふ枝葉に固執して妄りに其の優劣を對論することなく、唯だ當に自己の本心を明むべし、是れ即ち諸佛の正法なり、豈に人情や我見をもて爭はんや、勝負の念をもて辨解ずべからず、七宗とは臨濟の門下に黃龍楊岐の二派を分ち五家を併せて七宗と稱した、建仁榮西禪師等は黃龍派に屬し、大德宗峯禪師や妙心關山禪師等を始め黃檗隱元禪師等は皆な楊岐派に屬して居る。

然るに、洪覺範、作せる石門林間錄に曰く、古塔主は雲門の世を去ること無慮百年にして而も其の嗣と稱す。青華嚴未だ始より大陽を識らず、特に浮山遠公の語を以ての故に之を嗣で疑はず。二老皆な傳言を以て之を行ふて自若

たり。其の己れに於て甚だ重く、法に於て甚だ輕し。古の人の法に於て重き者は永嘉黄檗是れなり。永嘉は維摩經を閲するに因りて佛心宗を悟る、而も往て六祖に見えて曰く、吾れ宗旨を定めんと欲すと。黄檗は馬祖の意を悟て而して百丈に嗣ぐと。今の說を考ふるに、洪覺範尙ほ知らざる所あるに似たり。故如何となれば、大陽の佛法圓鑑に寄付す、豈に疑ふべけんや。況や人を得ん其の證據を遺す。末後、來記に及ぶことも違はず。もし圓鑑に遭へるを疑ふべくんば、大陽傳へけるとも疑ふべし。祖師訓訣し來る所、胡亂の世情に比すべからず。世人すら實ある人の言を證據とすること多し。況や圓鑑知法の人として、大陽面授あり機語相契ふ。覺範は投子圓鑑の言を疑はざると誹る。圓鑑既に葉縣の嫡嗣として臨濟の正流なり。古人之を疑はず。佛祖豈に妄稱あるべけんや。累祖の印記を受くるに依て尊重し來る。何を以てか投子圓鑑を疑ふべきや。大陽今に存せるが如し。

此の一段は宗乘に對する偏小の見解を呵責せられたのである、前にも述べし如く、大陽と投子との間に於ける嗣法に關する史傳の考察を本位とせられたるに非ず、且らく圓鑑代授の記錄に基きて證契即通の密意あることを示されたのである。

然るに洪覺範は其の著作せる石門林間錄に於て評論を試みて居る、範は慧洪覺範と稱し法を黄龍の嗣寶峯克文に續ぎ、僧寶傳、高僧傳、林間錄等の著述少なからず、其の中の林間錄に曰く、承古禪師人呼で古塔主といふ、彼は雲門大師の世を去ること無慮百年にして而も自ら雲門の嗣なりと稱す、無慮は大凡といふに同じ、青華嚴なる投子禪師も未だ始より大陽を識らず、特に浮山の遠錄公の語を以ての故に大陽の法を嗣で疑はず、古塔主青華嚴の二老漢は皆な傳言相續又は自分免許の傳法を以て之を行ふて自若たり、自若とは舊の如くにして變ぜざるをいふ。俗語に平氣といふが如し、此の二老の如きは己れの事に於ては甚だ重くして法を守る上に於ては甚だ輕し、乃ち法を重んぜずして但だ己れの爲めにするが如し。古の人にして法に於て重き者は永嘉大師と黄檗禪師是れなり、永嘉は維摩經を閲するに因りて佛心宗なる禪の極則を悟りしも、師承を重じて往て曹溪六祖に見えて曰く、吾れ宗旨の證據を定めんと欲すとて六祖の印可を得られた。又黄檗禪師は初め馬祖に參ず、馬祖の示寂に遭て乃ち百丈に參じて馬祖の宗旨を悟了す、百丈曰く子既に馬祖の法を明らむ宜く馬祖に嗣ぐべし、黄檗曰く然

らず今日師に因て馬祖大機の用を見ることを得たり、若し馬祖に嗣がば我が兒孫を喪せん、乃ち馬祖の意を悟つて而も百丈に嗣ぐと、以上は洪覺範の語である。太祖大師が今の說を考ふるに洪覺範は尙ほ宗乘の密意を知らざる所あるに似たり、故如何んとなれば大陽の佛法は特に圓鑑に寄付委托す、此の事豈に疑ふべけんや、況や其の人を得んことを待て其の證據を遺す大陽末後に至りて將來嗣承の事を記し且つ韜晦十年せよとまで遺訓を傳ふ。斯る來記に及ぶことも違はず、若し投子が圓鑑に遭へる事實を疑ふて非難すべくんば、大陽親しく投子に傳へけるものぞとも疑ふて解釋を下し得べし、要するに古の祖師の親しく遺訓し決定し來る處のものは、胡亂といふて胡人の爭亂の如く規律も無く統一も無く理由も無きつまらぬ世俗の情慮に比すべからず、世間普通の人すら眞實ある人の言を證據とすること多し、季布の一諾の如き是れなり、況や圓鑑の如き法を知るの人として而も大陽より面あたり、親しく印可を授けらるゝありて機語相契ふ、何ぞ違法の事あらんや。洪覺範は投子禪師が圓鑑の言を疑がはざると誹る、馬鹿正直に圓鑑の語を信じて、未知の大陽に嗣ぐを不是と稱す、併し圓鑑は既に葉縣禪師の嫡嗣として實に臨濟の正流なり、古人は遂に之を疑はず、佛祖豈に妄りに正流ならざる者を正流なりと稱することあるべけんや、累代の祖師の印可と記莂とを受けたるに依りて其の嗣承を尊重し來る、何をもてか投子と圓鑑との關係を疑ふべきや、大陽を以て滅し已れりと思ふこと莫れ、其の來記儼然其の法身常在なり、故に今に存せるが如し。

佛祖の命脈、通じて始なく終なし。遙に三世を超越し、まのあたり師資違はず。悉く是れ打成一片なり。葫蘆藤種の葫蘆を纏ふが如し。遂に別物なしと謂ふべし。是れ大陽、圓鑑、及び投子に到るまで、大陽一人にし來る。乃至釋迦一人連綿として今日に及べり。佛祖堂奧の事、是の如し。豈に圓鑑を疑ふべけんや。若し圓鑑を疑ふべくんば、迦葉何ぞ釋迦を疑はざる。二祖何ぞ達磨を疑はざる。祖師欺むくべからず。佛法に私なきことを貴ぶ。故に嗣續し來り、大陽も圓鑑を憑む。投子も圓鑑を敬ふて、命を疑はず、法を重くす。三師ともに曩祖の宗旨を遺落せず。後代に久しく洞山の家風を囑累し來る。實に是れ、我が家の奇特、佛法の秘藏なり。

佛祖の命脉は正法眼藏である、正法眼藏は法界に充滿し古今を一貫す、故に無始劫より未來際に貫通

して始なく終なし、遂に過去現在未來の三世を超越して、不變不易である、面たり師は之を授け資は之を受く、授者受者一如の妙法であるから、兩々相違はず、悉く是れ打成一片なり、打成一片とは一體となりて差別なきこと、喩へば葫蘆藤種の葫蘆を纏ふが如し、即ち能所一體である。葫蘆藤種纏葫蘆とは天童如淨禪師の語である、胡蘆は瓢箪の類なり、胡蘆の蔓が胡蘆を纏ふ、纏ふ物纏はるゝ物共に同性である。故に遂に別物なしと謂ふべし、然れば大陽、圓鑑及び投子に至るまで、三師一體であるから大陽よりいへば大陽一人にし來る、佛々祖々も亦た是の如くであるから、乃至、釋迦如來よりいへば釋迦一人が印度支那を經て連綿として今日に及べり、西天四七東土二三も皆な一釋迦牟尼佛である。故に承陽高祖は正法眼藏面授の卷に於て「自己の面目は面目にあらず如來の面目を面授せり」と仰せられた、佛祖堂奧の一大事たる面授の法門は是の如し、豈に圓鑑の付托を疑つて是非すべけんや、若し圓鑑を疑ふべくんば、師資一體の宗意を信ぜざる者であるから、證契即通は出來ぬ、斯る疑議を許すとせば、迦葉は何ぞ釋迦を疑はざる、二祖も何ぞ達磨を疑はざる、證契即通は大信心なり、祖師の大信心牢として金剛の如く炳として明鏡に似たり、凡情を以て妄りに欺くべからず、佛法には私なきことを貴ぶ、俗情や妄見を以て測ることは許さぬ。故に一點の疑情なくして嗣續し來りたり、此の意を體するが故に大陽も圓鑑を憑む、投子も圓鑑を敬ふて、其の囑命を疑はず、是れ法を重くするものである。是を以て三師倶に曩祖正傳の宗旨を遺失し墜落せず、後代に相續して久しく洞山の家風を囑累し來るもの、實に是れ我が祖師門家の奇特にして佛法の秘藏なり、囑累は付囑し繋屬すること、奇特は他に超えたるをいひ、秘藏は凡智を以て量るべからざる堂奧の大事をいふ。

いまも、現前其の器を得ざらん時、達人に附け置くこともあるべきなり。洪覺範委悉にせず。青華嚴を古塔主に例す。幾許の錯りぞ。夫れ薦福承古を古塔主と曰ふ。雲居弘覺禪師の塔前に棲止す。雲門より後、百年に一出たり。僅に雲門の言に解する所あるを以て、乃ち曰く、黃檗の見處、圓ならず、古今豈に隔つべけんや。馬祖の言を明らめながら馬祖に嗣がず。我れ雲門の言を明らむ、須らく雲門に嗣ぐべしと云ふて、終に雲門に嗣ぐと稱す。諸錄悉く雲門の嗣に載す。是れ錄者の錯りなり。笑ひぬべし。香嚴、擊竹に明らむ、何ぞ翠竹に嗣がざる。靈雲、桃花に明らむ、何ぞ桃花に嗣がざる。憐むべし、承古は佛祖屋裏、嗣承あることを知らず。若し覺範も義青和尚を疑は

ば、屋裏の相承を知らざるが如し。故に汝、己れに於て輕く、法に於て到らずといふべし。然れば林間錄の記、用ゐるべからず。

今も現前に大法を相續すべき其の器を得ざらんことある時は、自家の佛法を證得せし達道の人に附け置くこともあるべきなり、大陽佛法を以て佛法を證得せる圓鑑に囑し、且つ信衣を托し、師資の證契自づから相通ず、正に是れ面授面なり、洪覺範は此の密旨を委曲に悉知せずして、青華嚴を古塔主に例して同一に評論す、幾許の錯謬ぞ、誤謬の大なるものである。夫れ宋の景祐年中薦福寺の承古和尚の事を古塔主といつた、和尚は雲居弘覺禪師の塔前に棲止して居たからである、雲門禪師より後、百年を經て世に出でたり、彼は僅に雲門の言に解會する所あるを以て、乃ち曰く、黃檗の見處猶ほ未だ圓ならず、法に古今なし豈に年所を以て隔つべけんや、黃檗は馬祖の言を明らめて悟處を得ながら馬祖に嗣法せずして百丈に嗣ぐは不見識である、吾れは雲門の言を明らむ須らく雲門に嗣ぐべしと曰ふて終に雲門に嗣ぐと稱す。彼れ上堂衆に告げて曰く、雲門匡眞大師如今現在す諸人還て見る麼、若し也た見得せば便ち是れ山僧と同參、見るや見るや、此の事直に須らく諦當して始て得べし、自ら謾ずべからず、且く往古黃檗、百丈和尚、馬大師喝を下すの因緣を聞て他因て大に省す、百丈問ふ、子向後大師に承嗣すること莫しや否や、黃檗曰く、某大師を識ると雖も要且つ大師を見ず、若し大師に承嗣せば恐くは我が兒孫を喪せん、大衆、當時馬大師遷化して未だ五年を得ず、黃檗自ら見ずと言ふ、當に知るべし黃檗見處圓ならず、要且祇だ一隻眼を具す、山僧は即ち然らず、雲門大師を識得し亦雲門大師を見得す方に雲門大師に承嗣すべし云云と。是に依て傳燈等の諸錄は悉く承古を以て雲門の嗣に載す、是れ全く錄する者の訛謬なり、實に笑ひぬべし、一笑に付し去るべき謬見である。承古は雲門の言に依て大悟せしを以て雲門に嗣ぐといふて居るが、果して然らば香嚴は擊竹に於て宗旨を明らむ、何ぞ翠竹に嗣がざる、香嚴智閑禪師一日山中に於て草木を芟除し瓦礫を以て竹を擊つ聲を作す俄に失笑する間廓然として省悟し而して法を潙山禪師に嗣がれた。又靈雲は桃花を一見せし時に大事を明らむ、何ぞ桃花に嗣がざる、靈雲志勤禪師は桃花の開くを見て悟道し而して亦法を潙山禪師に嗣がれた、是れ師資相承の大事を尊重するが爲めである。然るに憐むべし承古は佛祖屋裏嗣承の大事あることを知らずして妄りに雲門に嗣ぐと稱す、雲門曾て來記を示さず、又衣信を托せず、師資の證契那邊にかある、若し洪覺範も義青和尚を疑ふて、承古と一列なりと思はば、彼も亦た屋裏の相承を知らざるもの〻如し、故に汝こそ己れに於きて輕く、自ら自己の尊嚴を侮辱し、又法に於きても之を尊重すること到らずと謂ふべし、然れば林間錄の記は我が宗を誤るの妄見なるを以て斷じて用ゐるべ

からず、承陽高祖も大に其の妄見を誡めて「なんぢが如く文字によりて嗣法すべくば經書をみて發明する者は、皆な釋迦牟尼佛に嗣法するか、さらにしかあらざるなり、經書によれる發明必らず正師の印可をもとむるなり」云云と仰せられてある。

適來の因緣は、外道佛に問ひたてまつる、有言を問はず無言を問はずと。尋常說默に落ちざる道なるが故に、世尊良久しします。是れ隱顯に非ず、自他に非ず、內外なく正偏なし。恰も虛空の如く、海水の如くなることを顯はし示されしに、外道忽ちに會し、禮拜して曰く、世尊大慈大悲我か迷雲を開て我をして得入せしむと。云ひて去りぬ。實に片雲盡て虛天潔く、風波消して巨海靜なりしが如くなることを得たりき。然るを阿難知らずして、佛に問ひたてまつりて曰く、外道何の所證ありて而も得入すと言ふや。佛曰く、世の良馬の鞭影を見て、而して行くが如し。實に是れ祖師の機關、親しく庫藏を打開せしむるに一機をかへさず、一言を出さざるところに覺了し來り、明徹にもてゆく。鞭影を見て正路に到るが如し。

以下は正しく本則に就ての御垂示である、適來は前程といふが如し即ち本則に擧ぐる所の因緣は、外道あり佛に問ひ奉る、有言を問はず無言を問はずと、外道といへば婆羅門教徒であらう、此の漢頗る聰明で宗教哲學の蘊奧に向て研究の步を進めて居る者と見らる。眞理の妙諦は絕待無爲である、之を實有なりとせんに一物の留むべき無し、之を空無なりとせんに、萬象時に隨て顯現して活動息む時なし、色即ち是れ空、空即ち是れ色なり、三祖大師は「有即ち是れ無、無即ち是れ有」と言はれたり、故に這裏有言をも問はず無言をも問はず、兩頭を截斷して何物か是れ眞なるやと問着した。此の法は尋常說默に落ちざる道である、釋尊四十九年の說法は總に是れ道の注脚だ、されども末後に至りて一字不說と仰せられた、實際理地に一塵を立せず佛事門中に一法を捨てざる法なるが故に、世尊は何等の答話にも及ばず唯だ良久しまします、即ち靈山會上に於て若花瞬目し玉へると同一轍である。是れ故らに法を隱して默せしに非ず又法を顯はして說明せしにもあらず、大道の上には自の佛も無く他の外道も無い、故に自他にあらず、內の一心もなく外の萬法もなく、從つて正偏の別もなし、正偏は洞山大師直指の法門である、正位は空界本來物なし、偏位は色界萬象の形あり、色空不二なるを以

て正偏を分けて辨ずることは出來ぬ。恰も虚空の内外なきが如く海水の表裏なきが如くなることを顯はし示されしに、外道は忽ちに世尊の密意を會得し禮拜して曰く、世尊大慈大悲我が迷妄の雲を開て大道の慧日を拜し我をして無上道に得入せしむと云ひて去りぬ。此の外道の得道安心の樣子は實に片雲普く盡きて虚空天外淨く潔く、風波全く消して、巨海頓に靜なりしが如くなることを得たりき、然るを阿難尊者此の消息を知らずして疑念を起し、世尊に問ひ奉りて曰く、外道は何の證する所かありて而も得入すと言ふやと、時に佛之に示して曰く、譬へば世の良馬の僅かに鞭の影の動くを見て直ちに馳せ行くが如し、下根の者は之を聞くも信ずること能はず、中根の者は敎を聞て僅かに之を識る、上根の者は之を無聲に聽て忽ちに了ず、實に是れ釋尊の妙用祖師門下の機關即ち接得の手段を示して、親しく彼をして正法の庫藏を打開せしむるに、一機をかへさず、一度の機用をも回轉ひず、又一言をも出さざる處に覺了し來り明徹にもてゆくこと、快馬の鞭影を見て直ちに正路に至るが如し、機關はからくり活動のしかけを施したる機械のことで師家の妙用に名けたり、明徹は明了通達の意である。

然れば、非思量の處に留まらず。尚ほ眼を著けて見よ。無言說の處に滯らず。更に心を明らめよ。此の良久の處、人多く錯りて會す。或るは一念不生にして全體現ず。離名字相にして獨露し來る。雲盡き山露はるるが如く、突兀として物に倚らず。正當恁麼なりと。從前知解を發して、外に向て馳求せしに比すれば、少しき休歇せるに似たれども、皮肉未だ亡ぜず識陰尚ほ去らず。此の處に相應せんと思はば、正に氣息を絕し、命根を斷じ去て見よ。何物か露はるるとかせん。豈に非思量なりとせんや。既に何ともすべからず。如何ぞ默默然なりとせん。ただ一息斷じ兩眼閉づるのみに非ず、百骸潰散して皮肉跡を留めざる所に向て見よ。明暗に屬せず、男女に非ざる一物あり。如何が此の道理を通ぜん。

嵯峨萬仭鳥難通。　劒刄輕氷誰履踐。

然れば非思量の處に留まらず、尚ほ眼を着けて工夫して見よ、非思量は三祖大師の語にて思量分別を超越したる王三昧のことである、だが思量を離れたる無心の境界となさば一無心猶ほ隔つ一重の關であるから、無心の地にも住まらずして進一步の工夫こそ肝要なれ。無言說の處に滯らず、更に心を明

らめよ、無言無說是れ佛法なりと思ふてはならぬ、承陽高祖は、「このなかに教菩薩法あり教諸佛法あり同じく是れ大道の調度なり、調度ぬしにしたがふ、ぬし調度をつかふ、これによりて西天東地の佛祖必らず或從知識或從經卷の正當恁麽時、をの〳〵發意、修行、證果かつて間隙あらざるものなり」と示されてある。大道畢竟說默の上に非ず故に更に向上の一路を打開して心地を明らめよ、世尊のこの良久のところ實に甚深微妙の自受用三昧である。然るに古今の人多く錯まりて會す、或る人の如きは此の當體を解して、是れは一念不生にして全體現ずる底の的意である、一念をも生ぜず徹底無心の時大道の全體現成す、一切の名字の相を離るゝ時佛心の本性が獨露し來る、文殊菩薩が維摩の病を問はれし時、入不二の法門といへる大問題を提起せられ、菩薩は「我が意の如きは一切の法に於て言も無く說も無く示も無く識も無く諸の問答を離る、是れ入不二の法門と爲す」と言はれた。恰も雲盡きて山露はるるが如く突兀として獨立して何物にも倚らず、突兀とは突は出、兀は高、高く秀づるの貌、斯く獨立無伴なる正當恁麽なりと說明を試みて居る、是れ大に是なるが如くなるも畢竟摸倣せる見知である。尤も從前凡情より出たる知見解會を發して、徒らに心外に向て思ひを馳せ貪ぼり求むる者に比すれば、少しき休歇安心せるに似たれども、仔細に點檢すれば依然として我執を脫し得ぬ、故に自己といへる皮肉が未だ亡ぜず、慮知分別の識陰尙ほ未だ去らず、可惜乎、樣に依て胡蘆を描くの類である、識陰とは色受想行識の五陰の一である、乃ち意識のこと、陰とは陰蓋の義、此の五陰に依りて眞如の妙德を陰蓋するが故に名く。德山は龍潭の接得に値ふて從來秘重する所の疏鈔を燒却して「諸の玄辯を窮むるも一毫を大虛に致すが如し、世の樞機を竭すも一滴を巨壑に投ずるに似たり」と言ふた、一切の妄情と學解とを放擲し去て金剛座上に安住せねばならぬ。故にこの妙處に相應せんと思はば、當に氣息を絕し命根を斷じ大死人となり去て看よ、坐禪儀に謂ゆる「心意識の運轉を停め念想觀の測量を止めて作佛を圖ること莫れ」の境致である。此の時は大道といふものも悟得といふものも無い、乃ち何に物か現はるゝとかせん、又豈に非思量なりとせんや、非思量といふも中らぬ、既に什麽ともすべからず、說似一物即不中である、說默の沙汰を超脫するが故に如何んぞ默々然なりとせん、此の時は但だ一息截斷し兩眼閉づるのみに非ず、百骸といふて有ゆる骸骨も散り〳〵破落〳〵に破潰分散して皮肉消滅して迹を留めざる處に向ひて看よ、即ち身心脫落の時節である。此の時始て明暗にも屬せず男女にもあらざる一物ありて現成すべし、明暗は生死とも色空とも聖凡とも見るべし、如何が此の道理を通曉せんといふて、例に依り七言二句の頌を示して、嵯峨たる萬仭鳥通じ難し、劍刃輕氷誰か履踐せんと本則の大綱を拈提せられた。嵯峨は山の嶮峻なる貌、萬仭は八尺を一仭といふ、幾萬尺も高く卓立する大山には飛鳥だも通ひ難し、之を攀登せんと擬するも、恰も劍刃を踏むが如く輕

く薄き氷を履むが如く、誰人が能く之を履踐せん、恐らくは佛祖と雖も履踐し去ることは不可能であろう、是れ正しく有言無言を離脱せる佛向上の事を提唱せられたのである。萬松は「無身の人疾を患へ無手の人藥を合し無口の人服食し無受の人安樂なり」といふたが、此の向上の最高峰頂には、無身の人兎角の杖を携へ、無脚の人龜毛の履を穿ち、無心の人歩を進め、無眼の人道を究め、而して始めて能く之を驗得し去るであらう、須らく身心脱落して王三昧を坐破し來れ。

第四十五章

第四十五祖。芙蓉山道楷禪師。參投子青和尚。乃問佛祖言句如家常茶飯。離之外別有爲人處也無。青曰汝道寰中天子敕還假堯舜禹湯也無。師欲進語。青以拂子摵師口曰汝發意來早有三十棒分。師即開悟。

以上本則　以下太祖の御提唱至れり盡せり。

師諱は道楷。幼より閑靜を喜んで伊陽山に隱る。後に京師に遊で術臺寺に籍名す。法華を試みて得度す。投子に海會に謁し、乃ち問ふ佛祖の言句、乃至師乃ち開悟し、再拜して便ち行く。子曰く且來闍梨。師顧みず。子曰く汝不疑の地に到るや。師乃ち手を以て耳を掩ふ。後典座と作る。子曰厨務勾當易

からず。師曰く不敢。子曰く粥を煮るか飯を蒸すか。師曰く人工は米を淘り火を著く。行者は粥を煮飯を蒸す。子曰く汝甚麼をか作す。師曰く和尚慈悲他を放閑し去れ。一日投子に侍して菜園に遊ぶ。子柱杖を度して師に與ふ。師接得して便ち隨ひ行く。子曰く理合に恁麼なるべし。師曰く和尚の爲めに鞋を提げ杖を挈く也た分外と爲さず。子曰く同行の在る有り。師曰く那一人は教を受けず。子休し去る。晩に至つて師に問ふ。早來の說話未だ盡さず。師曰く請ふ和尚擧せよ。子曰く卯には日を生じ戌には月を生ず。師即ち燈を點じ來る。子曰く汝上來下去總に徒然ならず。師曰く和尚の左右に在れば理合に此の如くなるべし。子曰く奴兒婢子誰が家の屋裏にか無からん。師曰く和尚年尊なり他を闕かば不可なり。子曰く恁麼に慇懃なることを得たり。師曰く恩を報ずるに分ありと。

師諱は道楷、續傳燈錄に據れば沂州沂水の人で崔氏の家に生れ人と爲り剛勁孤硬であつた、幼年の時代より世の喧囂を厭ひ閑靜を喜ばれ遂に伊陽山に隱れて解脫道を修せられた。後に京師に遊んで術臺寺に名籍を掛け、法華經の研究に從事し其の志操見處の堅實なるを試みられて得度せられた、それより淮山の海會に赴て投子禪師に謁見し今の本則の問答があつて一大事を了ぜられ、それより投子の輪下に在りて悟後の修行を精錬し隨時隨處に道力を增進して、遂に禪門一代の師表として萬世の下兒孫をして其の偉德の甚深なるに浴せしめられた。此の一段は開悟の當時より師資親密の妙契を示されたのであるが、以下太祖の提唱に於て、此等の問答往來の玄旨を懇ろに開演し玉ふであるに依て、その處に於て委しく說明することとし、此處にては一々字句に就ての講說を略して置くことゝする。

是の如く、低細綿密に那一着子を明らめ來る。初め佛祖の言句は家常の茶飯の如し。此を離れて外に別に爲人の處ありや也た無しやと問ふ意。今尋常行履の外に、更に別に佛祖の示す所ありや否やと。頗ぶる所解を呈するに似たり。然るに、子曰く汝道へ寰中は天子の勅、還て堯舜禹湯を假るや也た無しやと。實に是れ當今の令を下すに、卒に昔の堯王舜王の威を假らず。唯だ一

人慶ある時は萬民自から蒙るのみなり。然の如く設ひ釋迦老子出世し、達磨大師現在すとも、人々他の力を假るべからず。唯だ自肯自證して少分相應あり。故に道理を說き滋味を着けん。尙ほ是れ他を見る分あり。趣向を免かれず。故に進語せんとせしに拂子を以て師の口を摑つ。此に本より以來、一具足して闕けたることなきことを示すに曰く。汝意を發し來る早く三十棒の分ありと云ふ。是れ證明には非らず。一度發意とは、夫れ心とは如何なるものぞ、佛とは何物ぞと求め來りしより、早く己れに背て他に向ひ來る。縱ひ自ら說き得て全體現はれたり。自然に明らかなりと言ひ、心と說き性と說き禪と說き道と說かん。悉く趣向を免かれず。若し是れ趣向の處あらば早く白雲萬里なり。己れに迷ふこと久しし。豈に三十棒のみならんや。千生萬劫汝を棒すとも罪過免かれ難し。

初めに芙蓉の修行せられたる大體の行狀を結んで、芙蓉楷祖は是の如く低細綿密に那邊の一着子に參究して明らめ來る、低細は叮寧審細といふに同じ、一着子とは碁の一手といふ語である、一手に依て全局の死活を制するもの、依て宗門の一大事の妙處を那の一手といふたのである、その參究の初めが今の本則である。乃ち投子に謁して、佛祖の言句は家常平生の茶飯の如し別に珍らしきものに非ず、常識を以て判斷することも決して不可能では無い、禪門更に向上の法門ありと聞く、此の言句を離れて外に別に人の爲めにする眞訣の妙處ありや也た無しやと問ふたのである、其の意思は今尋常の行履として、實踐躬行して居る事の外別に佛祖の別傳として示す所ありや否やと問着せられたるは、恰も芙蓉に別に一見知ありて其の所解を呈似する如く思はるゝ。然るに投子曰く、汝道へ、寰中即ち天子の直轄に屬する領地は總て天子の敕令に依て統治せらる、然るに、還て古への聖君と稱せらるゝ堯舜禹湯の力を假らねばならぬものであるかどうかと反問せられた、實に是れ當今即ち現今上皇帝の號令を下すに當りては、卒に昔の堯王や舜王の威勢を假らず、唯一人の君主が慶あるときは、萬民自から其の惠みを蒙るのみである。慶は禮記に、慶を行ひ惠を施すとある、彼の大學に、一家仁なれば一國仁に興り、一家讓なれば一國讓に興るの意なり、是れ即ち大權の發動致す所、他の干涉や威力を假りる樣では獨立國とは言はれぬ。此の一大事も亦しかの如く人々具足の大法なるを以て、縱ひ釋迦老子が出世し、達磨大師が現在すとも、人々分上他の力を假るべからず、唯だ自ら肯ひ自ら證して始

て少分の相應あり、故にことさらに種々の道理を說いたり、滋味即ち如何にも御美しそうな甘味をつけん、是れ亦混沌に眉を描くの類で、猶ほ是れ自己以外に他を見るの分ありで、自己の對象として眺めることゝなるから、矢張他に向つて趣向するといふことを免かれず、故に芙蓉が進語せんとせられしに、投子は拂子を以て其の口を摵たれた、此に本より以來人々に具足して缺けたること無き大道なることを示された。更に其の意を適切に知らしめんとして曰く、汝道を求めんとして意を發し來る早く三十棒の分ありといふ、是れは證明せられしにはあらず、向上の法門を訓誡せられたのだ。一度發意とは、夫れ本心とは如何なるものぞ、佛とは何物ぞと、求め來りしより、早く是れ自己に背て他に向ひて尋ね來るのである。縱ひ自ら言端を弄し說き得て宗乘の全體現はれたりと思ひ、洞上の家風自然に明らかなりと言ひ、佛心と說き法性と說き祖師禪と說き菩提道と說かんも、纔かも自己を閑却せば依然として悉く趣向し去る者たることを免かれず、若し趣向の處あらば我が祖師道と遠くして早く白雲萬里なり、是れ無始劫來已れに迷ふこと久しく習ひ性となつて煩惱海中に沒溺して居るのであるから、正眼に見來れば罪過彌天である、豈に三十棒のみならんや、千生萬劫汝を棒すともその罪過は免かれ難し、して見れば投子の此の一言は決して芙蓉祖師のこととのみ思ふまいぞ、人々分上各自に深く痛痒を知らねばならぬ。

故に言下に即ち開悟し、再拜して便ち行く。敢て頭を廻さず。疑はざる處に到るやと問ふに、更に何ぞ疑はざる處に到るべきかあらん。早く關山萬里を隔て來る。故に佛祖の言句若し耳に觸るゝ時、早く我が耳を汚し畢りぬ。千生萬劫洗ひ淨むとも、淨まり難し。故に手を以て耳を掩ふて一言を容れず。此の處を子細に見得せし故に、典座の時も、乃ち曰く他を放閑ならしむと。煮飯する者に非ず。把菜する者に非ず。故に柴を搬ひ水を運ぶ、皆な行者人工の動著なり。卒に典座分上に非ず。絆を掛け釜を淨むる底、十二時中間斷なきに似たりと雖も、卒に手を下す分なく物に觸るゝ理なし。故に他を放閑し去れと言ふ。

故に芙蓉は投子の言下に即ち開悟し、再拜して便ち行く、投子が且來闍梨と呼び止めたが、敢て頭を廻さず、所謂壁立萬仞獨立無伴の行履である。投子は更に汝は疑はざる處に到るやと問はれたるに、這裡疑と不疑との論を絕して居るから、更に何ぞ疑はざる處に到るべきかあらん、若し不疑の地とい

ふものが別に他に在りと思はゞ亦是れ趣向であるから、我が大道とは早く關山萬里を隔て來る、故に此の田地に達すれば縦ひ佛祖の言句なりとも、若し耳に觸るゝ時早く我が耳を汚し畢りぬ、是を法塵といふ、此の法塵に縛せらるれば千生萬劫洗ひ淨むとも容易には淨まり難し、故に芙蓉は手を以て耳を掩ふて一言をも入れずといふ態度を現はされた。是の如く此の密處を子細に見得せし故に、典座と作りし時、典座は厨房の上首である、投子は厨務勾當即ち庫堂の全體を總轄すること易からず甚だ御苦勞であるといはれしに、芙蓉曰く、不敢、敢てそうでもござらぬ、投子曰く、粥を煮るや飯を蒸すや、佛祖の行持を行取するやと尋ねられた、芙蓉曰く、人工炊夫等は米を淘り火を著く、行者の年若き小僧等は粥を煮飯を蒸す、皆な夫々の役目を守つて居ります、投子曰く、汝甚麼をか作す、庫堂の主人公たる汝は何事をか作すや、芙蓉曰く、和尚慈悲おなさけに他の庫堂の主人公は放閑し常務を命ぜずにおゆるし下され、乃ち他を放閑ならしむと曰はれた、一心不動絶學無爲の本分を呈露せられたのである。此の主人公は煮飯するものに非ず、把菜するものに非ず、故に柴を搬ひ水を運ぶは皆な行者人工の動著なり、召使ひの者の活動である、卒に典座分上に非ず、是れは主人公と行者人工とを別箇のものと見まいぞ、その用をいへば終日活動して止まず其の體をいへば常恒湛然として動著せず、所謂動容に古路を揚げる底の行履である。故に絆をかけ釜をきよむる底十二時中佛祖の行持を行取して間斷なきに似たりと雖も、其の主人公は如々不動にして微塵も大寂定中を離れぬから卒に手を下す分なく物に觸るゝ理なし、故に他を放閑し去れといふたのである。

是の如く見得し來ると雖も、精熟せしめんとして菜園に入るに、子、柱杖を度して師に與ふ。師接得して便ち隨ひ行く。子曰く理合に恁麼なるべし。是れ和尚手づから持すべき物に非ず。物を提げざる者あることを知らしむ。乃ち熟見し來る。故に曰ふ和尚の與めに鞋を提げ杖を挈ぐるも也た分外と爲さずと。此に和尚鞋履に指を動じ柱杖を提げたる所を知れりと雖も、尚な擧手動足、分外とせずと會得せし、少しき其の怪みあり。故に試て乃ち曰く。同行の在るあり。從來ともに住して名を知らざるのみに非ず。面を知らざる老漢なり。すなはち是れ同行なり。早く見得し來ること久しし、故に師曰く那一人は教を受けずと。

此の一段以後は、師資の間に於ける祖道の參究に對して懇切周到なるを知ると同時に、投子と芙蓉と

が如何に親密にして道情の厚重なりしかを味ふべきである。芙蓉は悟後の行履着實にして是の如く大事を見得し來ると雖も、尙ほ一層の精練と圓熟とに至らしめんとして、相與に菜園に入るに臨み、投子は自分の柱杖を度して芙蓉に與ふ、芙蓉接得して便ち隨行した、すると投子は、師僧の拄杖は弟子の持つべきもの理として合に恁麼なるべしといはれた。暗に是れは和尙手づから持すべきものに非ず、和尙とは主人公を指す、主人公は本來淨躶々赤灑々にして、一塵の認むべき無く一物の見るべきは無い、即ち一物不將來で何物をも提携して居らぬ、斯く物を提げざるものあることを知らしむ、是れ事を借りて直下に主人公の眞面目を開示せられたのである。然るに芙蓉は乃ち此の主人公を見る底の智見が、成熟しきたるを以ての故に「和尙の與めに鞋を提げ杖を挈ぐるも也た分外と爲さず」、和尙の爲めならば草鞋をも提げませう柱杖をも挈げませう、如何なる御給士をするとも決して分外では無い、師資分上當然の務であるから、絕待服從して孝道を盡しませうといふた。主人公は取りも直さず自己本具の佛心である、大智慧光明も大慈悲莊嚴も皆な此の佛心に具足して圓滿無量である、是を大道と稱し又は實相と名く、佛祖も此の道の爲めに出生入死せられ、聖賢も亦此の道の爲めに進退周旋し玉へり、芙蓉の金剛堅固の大信念は道を守て動かず道に奉じて暫も背くこと無し。こゝに於て投子和尙は鞋履の中に指を動じといふは人知れず靈機の發動するをいふ、投子格外の靈機は電光の閃くが如く、一見の下に芙蓉が柱杖を提げたる所に一段の知見を有することを知れりと雖も尙ほ彼が手を擧げ足を動かすまゝが大道に對する孝順の行持にして分外とせずといふ樣に會得せしかと思はるゝ。少しき其の怪みあり、少分の疑はしきものあると認められた。故に第二回の點檢を下され、試て乃ち同行の在る有りと仰せられた、外に今一人の同行者があるぞ、此の同行者は從來ともに住して無始劫來より暫時も離れたること無し、されど名を知らざるのみに非ず面をも知らざる老漢なり、名も無く相も無い、道といふも佛といふも皆な假名字である、その本體に至つては言語道斷心行處滅である、すなはち是れが同行者なり、汝果して此の同行者あることを知るやとの再點檢である。芙蓉は早く既に此の同行者を見得し來ること久しゝ、徹底了事の漢なるが故に、師曰く那一人は敎を受けずと答へられた、その同行者は能く見得して居りますが、那一人は他に敎をも受けず、他の命令にも與からず、全く以て獨尊無爲でありますから御相手にはなりますまい、寧ろ問題になさらぬ方が宜しかろうとの答話である、是れ古人が「我れ忽ち佛法の二字を聞くも直に耳目を穢す大衆に三十棒の分あり」と言ひしと異曲同工である。

然れども、尙ほ到らざる所あり。故如何となれば、既に那一人ありて擧手に

伴はず、動足に觸れざることを知るとも、唯だ是の如く、あることをのみ知らば、尙ほ疑はしきことあり。故に投子其の時理未だ盡さず休し去る。乃ち晩に至りて師に問ふて曰く、早來の說話未だ盡さず。時に師既に有ることを知りて疑ふべきに非ず。何ぞ到らざる所かあらんと謂ふに曰く、請ふ和尙擧し來れと。時に投子示して曰く、卯には日を生じ戌には月を生ずと。殊に夜氣過ぎ去りて星移り月暗く、白雪青山に橫はりて未だ露はれず。然れども、更に群ぜずして生ずる底の日あり。日勢西山に沒して萬像影現はれず。往來人なくして、路頭辨へずとも、又更に空ぜざる底の事あり。故に月を生ず。此の田地設ひ一片に打成して餘物をも交えず、他見るなしと雖も、自から靈々赫々の處あり。早く暗昧を照破す。故に師即ち燈を點じ來る。實に到ること細やかに見ること明らかなり。故に示して曰く上來下去總に徒然ならず、既に此の處に親しき時實に十二時中閑功夫の時節なし。故に曰く和尙の左右に在ては理合に此の如くなるべしと。

投子芙蓉兩祖の間に於ける商量は細に入り微を穿ち實に至れり盡せりである、古佛の辨道に親切なるは正に是れ萬代の龜鑑として倣ひ奉らねばならぬ。芙蓉の那一人に對する見處は最も正確の如くなるも、然れども尙ほ到らざる所あるが如し、故如何となれば既に那一人ありて、手を擧げて招くも之に伴ない來らず、足を動かして進むも觸れ近づく能はざることを知得するとも、唯だ是の如く萬象を超越し色空を離脫して居るものであるといふ事をのみ知り得たならば恐くは向上の理路を弄ぶに過ぎずして眞の佛德を顯現する能はざるべし、故に其の實際の修行力に於て尙ほ疑はしきことあり、故に投子禪師は其の時理未だ盡ざゞるを認められし爲め、芙蓉を印可し玉ふに及ばずして其の儘休息し去られた。乃ち其の晩に至て更に師に問ふて曰く、早來の說話未だ盡さず、佛道の修行は實參實究を要す依て此の處に於て復たもや商量を爲すべしと仰せられた、其の時に芙蓉楷祖は既に祖門屋裏の一大事あることを知りて大安心を得、心地上一點も疑ふべきにあらず、佛法祖道面門に打開して明らかなること日月の如し何ぞ到らざる所かあらんとの大信力を有せられたから、答へていふに曰く請ふ和尙擧し來れと、和尙より先づ試みに問題を擧示せられよ、その時に投子は示して卯には日を生じ戌

には月を生ずと曰はれた。古へは晝夜の時刻を十二支に配したから晨朝は卯の刻で夕暮は戌の時である、朝には日を迎へ夕には月を觀るの意である、日光能く萬物を照し月色亦能く闇を破る、天地萬物何物か佛光明ならざる柳は綠花は紅、是れ亦一段の靈光、山高く水長し是れ亦一段の靈光、敎を受けぬとか受けるとかいふ之乎者哉は無い、森羅萬象古佛の家風、碧落靑霄道人の活計である。太祖大師慈悲徹悃故らに注脚を下して以下に此の玄旨を御示しなされた、殊に更闌けて良夜の氣色も過ぎ去りて星も次第に移り月も追々暗くなり皚々たる白雪は靑山を鎖して乾坤寂寞萬像其の形を藏して未だ現はれず、白雪一本には白雲とある雲の字を正しと思ふ然れども天行は健なり自彊息まず、暗夜の中に光明の兆を發するを以て山河大地皆な暗黑に包まれ了るものでは無い。故に然れども更に何物にも礙られず又何物にも群ぜずして暗を破て東嶺に生ずる底の大日輪あり、その日輪威勢も時と與に推し移りて終には西山に姿を沒して再び暗に戻り亦もや萬像は影を藏して現はれず、此時は往來に人の影もなくして路頭も暗に蔽はれて、東西すらも辨へずとも、又更に空ぜざる底の事あり、暗黑になり切て了はぬ、故に月を生ず日往き月來り暗去り明生ず、輪環相續し終て又始まる扨も面白き風光である、石頭大師は此の宗旨を示して「明中に暗あり暗中に明あり」と仰せられた。空即ち是れ色、色即ち是れ空、有無一如幽明不二である、暗黑の中にも光明あり、光明の中にも暗黑あり、暗しと雖も滅に非ず、明らかなりと雖も生に非ず、明暗その儘が不生不滅不垢不淨不增不減である、故に此の田地設ひ日月双び亡じ明暗兩ながら融じて一片に打成し一體になり切て更に餘の何物をも交えず他は見るべき物なしと雖も、自から靈々赫々として昧さざる處あり。靈々は玄妙にして不昧なること赫々は明白にして火の燃え立つ如く見ゆること、乃ち日月も照臨し及ばざる處更に一段の光明ありて早く暗昧を照破す、日月晝夜は是を色空とも妙有眞空とも差別平等とも見よ、此等の兩頭を超越したる心地の光明あることを徹證せねばならぬ。芙蓉は此の妙旨を體得するが故に師すなはち燈を點じ來られた、實に是れ宗乘に到ること細やかに佛道を見ること明らかなりと謂ふべし、故に投子禪師は示して上來下去總に徒然ならずと曰はれた、上來下去とは進むも退くも來るも去るもといふ意味、徒然は動かざる貌はたらきの無いむだごとの意、汝の禪機縱橫無礙なるを以て一擧一動一問一答悉く佛心祖意に投合して曾て無義無益の言動なしとの證明である。芙蓉楷祖は既に此の處に親しきを以て出息入息の上にも大道を究盡せられた、此の處とは佛祖の妙道である、此の時は實に十二時中閑功夫の時節なし、閑功夫とは無駄事のこと、平常心是道の端的喫茶喫飯も皆な辨道の活三昧である、是れ大道を崇敬し信順し融合し證契して居るからである、佛祖門下の修行は實に斯くあらねばならぬ、是れ佛祖の兒孫たる者の眞面目である。故に和尚の左右に在ては理合に此の如くなるべしと曰はれた、幸に